要旨

物部川流域圏中流部における屋敷構えの空間特性

社会システム工学コース
1215063　若林 寛和

本稿は、高知県香美市を流れる物部川流域圏中流部における屋敷構えの空間特性に関する論考である。物部川流域圏中流部の農家の屋敷構えを対象とし、その空間特性を明らかにすることを目的としている。空間特性とは、分布や方位の特性、立地や配置の特性などから伺える空間の特徴である。

屋敷構えに関する研究は全国的に行われている。集落の構成には、地形や方位、土地利用などが関係し、これは屋敷構えにも影響を与える。屋敷構えの研究では集落の構成と屋敷構えの対応関係、ひいては人々の自然環境への適応、生業とのかかわり方といった地域的特色が明らかとなりえるのである。

高知県の一級河川物部川の中流部では、農家の屋敷構えの形態が様々に確認される。集落は河岸段丘の開発により発達し、起伏に富んだ地形に棚田や屋敷がある集落風景を見ることができる。中流部の集落は河川流域圏のなかでも日照や水利といった地形的制約が様々である。平坦な地形の下流部と比べるとある程度の地形的制約を受ける一方、谷尾根の激しい上流部と比べると地形的制約に対する拘束は軽い。地形的拘束の影響を受けつつも、そこに従属しきらないのが中流部の特色が言える。物部川流域圏において、集落構成要素である屋敷の屋敷構えを知ることは流域の特質と集落に住む人々の文化を把握する上で重要である。しかし、物部川において屋敷構えに注目した研究はいまだ行われていない。現在、家屋の建て替えが進みつつあり、現時点における屋敷構えを把握する意味は大きい。

本研究は、以下のプロセスで研究を行う。まず、各集落を集落形態、立地地形により類型化を行う。次に、屋敷構えを立地地形、正面方位性、屋敷地形状、主要素である主屋、納屋、蔵の配列形式により分析する。次に、屋敷構えと地形の関係を分析する。最後に、屋敷構えの決定に関わる人為的要因について分析を行う。以上の分析結果を既往の研究より把握した他地域の屋敷構えと比較することで、物部川流域圏中流部における屋敷構えの特殊性や他の地域との共通性を明らかにする。

Abstract

Study on the spatial characterization of building layout inside rural house compounds in the middle class region in Monobe river basin

Infrastructure Systems Engineering Course
1215063 Hirokazu Wakabayashi

This study is to consider the spatial characterization of building layout inside rural house compounds in the middle class region in Monobe river basin. The spatial characterization includes characterization of the distribution and direction, or characterization of the location and arrangement.

In the middle class region in Monobe river basin, building layout inside rural house compounds are confirmed variously. In this area, there are various topographical constraints such as sunshine and irrigation. Compared with in the down class region area of the flat terrain, villages of middle class region is subject to some topographical restrictions. But the restraint against topographical constraints villages of middle class region is lighter than the up class region. Villages is under the influence of the geographical restraint, but it is not be subordinated there completely. This is a characterization of the middle class region.

First, this study categorized villages as form, site topography. Second, analyzed the site topography, the frontal orientation of the main building in the mansion building, the form of building site. And categorized building layout as the main building, the barn, and the warehouse. Third analyzed the relation between building layout and site topography. Finally, analyzed the artificial factor of building layout.
By comparing the results of the analysis with those of the other local area that I have grasped from the previous studies, this study clarified the commonality with the special characteristics of the building layout in the middle class region in Monobe river basin area and the nature of the building layout in the whole country.

目次

要旨 1
序章 8
0.1.背景 9
0.2.目的 10
0.3.既往の研究 11
0.4.研究の方法 12
0.5.研究の構成 13
第 1 章　　日本の集落と屋敷構え 14
1.1.日本の集落 15
1.1.1.集村と農村 15
1.1.2.村落の形態 16
1.2.日本の屋敷構え 18
1.2.1.屋敷構えの概要 18
1.2.2.地域と屋敷構え 18
1.2.3.地域の屋敷構えの図式化 28
小結 40
第２章　　物部川流域圏中流部の集落と屋敷構え 41
2.1.物部川流域圏中流部の概要 42
2.2.物部川流域圏中流部の歴史 43
2.2.1.中流部の開拓 43
2.2.2.中流部の交通 43
2.3.物部川流域圏中流部の集落 44
2.4.物部川流域圏中流部の屋敷構 45
小結 46
第 3 章　　物部川流域圏中流部における集落の分析 47
3.1.集落の類型 48
3.2.集落居住地の分布 50
3.2.1.集落居住地の分布分析の方法 50
3.2.2.統計に見る集落居住地の分析 51
3.2.3.地図に見る集落居住地の分布 52
小結 53

第 4 章　　物部川流域圏中流部における屋敷構えの分析 54
4.1.屋敷構えの分布 55
4.1.1.屋敷の立地 55
4.1.2.屋敷構え正面方位 56
4.1.3.屋敷地形状 58
4.1.4.屋敷構えの配置 59
4.1.5.屋敷構えの分析からわかる傾向 65
4.2.屋敷構えと地形の分析 66
4.2.1.屋敷構えの正面方位と地形 66
4.2.2.屋敷地形状と地形 70
4.2.3.屋敷地形状と配置の分析 72
4.2.4.屋敷構えと地形の分析からわかる傾向 73
4.2.屋敷構えと人為的要因 74
小結 76
第 5 章　　物部川流域圏中流部における屋敷構えの空間特性 77
5.1.物部川流域圏中流部の屋敷構え 78
5.2.物部川流域圏中流部と他地域の屋敷構え 79
5.3.物部川流域圏中流部における屋敷構えの空間特性 80
終章 81
成果と課題 82
付録 83
主要参考文献一覧 118
謝辞 120

図目次

第１章

図 1-1　山裾の集村 16
図 1-2　平野の散村 17
図 1-3（黒野弘靖、菊池成朋：村落と屋敷の対応関係から見た散村の構成原理-砺波散居村における居住特性の分析その２-、日本建築学会計画系論文集、第 507 号、p151-155、1998.5） 18
図 1-4 (菊池成朋、黒野弘靖、鈴木成文：集落空間の領域構成の特徴-仙台市藤田新田の調査　その１、日本建築学会大会学術講演梗概集（北海道）、1986.8、黒野弘靖、菊池成朋、田村友寛、鈴木成文：屋敷構えと集落空間構成の関係-仙台市藤田新田の調査報告　その４、日本建築学会大会学術講演梗概集（九州）、1989.10） 19
図 1-5（中野茂夫、藤川昌樹、安藤邦廣、後藤治、堀江亨、黒板貴裕：つくば市の集落空間と屋敷地の構成-大村・金田村・洞下村を事例に-、日本建築学会計画論文集第 578 号,p139−145、 2004.4） 20
図 1-6（宮崎美夏、坪井千尋、小嶋雅代、増井正哉、米田麻衣子、上野邦一：徳島県祖谷地方の山間集落における景観保存に関する研究-その２　屋敷地と建物の外観の形状の現状と変遷、日本建築学会近畿支部研究報告集、2002） 21
図 1-7（別所匠、大森洋子：阿蘇カルデラ内に立地する農村集落の屋敷地の空間構成に関する研究、日本建築学会九州支部研究報告第 53 号、2014.3） 21
図 1-8（横田麻琴、黒野弘靖：中山間地の地形的特徴と生活からみた〈逆谷〉集落の空間構成、日本建築学会北陸支部研究報告集第 49 号、2006.7） 22
図 1-9（河村晋吾、松森一行、内田文雄：離島農村集落の住空間構成　集落の生活空間構成に関する研究　その２、日本建築学会大会学術講演梗概集（東海）、2003.9） 23
図 1-10（清水綾子、大場修：旧東海道沿いの街道集落における家屋配置と平面構成　甲賀市旧市場村を事例として、平成 22 年度日本建築学会近畿支部研究発表会、2010） 23
図 1-11（山本直彦、平尾和洋、宮内杏里：歴史的風土特別保存地区における民家の屋敷構えに関する研究-明日香村の奥山・飛鳥・河原・野口・岡・島庄の六大字を事例として-、日本建築学会計画系論文集、大 81 巻、第 721 号、p675-685、2016.3） 24
図 1-12（石田寿信：総社町山王集落における集落形成と屋敷構成の特徴について－養蚕住宅及び集落の形成・変化・継承に関する研究 - その１-、日本建築学会関東支部研究報告集、p569-572、 2009） 25
図 1-13（月舘敏栄、佐々木嘉彦、渡辺正朋、梅津光男、戸部栄一：雪と屋敷構え-積雪地における生活的・空間的対応に関する研究(その８)、日本建築学会東北支部研究報告集、p157-160、1984） 26
図 1-14（青木秀史、畔柳昭雄：荒川流域における水屋・水塚を備えた屋敷の立地状況とその空間変容に関する研究、日本建築学会計画論文集第 80 巻第 710 号 p851−861、 2015.4） 27
図 1-15　平野部にみられる屋敷構え１ 28
図 1-16　平野部にみられる屋敷構え２ 29
図 1-17　台地に見られる屋敷構え 30

図 1-18　山間部にみられる屋敷構え１ 31
図 1-19　山間部にみられる屋敷構え２ 32
図 1-20　山間部にみられる屋敷構え３ 33
図 1-21　島にみられる屋敷構え 34
図 1-22　街路との関係にみられる屋敷構え 35
図 1-23　条里制と関連にみられる屋敷構え 36
図 1-24　生業との関係にみられる屋敷構え 37
図 1-25　気候と生活に関する屋敷構え 38
図 1-26　河川に注目した研究にみられる屋敷構え 39

第 2 章
図 2-1　平野・台地の屋敷構え 45
図 2-2　平野・台地の屋敷構えの図 45

第 3 章
図 3-1　地形による類型 49
図 3-2　中流部の居住地の立地の割合 51
図 3-3　居住域の立地地形の分布 52

第 4 章
図 4-1　屋敷構えの立地地形 55
図 4-2　両岸、右岸、左岸における主屋の向きの割合 57
図 4-3　屋敷地形状の類型化 58
図 4-4　屋敷地形状：全体（170） 58
図 4-5　主屋と納屋の配置関係による分類 59
図 4-6　配置型の分類における割合 60
図 4-7　主屋に対する納屋の位置による分類 60
図 4-8　右納屋・左納屋の分類における割合 60
図 4-9　屋敷内における蔵の配置による分類 61
図 4-10　屋敷内の蔵の配置場所における割合 61
図 4-11　屋敷内における蔵の配置による分類 62
図 4-12　屋敷の右側、左側のどちらに蔵が配置されるかによる分類 62
図 4-13 蔵が前面に置かれるものにおいて、屋敷の右側、左側のどちらに蔵が配置されるかによる分類 63
図 4-14　敷地内における主屋、納屋、蔵の配置による分類 64
図 4-15　屋敷構えの正面方位の分布 66

図 4-16　正面方位が南側を向くものの分布 67
図 4-17　正面方位が南以外を向くものの分布 68
図 4-18　正面方位が南側を向くものの分布 69
図 4-19　屋敷地形状：平地と斜面地 70
図 4-20　屋敷地形状：平地の細分類 70
図 4-21　屋敷地形状の分布 71
図 4-22　屋敷地形状と屋敷構えの配置との関係 72
図 4-23　永野村谷内西における人為的要因が見られる屋敷構え 74
図 4-24　永野村谷内西における人為的要因が見られる屋敷構えの変化 74
図 4-25　韮生野・美良布の屋敷構えの配置型の分布 75
図 4-26　小川における共通に規定された屋敷構え 75

第 5 章
図 5-1　物部川流域圏中流部における自然要因と人為的要因 79

表目次

第 3 章
表 3-1　明治 40 年代における各居住地の形態 48
表 3-2　中流部の居住地の立地地形の分類 51

第 4 章
表 4-1　両岸、右岸、左岸における主屋の正面方位 56

序章

0.1　研究の背景

屋敷構えに関する研究は全国的に行われている。集落において、屋敷は要素のひとつであり、屋敷構えは集落の構成に応じた形態をとっている。集落の構成には、地形や方位、土地利用などが関係し、これは屋敷構えにも影響を与える。屋敷構えを知ることで、その集落に住む人々の地域への応答が明らかとなる。一般に、屋敷内の家屋の配置や屋敷畑の土地利用などには地域的性格が反映される。つまり、屋敷構えの研究では集落の構成と屋敷構えの対応関係、ひいては人々の自然環境への適応、生業とのかかわり方といった地域的特色が明らかとなりえるのである。

高知県中部を流れる一級河川物部川の中流部では、農家の屋敷構えの形態が様々に確認される。中流部は古くからの開墾により、集落は河岸段丘により発達し、起伏に富んだ地形に棚田や屋敷がある集落風景を見ることができる。中流部の集落は河川流域圏のなかでも日照や水利といった地形的制約が様々である。平坦な地形の下流部と比べるとある程度の地形的制約を受ける一方、谷尾根の激しい上流部と比べると地形的制約に対する拘束は軽い。地形的拘束の影響を受けつつも、従属しきらないところに中流部の特色がある。

物部川の上中流部にかけて、河川は北東から南西に向けて流れるため日照条件が右左岸で異なる。具体的には、左岸では段丘の南に山があり、日照条件に難があるため屋敷は平地の山際までにしか立地しない。右岸では、南の山による日照制限がないため屋敷は平地から山腹にかけて、さらに支流沿いの谷筋に立地する傾向にある。物部川流域圏の中で中流部の集落はそれぞれの地形的制約に対応し、多様な容態となり得る環境であったと考えられる。

また、流域圏というまとまりには、流域圏の集落群が一つの文化圏を形成することに注目が置かれる。氾濫などの災害への対策、舟や河川に沿う道を利用した物流のやり取りなどから、生活と生業、気候やその災害対策の知恵、宗教などが共通する地域的まとまりが形成されるのである。

物部川流域圏においても同様に集落構成要素である屋敷の屋敷構えを知ることは流域の特質と集落に住む人々の文化を把握する上で重要である。しかし、物部川において屋敷構えに注目した研究はいまだ行われていない。全国的に見られる少子高齢化や過疎化は高知県においても例外ではなく、物部川流域圏中流部にもその影響が見られる。人のいなくなった集落の放棄や住居の廃屋化、古い住居の建て替えも進む状況において、現時点における屋敷構えの把握は重要な意味を持つ。

0.2　研究の目的

本研究は、物部川流域圏中流部の屋敷構えを対象とし、その空間特性を明らかにすることを目的としている。

空間特性とは、分布や方位の特性、立地や配置の特性などから伺える空間の特徴である。本研究では、屋敷構えの関わる要素を類型化によって分析し、それらによって構築される屋敷構えの特徴を明らかとする。具体的には、農家の屋敷構えをその立地地形、正面方位、屋敷地形状、主要素である主屋、納屋、蔵の配列、各要素と地形の関係など幾つかの観点から分析する。また、既往の研究より把握した日本の他地域における屋敷構えと比較することで、物部川流域圏中流部と他地域の共通性や特殊性を明らかにする。

0.3　既往の研究

集落研究において屋敷構えの研究は様々な地域で行われている。一般に屋敷内の家屋の配置や屋敷畑の土地利用には地域的性質が反映され、そこに住む人々の生業との関係とともに、自然環境への適応を見ることができる。屋敷構えをみることでその地に暮らす人々が生業、そして自然環境とどう関係を持ったかがわかる。

中野ら(2004)によるつくば市での集落形態と屋敷地構成の研究[1)]では、近世の集落の空間構成について資料と現地調査から明らかにし、集落と屋敷配置の関係を街路の方位と主屋の向きに焦点をあてて分析している。山本ら（2016）は奈良盆地の条理集落において屋敷構えを類型した中で最も割合の大きい型の派生型体系を分析し、集落形態と街路軸の方位との関係から屋敷構えを分析している[2)]。河川を対象とした研究においても屋敷構えの空間特性の分析が行われている。青木ら(2015)の荒川流域における水屋・水塚を備えた屋敷に関する研究[3)]がある。上流、中流、下流それぞれの集落形態の変化、水害対策として共通要素のある屋敷構えの立地状況、屋敷の断面構成から空間構成とその変容を明らかにしている。他にも平地や山間といった地形、街路との関係、気候や生業といった要素との関係に注目した研究などがある。

屋敷構えの研究の多くに共通することは、集落形態とそれを形づくる道、そこに付随する屋敷構えとの対応関係を見ることである。さらに、関係を見る上で重視されるのが要素の方位や向きであり、その要素とは、街路軸の方位、付随する屋敷の道に対する位置、屋敷内の主屋の向きが主たるものである。各地の屋敷構え研究では、集落形態、道、屋敷構え、方位の４つの視点を基本とし、それぞれの地域の特徴的要素との関係を見ることでその地域における屋敷構えの特徴を明らかにしている。

本研究では、対象地域を物部川流域圏中流部の物部川と接する 32 大字とし、主屋、納屋、蔵を備えた屋敷構えの空間特性を明らかにする。屋敷か甘えを分析し、既往の研究から把握した他地域の屋敷構えと比較することで。物部川流域圏中流部における屋敷構えの他地域との共通性や特殊性を明らかにする。

0.4　研究の方法

本研究では、物部川流域圏中流部の屋敷構えを考察するにあたって、1.文献調査、2. 現地調査、3.地図の分析の３種の手法に基づき研究を行う。調査結果は GIS（地理情報システム）で統合する。

1.　文献調査

文献調査では、物部川流域圏中流部の集落の概要や歴史、交通などの資料、またそれに関わる地図を分析し、現在の中流部の現況に当てはめ、道や渡し舟の場所の特定を行う。重要な資料として香北町史[4)]を用いる。

2.　現地調査

現地調査では、主屋、納屋、蔵を備える屋敷構えの悉皆調査を行う。調査には、地図、三色ボールペンを持参し、屋敷構えの位置、屋敷内の建物（主屋、納屋、蔵）の配置、接道状況を書き記す。現地調査は 2018 年 3 月から 2018 年 11 月までの間に行う。

3.　地図の分析

自動車交通が主流となる以前の徒歩交通における集落と街路の関係を把握するため、明治 40 年代発行の縮尺 5 万分の一の地図を使用する。当該地図から読み取った街路の位置を現在の街路体系に重ね合わせ、なお、現在の街路体系の分析に用いる資料としてゼンリン住宅地図と国土地理院発行の航空写真を用いる。

4.　GIS 統合

本研究では、GIS（地理情報処理システム）を活用して研究を進める。現地調査により確認した屋敷構えを GIS データとして位置を記録することで、地図データから道や集落の中に置ける屋敷構えの位置を把握する。

0.5　研究の構成

序章では、研究の背景、目的、構成、方法、既往の研究について書き記す。

第 1 章では、まず日本の集落について基本となる集落の分類を示す。次に、日本各地にみられる屋敷構えについて既往の研究をもとにまとめる。

第 2 章では、物部川流域圏中流部について、文献調査によってその概要と歴史、集落、屋敷構えについて把握する。

第 3 章では、物部川流域圏中流部における集落について、居住地形態、立地地形について類型とその分布について示す。分布については、居住地の立地地形について中流部全体において統計と地図を用いて分布を見る。

第 4 章では、物部川流域圏中流部における屋敷構えについて分析する。まず、屋敷構えの要素について、屋敷の立地、正面方位性として主屋の正面の向き、屋敷地形状、屋敷構えの配置の観点から分析を行う。次に、屋敷構えと地形との関係について分析を行う。最後に、屋敷構えの決定要因として人為的要因について分析を行う。

第 5 章では、第 4 章の屋敷構えの分析をまとめるとともに、第 1 章でまとめた他の地域における屋敷構えと比較を行う。最後に、他地域の屋敷構えと比較によって物部川流域圏中流部における屋敷構えの空間特性をまとめる。

終章では、本研究における成果と課題をまとめる。

第１章

日本の集落と屋敷構え

1.1　日本の集落

1.1.1　集落と農村

集落とは、もともと人間が町や村を作って居住する状態をさす言葉である。しかし、この状態が示すものは単に建造物としての家屋の集合体だけではない。家屋のみではなく、これに付随する土地、道路、水路、空き地、そのほか住居以外の日常生活の舞台をも含めての総称であって、一定地域における居住形態こそが集落という言葉の示すものである。集落はこの言葉の意味より大別すると村落と都市に分類される。村落は土地とのつながりが強く、主として農業、林業、漁業などの第一次産業への依存度が高い。対して都市は第二次産業である商工業への依存度が高く、複雑多肢な性格を持ちえる。

村落は地理的機能から分類すると農村・山村・漁村に分けられる。村落はその土地の様子や住民の生業などからその形態や民家の構造にも差異が生まれる。これら 3 つの分類の中では農村が大多数を占め、その分布域も極めて広い。

日本では古くより稲作を中心とする農業経営が行われて農村生活の基盤を形成している。山村や漁村であっても、全く耕地を持たないところは稀であり、その広さは多様であるが田畑の耕作を行っている。日本は山地が多く平地が乏しいため、丘陵や山腹の斜面を利用した階段耕作を行ったり、小さな島を寄木細工のように細分割して畑地としてきた。農村生活では水は必要不可欠な存在であり、村落形態と密接な関係を築くことが少なくない。近代になると土木技術の進歩によって水利の便の悪いところにも集落が形成されるようになる。このような集落は新田集落であることが多く、計画的設定村落である列状村落を形成している場合が多い。

現在では、交通網の整備によりあらゆるところへ自動車を用いた移動が可能となり、それまで整っていた徒歩交通による人と物資の移動は自動車を主としたものへと変化した。自動車のための道路の整備は、徒歩交通が主であった集落の構造を一変させるだけでなく人々の生業にも変化を与え、村落のあり方は大きく変化している。

1.1.2　村落の形態

村落をその形態、すなわち、村落を構成する民家の集まり方から類型すると大きく 2 つの形態があるとされる。矢嶋(1956)は、民家がある場所にかたまって村落を形成する「集村」、広い場所にかなり分散して村落を形成する「散村」の大きく二つに分類している。集村のうち、不規則な塊状を呈する村落は「塊村」と呼ばれている。集落は特に人間が意図しない限りは自然発生的に形成され、民家が一塊になって集合しているものや、地形や水利または交通の制約を受けて不規則な線状を形成することもある。街路や水路などに沿って成立した開拓村落は「列状村落」と呼ばれ、街路への依存度により大きく「路村」と「街村」に分けられる。主に農業集落であり街路への依存度が低く、民家の集合度が比較的疎なものを「路村」、門前町や市場町などの商業集落で街路への依存度が高く、民家の集合度が密なものを「街村」と呼ぶ。

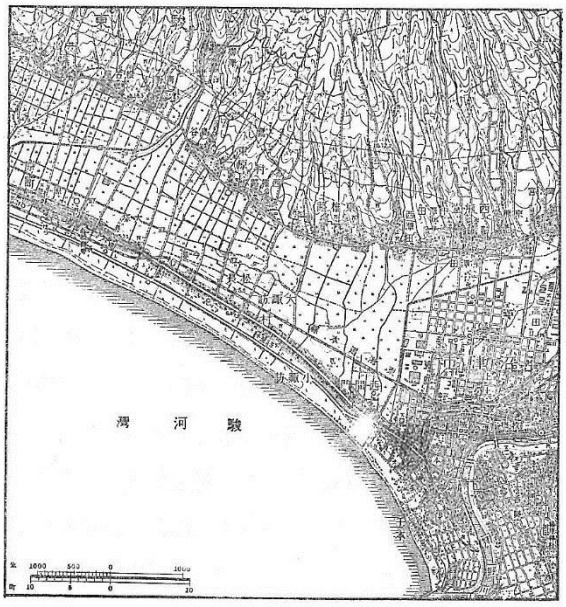


図 1-1　山裾の集村（八嶋仁吉「集落地理学」古今書院、1956）
山際に立地する集落は塊村、海岸付近の街道沿いの集落は列状村落の形態を呈している

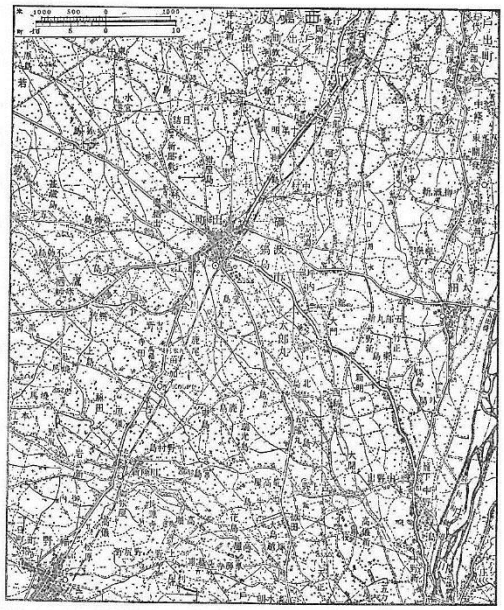


図 1-2　平野の散村（八嶋仁吉「集落地理学」古今書院、1956）

1.2　日本の屋敷構え

1.2.1　屋敷構えの概要

屋敷構えとは屋敷内の家屋の配置形式を示し、一般にそこに住む人々の生業や地域的特性が反映されるものである。屋敷構えについての文献や既往研究からみても、日本における標準型といえる屋敷構えの記述はみられない。それは、島国である日本には山脈によって日本海側と太平洋側に分かれる中で沿岸部、平野部、山間部と様々な地形条件が存在し、合わせて気候条件も異なる。各地域によって似かよる部分はありながらも屋敷構えは各地域によって多様に存在しえると考えられる。

屋敷構えを構成する要素には、居住棟である①主屋を中心として、②蔵、③収納と作業場をかねた納屋、便所、風呂、井戸、畜舎などが付属屋として建てられる。必ずしもこれらの付属屋が全て備えられるわけではなく、その地域の地形、生業、気候によって付属屋の種類は変わり、その配置形式も異なる。

1.2.2　地域と屋敷構え

a. 平野部にみられる屋敷構え

黒野・菊池らによる集落形態と屋敷との対応関係からみた栃波平野の散村の構成原理に関する研究（1988）[5]では、圃場整備による集落と屋敷構えの変化を道と水路の変化から分析を行っている。整備前のアクセス路は主屋へ正面方向から伸びており、屋敷内を流れる水路の向きがオモテ-ウラの方向を生み配置を規定していた。主屋の前面に納屋と蔵は並列し、納屋はウラ、蔵はオモテに置かれる。

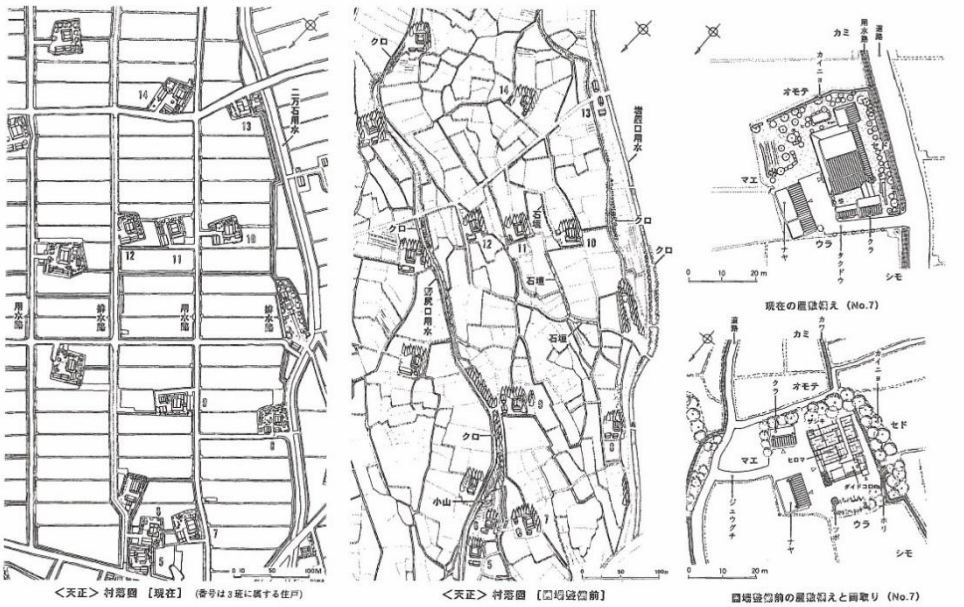


図 1-3（黒野弘靖、菊池成朋：村落と屋敷の対応関係から見た散村の構成原理-砺波散居村における居住特性の分析その２-、日本建築学会計画系論文集、第 507 号、p151-155、1998.5）

また、同じく黒野・菊池らによる仙台市の新田集落のアプローチ路のとられ方と主屋、付属屋の配置における研究（1989）[6)7)]では、東西に通る街路に対して短冊状に宅地割された路村の集落において、西側をカミ、東側をシモと呼びカミ - シモによる方位性が集落の構成と屋敷構成に及んでいることを指摘している。カミ - シモはこの地域の水の流れと一致し、屋敷構成はカミ側に屋敷神・屋敷林・倉などを、シモ側に便所・風呂・厠・作業場が置かれる。屋敷へのアプローチと付属屋の配置形式から類型化を行っており、アプローチが敷地を貫く軸中心型は当初の宅地割を保つ例が多く、アプローチが主屋の前で止まる庭中心型は軸中心型の短冊状の敷地が街路と平行に前後に 2 分された敷地に多い。付属屋のない主屋独立型は農業を営まず集落外に働きに出る住人の家であることが明らかとなっている。

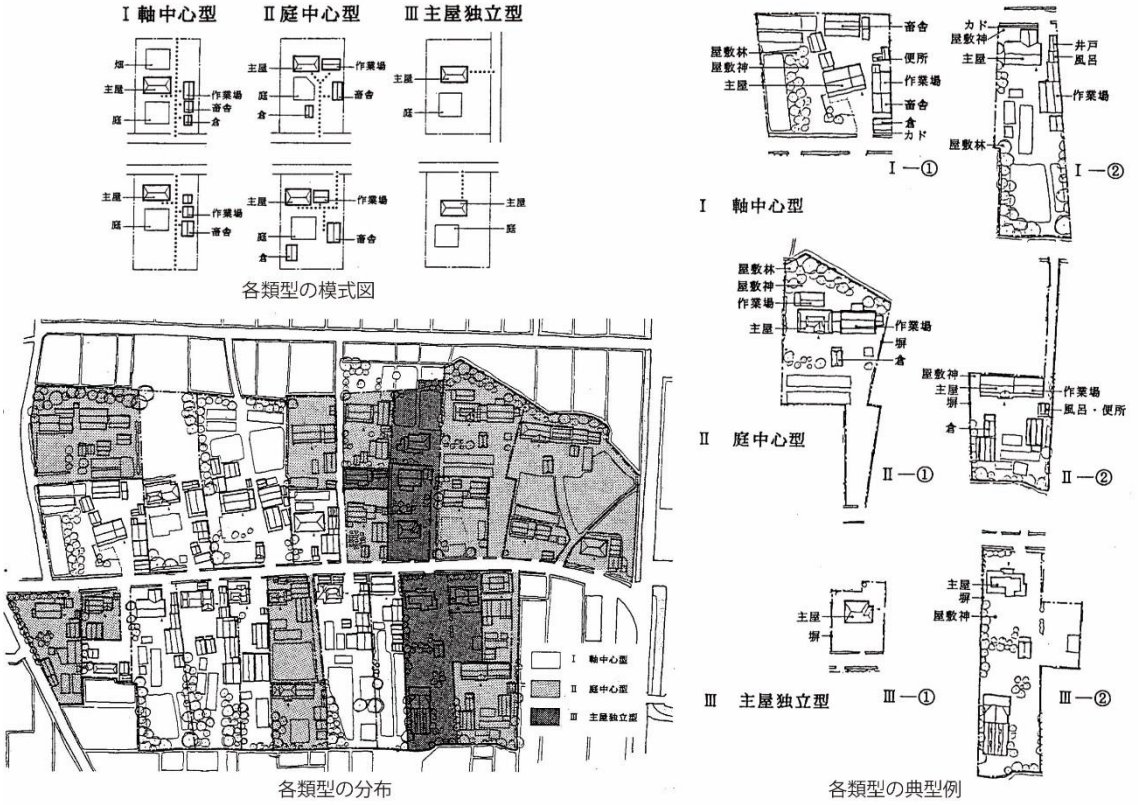


図 1-4 (菊池成朋、黒野弘靖、鈴木成文：集落空間の領域構成の特徴-仙台市藤田新田の調査　その１、日本建築学会大会学術講演梗概集（北海道）、1986.8、

黒野弘靖、菊池成朋、田村友寛、鈴木成文：屋敷構えと集落空間構成の関係-仙台市藤田新田の調査報告　その４、日本建築学会大会学術講演梗概集（九州）、1989.10）

b. 台地ににみられる屋敷構え

中野らによるつくば市の村落を集落形態と屋敷配置との関係から読みといた研究（2004）[1)]を見ると、常総台地上の旧村は塊村と街村が多く、塊村は川沿いの低地に分布し、街村は東西軸の道路と南北軸の道路に沿う 2 種があった。これらの集落の形態は屋敷内部の空間構成を規定しており、主屋の正面を南に向けるため道路から主屋へのアプローチは前面、側面、背面の 3 つに分類される。塊村では 3 つ全てが確認され屋敷が道路の北側では前面、東西側では側面、南側では背面となる。東西軸の街村では道路の北側では前面、南側では背面となる。南北軸の街村では側面となる。

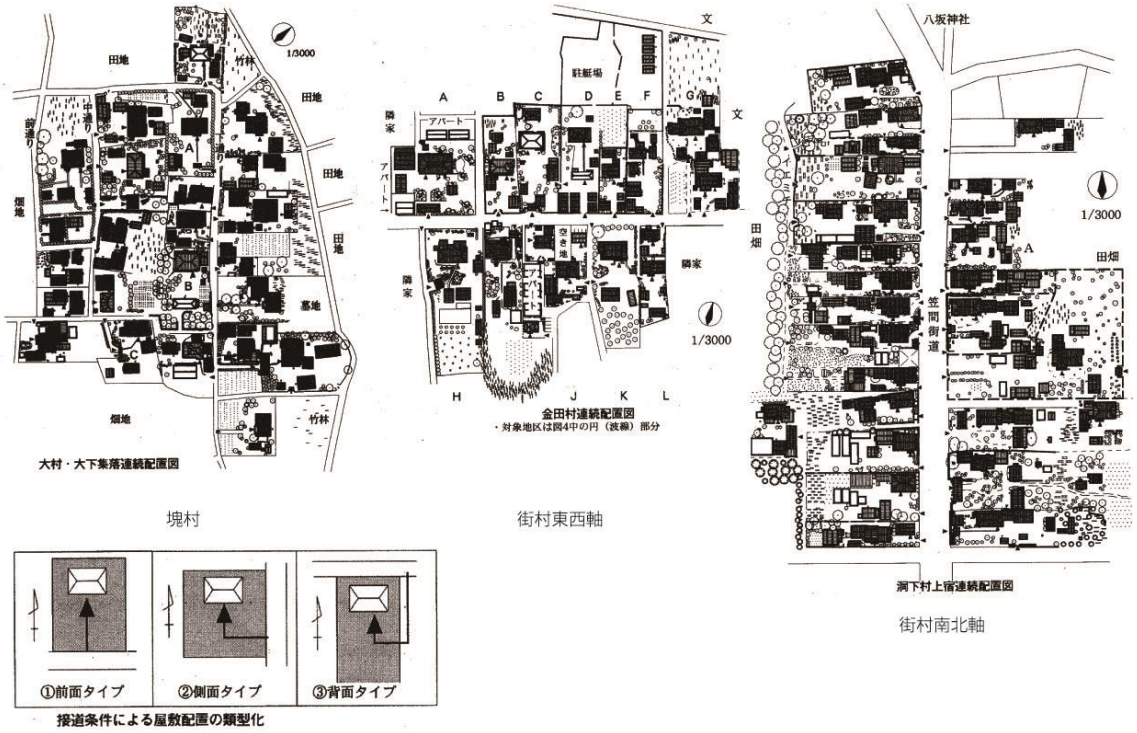


図 1-5（中野茂夫、藤川昌樹、安藤邦廣、後藤治、堀江亨、黒板貴裕：つくば市の集落空間と屋敷地の構成-大村・金田村・洞下村を事例に-、日本建築学会計画論文集第 578 号,p139−145、 2004.4）

c. 山間部ににみられる屋敷構え

宮崎らによる徳島県祖谷地方の屋敷と建物の外観の現状と変遷についての研究（2002）[8]を見ると、屋敷は等高線に沿って細長く、奥行きは浅い。建物は山を背に負い、谷に表を向けると共に外庭を設けている。屋敷構えは主屋を中央に両側に納屋、隠居屋を配するもの、主屋の隣に納屋、隠居屋を配するものの 2 つの形態をとる。

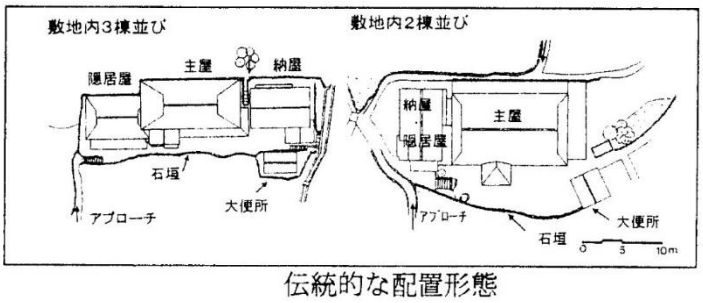


図 1-6（宮崎美夏、坪井千尋、小嶋雅代、増井正哉、米田麻衣子、上野邦一：徳島県祖谷地方の山間集落における景観保存に関する研究-その２　屋敷地と建物の外観の形状の現状と変遷、日本建築学会近畿支部研究報告集、2002）

別所らによる阿蘇カルデラ内に立地する農村集落の屋敷の空間構成に関する研究（2014）[9]では屋敷構えは、主屋の正面は阿蘇谷や南郷谷に関わらず南を向けられる。納屋は主屋の左に置かれ、敷地の奥行きが広ければ納屋の正面を東に向け主屋と納屋が L 字型となるように配置される。蔵は南に主屋と向き合うように配される。

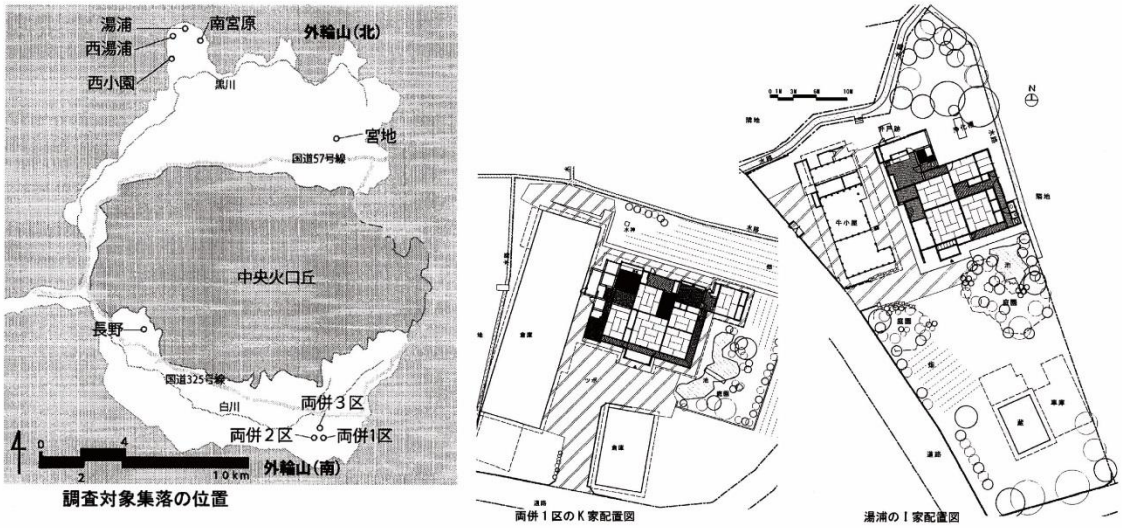


図 1-7（別所匠、大森洋子：阿蘇カルデラ内に立地する農村集落の屋敷地の空間構成に関する研究、日本建築学会九州支部研究報告第 53 号、2014.3）

また、横田らによる中山間地の地形的特徴と生活からみた〈逆谷〉集落の空間構成（2006）[10]では、谷を流れる川と、川と平行に通る主要な街路を中心として家々が建ち並んでおり、ほとんどの主屋が入口を道路側にしている。河川改修以前の集落は、カワ - 庭 - 主屋・畑 - 横井戸 - 山林という構成となっていた。付属屋を所有する屋敷が多く、付属屋の配置の仕方で屋敷構えの分類を行うと、付属屋が主屋の前方または後方に並ぶ「前後型」、街路に対して平行に並ぶ「並行型」、付属屋を所有しない「付属屋なし」、以上の 3 つに属さない「その他」に分類された。付属屋には土蔵、テンジングラ、以前は豚小屋、牛小屋だった小屋と呼ばれるものがある。それぞれの分布を見ると、山林が迫っている屋敷では主屋と付属屋を並列に配置し、街路と水路、山林との間に比較的広く屋敷を構える場合は付属屋を前後や斜め前方に配置する。小屋は個々の屋敷の地形に対応して配置される。土蔵は冠婚葬祭用の食器類や座布団、衣装が収納され、テンジングラは米蔵であった。土蔵は道路側に、テンジングラは主屋の後ろの高い位置に配置され、集落全体で共通の配置が取られていた。

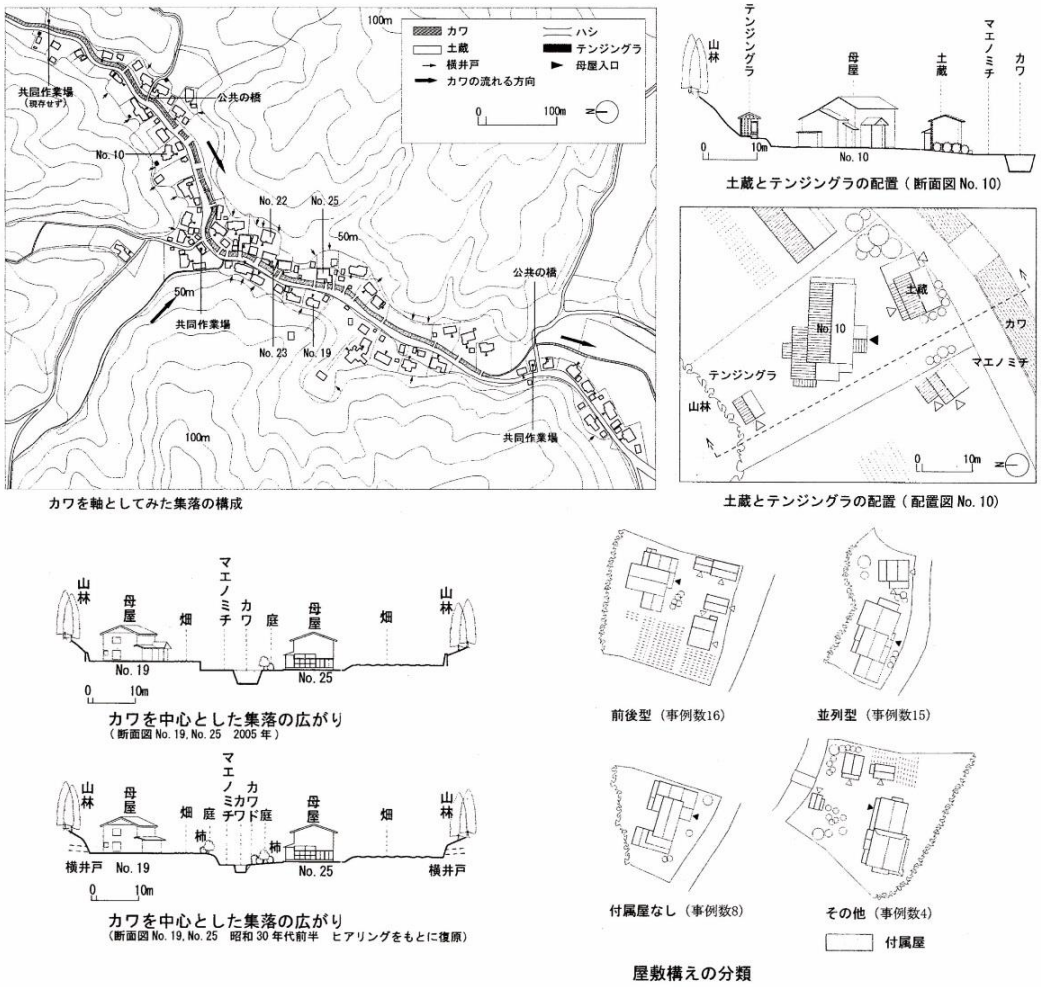


図 1-8（横田麻琴、黒野弘靖：中山間地の地形的特徴と生活からみた〈逆谷〉集落の空間構成、日本建築学会北陸支部研究報告集第 49 号、2006.7）

d. 島ににみられる屋敷構え

河村らの瀬戸内海の離島での農村集落の空間構成に関する研究（2003）[11]に見ることができる。離島では狭小な平地に多くの人口が密集したため、農村集落でありながら狭い土地に建物が密集してする。このため街路空間も狭く、建物の大半が 2 階建てか 3 階建てであり、農村集落としては珍しい景観となっている。屋敷構えは敷地北側に主屋を置き、付属屋は主屋南側の庭を囲むようにして敷地境界沿いに建てられる。さらに、隣家の建物や塀が敷地境界に沿って建つことで、屋敷内部は中庭としての性格を強めている。

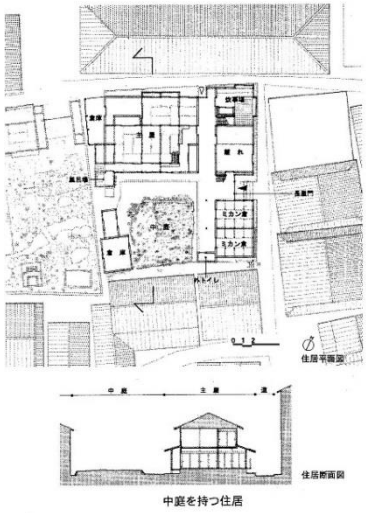


図 1-9（河村晋吾、松森一行、内田文雄：離島農村集落の住空間構成　集落の生活空間構成に関する研究　その２、日本建築学会大会学術講演梗概集（東海）、2003.9）

e. 街路との関係ににみられる屋敷構え

清水らによる旧東海道沿いの街道集落における家屋配置と平面構成の研究（2010）[12]を見ると、甲賀市旧市場村は東西に走る東海道の南北に家屋が建ち並ぶ農村集落である。主屋は通りと並行に道と接して建てられ、敷地の奥行きは深く主屋の裏に中庭、蔵、作業小屋が配される。通り沿いの家屋は南北共に街道に面して座敷を設ける。南北に屋敷が建ち並ぶがその屋敷構えは街道を軸として線対称となる。

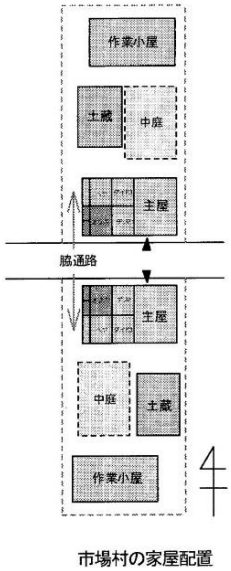


図 1-10（清水綾子、大場修：旧東海道沿いの街道集落における家屋配置と平面構成　甲賀市旧市場村を事例として、平成 22 年度日本建築学会近畿支部研究発表会、2010）

f. 条里制と関連にみられる屋敷構え

山本らによる歴史的風土特別保存地区における民家の屋敷構えの研究（2016）[2)]を見ると、研究対象地区には塊村と街村の村落があり、そこに見られる屋敷構えを主屋と付属屋の配置形式により類型したところ全体の 3/4 がカギ型に分類された。カギ型で可能な屋敷構えの派生型体系を示し、実際の屋敷構えでその割合を見たところ、屋敷の北東と南西の位置となる建物を避ける傾向がわかった。この要因として、鬼門と裏鬼門による家相との関係、日当たりの問題との関係を指摘している。村落形態ごとに北東と南西を空ける条件でカギ型の派生体系を見たところ、塊村の場合は S 型配置に向かって角屋・付属屋が増築される。東西軸街村の場合は、主屋が接道条件により南側か北側のどちらかに増築される半 S 型配置、南北軸街村でも同様に半分の屋敷構えとなるが、半逆 S 型配置であることを明らかにしている。蔵は北西隅または南東隅に配置されるのが一般的であり、これは街路軸との方向には影響を受けず絶対方位で決まるとされる。

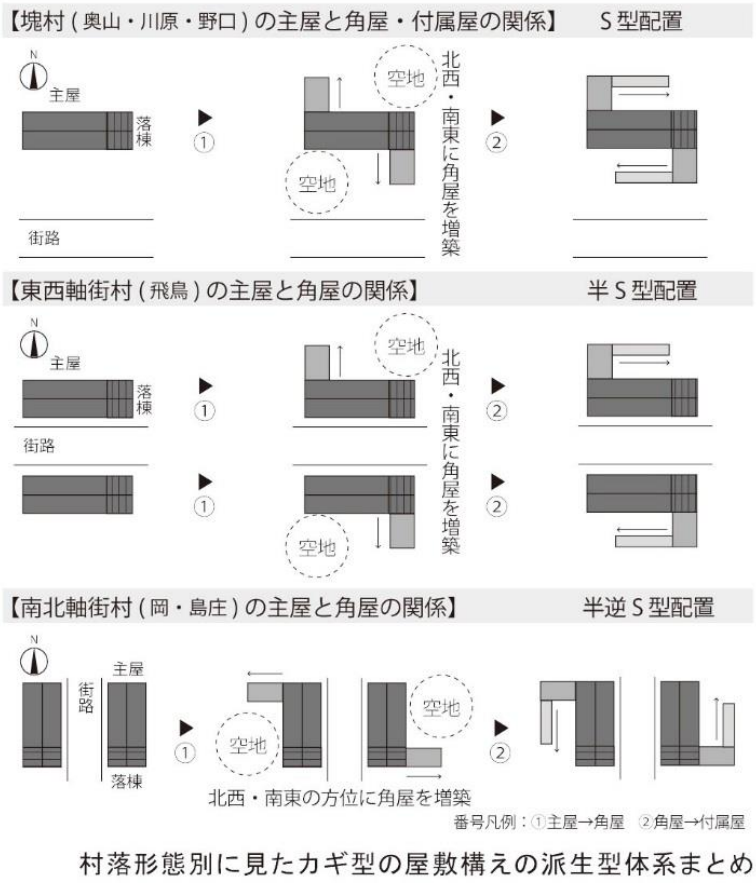


図 1-11（山本直彦、平尾和洋、宮内杏里：歴史的風土特別保存地区における民家の屋敷構えに関する研究-明日香村の奥山・飛鳥・河原・野口・岡・島庄の六大字を事例として-、日本建築学会計画系論文集、大 81 巻、第 721 号、p675-685、2016.3）

g. 生業との関係にみられる屋敷構え

石田らによる養蚕住宅の集落の形成と変化、継承に関する研究（2009）[13]を見ると、群馬県山王集落は大型の養蚕住宅が数多く存在する塊村であり、集落中央東西に往還が通っている。屋敷は往還南北に展開し、屋敷へのアクセスは接道条件によって様々であるが、養蚕住宅は屋敷北側に配置され必ず南面し、右入りとなっている。また、接道の方位に関わらず養蚕住宅入口近くに便所棟、車庫が置かれ、庭を挟んだ南側に蚕室、物置が置かれる。

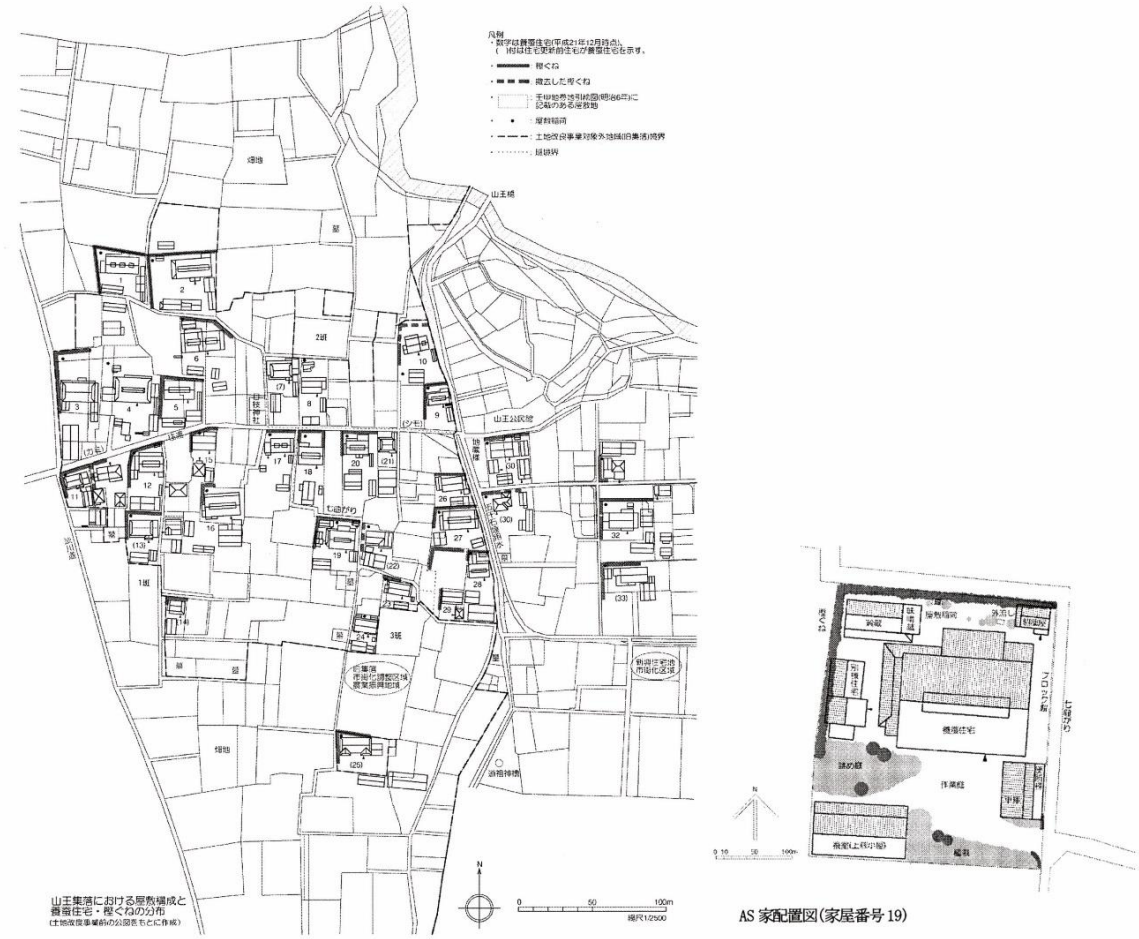


図 1-12（石田寿信：総社町山王集落における集落形成と屋敷構成の特徴について－養蚕住宅及び集落の形成・変化・継承に関する研究 ・その１-、日本建築学会関東支部研究報告集、p569-572、 2009）

h. 気候と生活にみられる屋敷構え

月館らによる雪と屋敷構えについての研究（1984）[14]を見ると、青森県大川原集落の伝統的屋敷構えの型は主屋、納屋、蔵、用水路を屋敷に持ちコートハウス状をとる。雪囲いが設けられ、主屋と納屋の間には冬季に仮設のローカが設けられる。この伝統的屋敷構えと雪対策は生活の変化や道路などの外部条件によって変化しているが、その中でもより大きな要因となっていたのは自動車の駐車スペースであった。その結果除排雪量の増大を招いている。

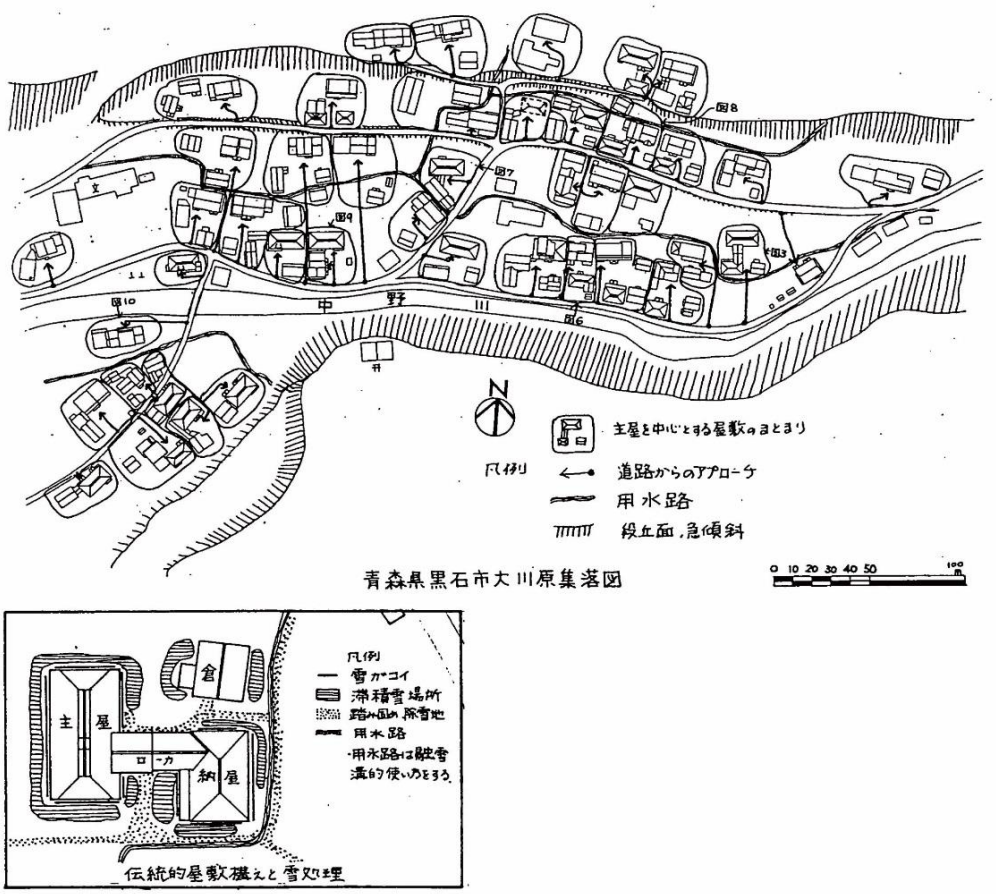
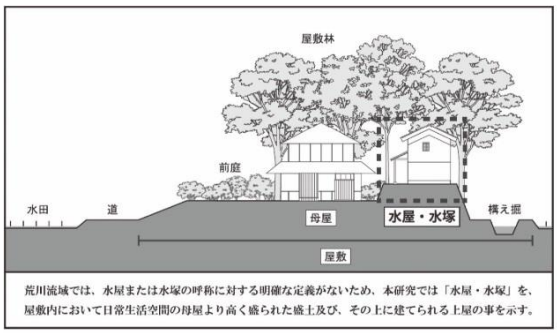


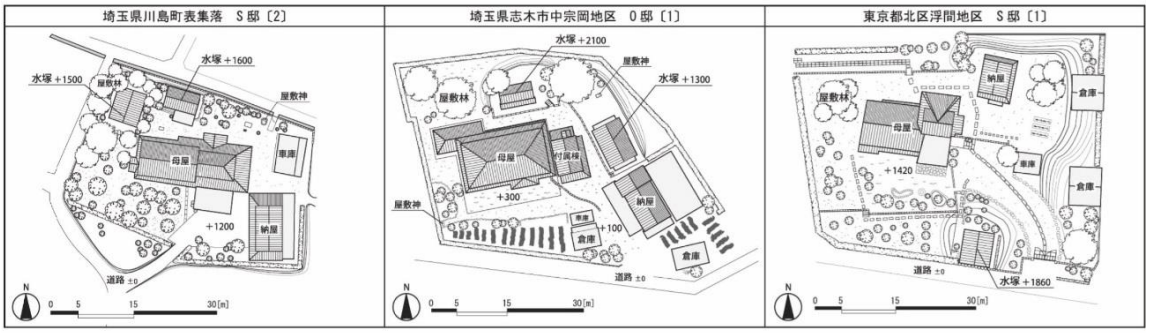
図 1-13（月舘敏栄、佐々木嘉彦、渡辺正朋、梅津光男、戸部栄一：雪と屋敷構え-積雪地における生活的・空間的対応に関する研究(その８)、日本建築学会東北支部研究報告集、p157-160、1984）

i. 河川に注目した研究にみられる屋敷構え

荒川における青木らの研究（2015）[3]では、河川流域において増水時の氾濫による浸水、冠水などの水害を被ってきた地域には流域に住むリスクから芽生えた災害対策の文化が形成されることに注目し、その文化の一つである水屋・水塚について研究をしている。水屋・水塚とは洪水時に避難する場所として食べ物や資産を置き、非常時の生活場所である。荒川では水屋・水塚を備えた屋敷は自然堤防上に立地し、屋敷は主屋、付属屋などの日常生活空間と水屋・水塚のある水害時の避難空間により構成される。双方の空間を機能的に位置づけ、レベル差を設けることで水害に対応していた。



水屋･水塚を備えた屋敷の家屋形態



調査対象の屋敷における家屋の配置構成

図 1-14（青木秀史、畔柳昭雄：荒川流域における水屋・水塚を備えた屋敷の立地状況とその空間変容に関する研究、日本建築学会計画論文集第 80 巻第 710 号 p851−861、 2015.4）

既往の研究に見るように主屋を南面させることと、屋敷と街路の接道条件から屋敷構えを設定することが多くの地域に共通で見られる要因であると考えられる。これらの要素に加えて、それぞれの地形的性質が反映されると共に生業に必要な空間が加えられ、その場所の気候に対する生活の知恵が関わることで多様な様態となっている。屋敷構えにおける蔵の配置については、いくつかの決定要因がみられ、その要因としては屋敷内のオモテ‐ウラの関係、鬼門や裏鬼門といった家相との関係がある。屋敷内のオモテ‐ウラの概念に関わるものとしては屋敷が立地し隣接する街路や集落内を流れている水路、川などが関係していると考えられる。

1.2.3　地域と屋敷構えの図式化

a. 平野部にみられる屋敷構え

黒野・菊池らによる集落形態と屋敷との対応関係からみた栃波平野の散村の構成原理に関する研究[5)]

屋敷構えの決定要因に地形と集落構成（道とカワ）が関係している。

・集落形態：散村

・街路・水路（圃場整備前）：集落内を細く曲がりくねり網目状に通る。

・屋敷構え（圃場整備前）：アプローチは主屋の正面に延びておりセドには屋敷林が構えられる。屋敷内には水路（カワ）が流れ、その向き（カミ - シモ）が屋敷内にオモテ - ウラを規定する。蔵はオモテ、納屋はウラに配置される。

・主屋向き - 完全に南面するわけではなくそれぞれが微地形や、道路、水路に対応していた。

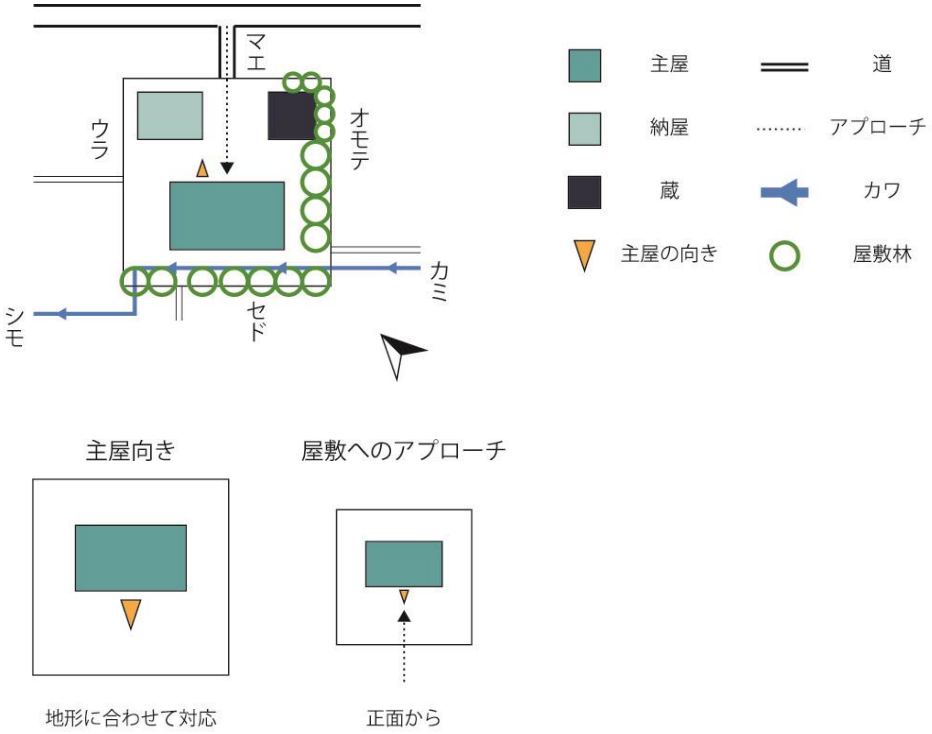


図 1-15　平野部にみられる屋敷構え 1

黒野・菊池らによる仙台市の新田集落のアプローチ路のとられ方と主屋、付属屋の配置における研究[6)7)]

屋敷構えの決定要因に集落構成（道と川）、方位が関係している。

・集落形態：街村

・街路・川：東西に街路が通る。水の流れがカミ - シモを規定し、ここでは西がカミ、東がシモである。

・屋敷構え：カミ側に屋敷林、蔵など、下側に作業場、便所、風呂などが構えられる。屋敷構えをアプローチと主屋と付属屋により類型すると 3 つに分類される。アプローチが敷地を貫く軸中心型はアプローチを軸といて主屋と付属屋がその両側に配置される。アプローチが主屋の前で止まる庭中心型は庭の周囲に付属屋が配置される。付属屋のない主屋独立型は車庫、倉庫を除く付属屋がない。

・主屋向き - 南向き

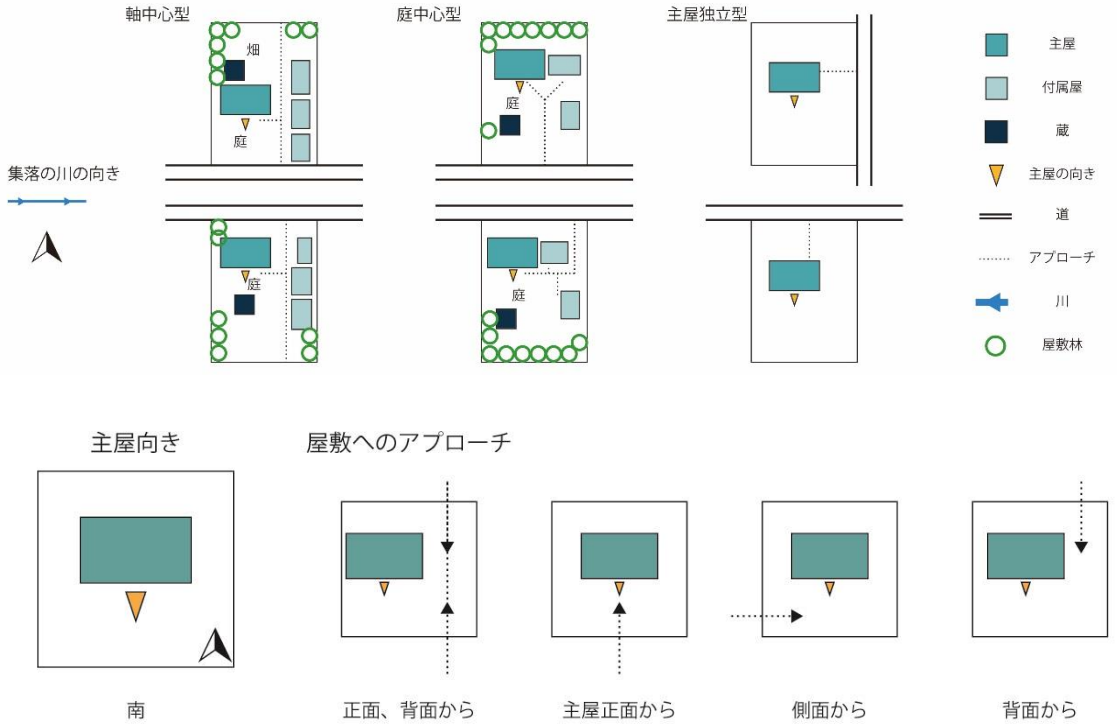


図 1-16　平野部にみられる屋敷構え 2

b. 台地に見られる屋敷構え

中野らによるつくば市の村落を集落形態と屋敷配置との関係から読みといた研究[1)]

屋敷構えの決定要因に集落構成（道）と方位が関係している。

・集落形態：塊村と街村

・街路：街村は東西軸道路の街村、南北軸道路の街村に分類される。

・屋敷構え：主屋は正面を南に向けるため接道条件によって主屋へのアプローチは前面、側面、背面の 3 つに分類される。塊村ではそれぞれの集落の空間的特質に合わせて主屋を南面させるため、全てのタイプが存在する。おおむね屋敷が道路の北側に位置する場合は前面タイプ、道路の東または西に位置する場合は側面タイプ、道路の南側に位置する場合は背面タイプとなる傾向が強い。東西軸の街村では、道路の北側では前面タイプ、南側では背面タイプとなる。南北軸の街村ではほとんどが側面タイプの配置構成をとる。

・主屋向き - 南向き

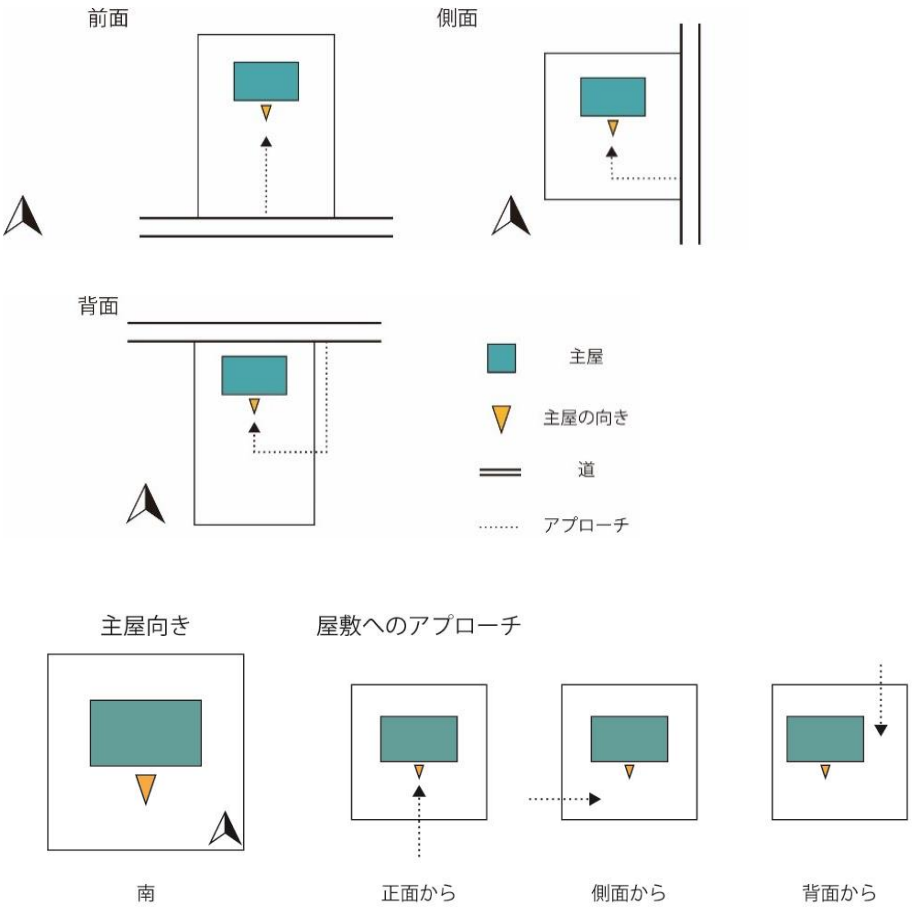


図 1-17　台地に見られる屋敷構え

c. 山間部にみられる屋敷構え

宮崎らによる徳島県祖谷地方の屋敷と建物の外観の現状と変遷についての研究[8)]

屋敷構えの決定要因に地形が関係している。

・屋敷構え：急斜面を切り盛りして前後に石垣を築き敷地を造成する。屋敷は等高線に沿って細長い、奥行きは浅い。建物は山を背に負い、谷にオモテを向けて建つ。屋敷構えは主屋を中央へ置き、両側に納屋、隠居屋を配するものと主屋の隣に納屋、隠居屋を配するものがある。アプローチは建物の側面、背面からとなる。

・主屋向き - 谷にオモテを向ける。

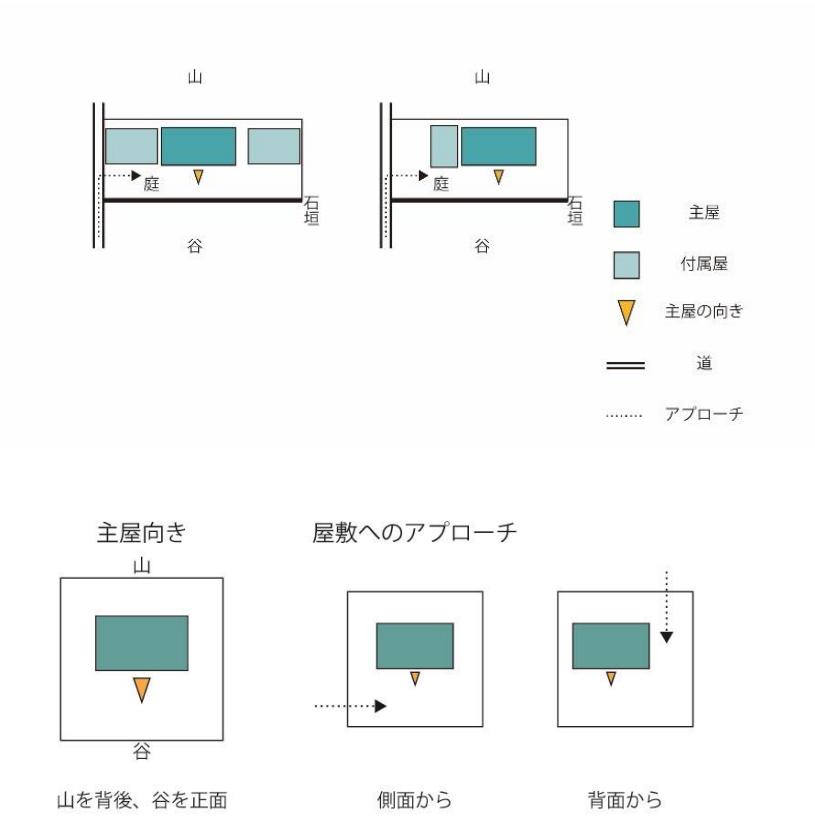


図 1-18　山間部にみられる屋敷構え 1

別所らによる阿蘇カルデラ内に立地する農村集落の屋敷の空間構成に関する研究[9)]

屋敷構えの決定要因に方位が関係している。

・屋敷構え：伝統的な農家の屋敷構えは、主屋の正面を南に向ける。納屋は主屋の左手、主屋の西側に置かれる。敷地の奥行きが広ければ、納屋の正面を東に向け主屋と納屋で庭を囲むようにＬ字型におかれる。蔵は庭の南に主屋と向かい合うように配置される。

・主屋向き - 南向き

図 1-19　山間部にみられる屋敷構え２

横田らによる中山間地の地形的特徴と生活からみた〈逆谷〉集落の空間構成[10)]

屋敷構えの決定要因に地形、集落構成（道、川）が関係している。

・集落形態：塊村

・街路・川：谷地形の中央流れる川に沿って並行に道路が通る。

・屋敷構え：川に沿った山裾に屋敷が構えられ、ほとんどの主屋が正面を道路側にするため川を挟み両岸の主屋が向き合う形態となる。付属屋の配置で類型を行うと、付属屋が主屋の前方または後方に並ぶ「前後型」、街路に対して平行に並ぶ「並行型」、付属屋のない「付属屋なし」、以上に当てはまらない「その他」に分類される。付属屋には土蔵、テンジングラ、小屋などがある。山林が迫っている屋敷では主屋と付属屋を並列に配置し、比較的広く屋敷を構える場合は付属屋を前後や斜め前方に配置する。小屋は個々の屋敷の地形に対応して配置される。土蔵は屋敷の道路側に、テンジングラは主屋の後ろの高い位置に配置される。

・主屋向き - 集落を貫く道路と川に主屋を向ける。主屋が必ずしも南面するわけではない。

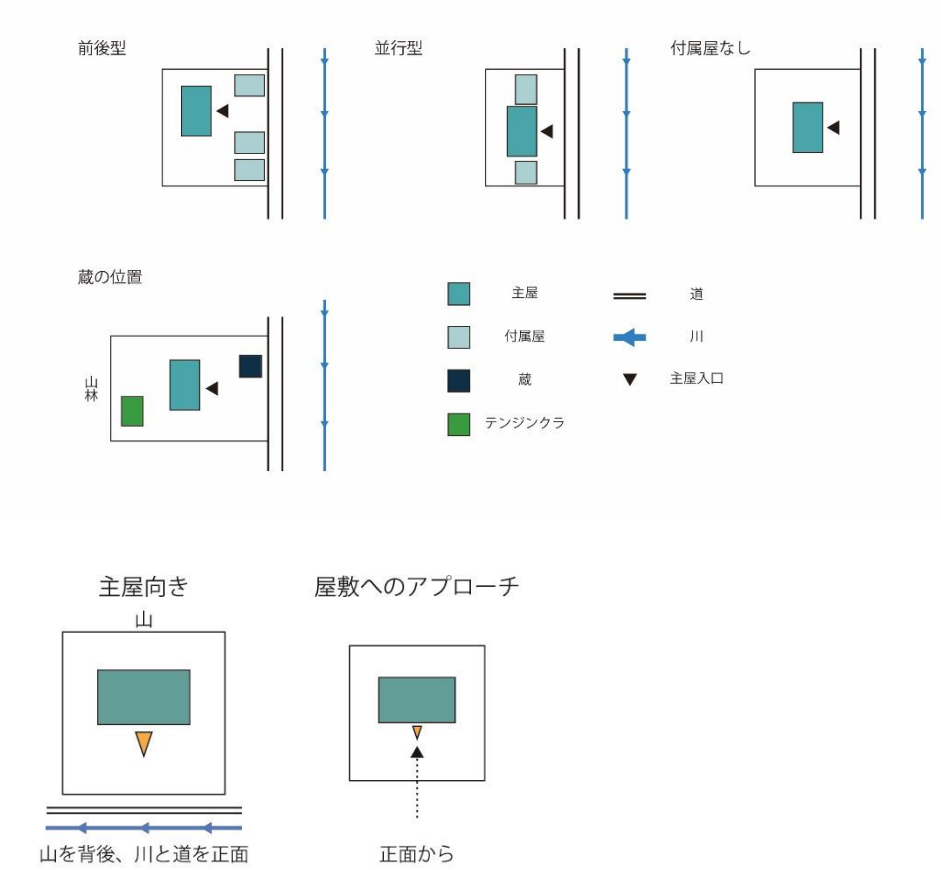


図 1-20　山間部にみられる屋敷構え 3

d. 島にみられる屋敷構え

河村らの瀬戸内海の離島での農村集落の空間構成に関する研究[11)]

屋敷構えの決定要因に採光・通風を確保する密集地における生活が関係している。

・集落形態：塊村

・街路：狭小な土地に多数の建物が密集して建ち、街路空間は極めて狭い。

・屋敷構え：敷地北側に南入りの主屋が建ち、付属屋が付属屋は主屋南側の庭を囲むようにして敷地境界沿いに建てられる。付属屋には、農業用倉庫、炊事場、風呂場、トイレ、離れ、みかん倉、長屋門が含まれる。隣家の主屋や納屋、塀などが敷地境界線に沿って建つことで、庭が中庭としての機能を強めている。また、居住空間の不足、集落の高密化に対応するため建物の大半が 2 階建てか 3 階建てである。

・主屋向き - 南向き

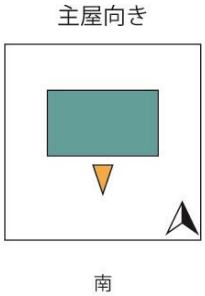


図 1-21　島にみられる屋敷構え

e. 街路との関係にみられる屋敷構え

清水らによる旧東海道沿いの街道集落における家屋配置と平面構成の研究[12)]

屋敷構えの決定要因に集落構成（道）が関係している。

・集落形態：路村

・街路：東西に走る東海道沿い。

・屋敷構え：主屋は通りに並行に建てられ、多くは道に接している。主屋の裏は敷地の奥行きが深く中庭、蔵、作業小屋が建てられる。作業場への通路を主屋の脇に設けるものも多い。街道沿いに並ぶ家屋は南北共に方位に関係なく街道に面して座敷を設ける。南北に屋敷が建ち並ぶがその屋敷構えは街道を軸として線対称となる。

・主屋向き - 方位に関係なく街路を向く（南または北）。

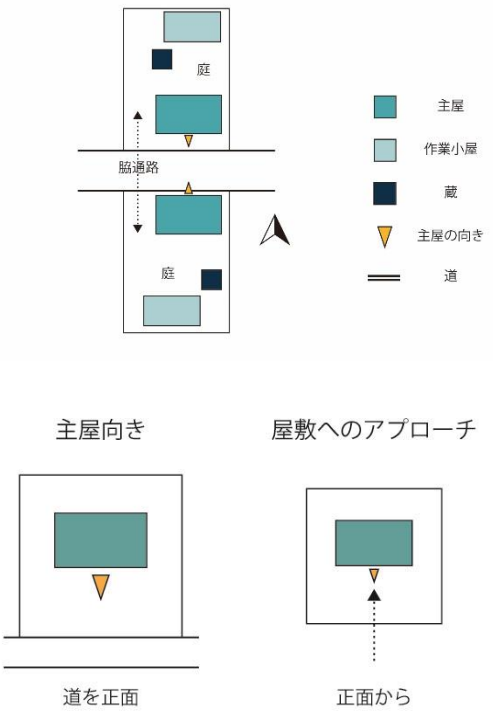


図 1-22　街路との関係にみられる屋敷構え

f. 条里制と関連にみられる屋敷構え

山本らによる歴史的風土特別保存地区における民家の屋敷構えの研究 2)

屋敷構えの決定要因に方位と集落構成（道）が関係している。

・集落形態：塊村、街村

・街路：街村は東西軸道路の街村、南北軸道路の街村に分類される。

・屋敷構え：カギ型の屋敷構えが多い。村落形態ごとに北東と南西を空ける条件でカギ型の派生体系を見ると、塊村の場合は S 型配置に向かって角屋・付属屋が増築される。街村では接っする道と反対側に主屋が増築され、道を境に点対称な型を取る。東西軸街村の場合は、主屋の位置より南側か北側のどちらかに増築される半 S 型配置、南北軸街村では半逆 S 型配置となる。この要因として、鬼門と裏鬼門による家相との関係、日当たりの問題との関係を指摘している。蔵は北西隅または南東隅に配置され、これは街路軸との方向には影響を受けず絶対方位で決まる。

・主屋向き - 南、東西。

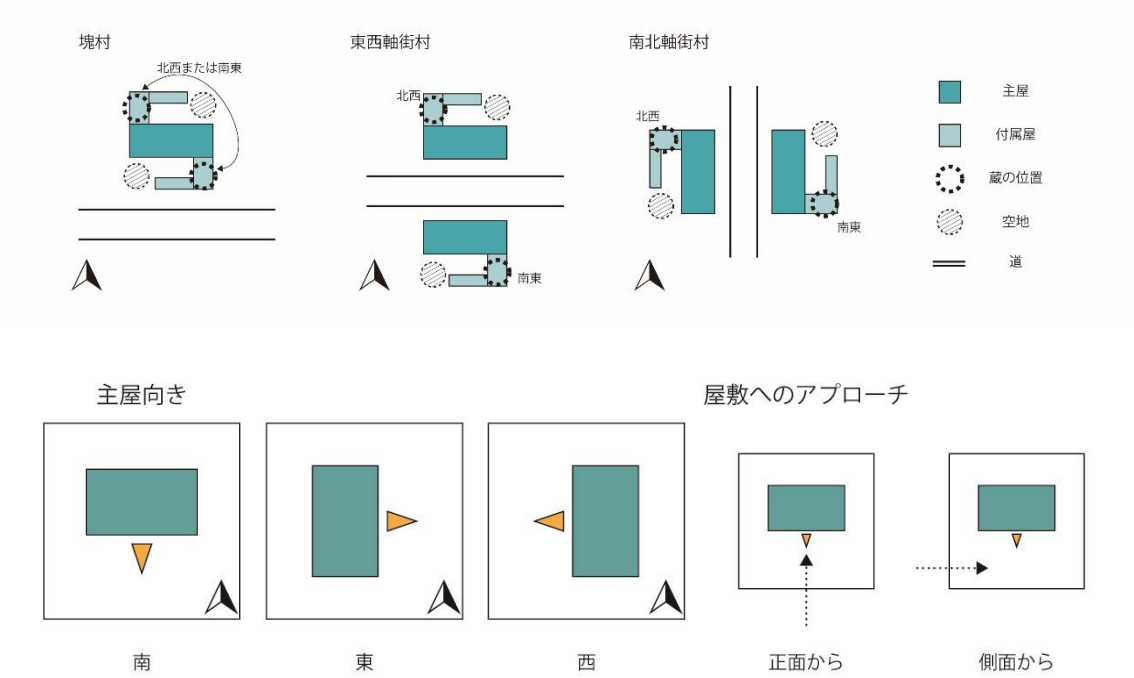


図 1-23　条里制と関連にみられる屋敷構え

g. 生業との関係にみられる屋敷構え

石田らによる養蚕住宅の集落の形成と変化、継承に関する研究[13)]

屋敷構えの決定要因に生業（養蚕）と方位が関係している。

・集落形態：塊村

・街路：集落中央を東西に往還が通る。

・屋敷構え：屋敷北側に養蚕住宅、接道の方位に関わらず養蚕住宅入口近くに便所棟、車庫が置かれ、庭を挟んだ南側に蚕室、物置が置かれる。屋敷の北と西には樫ぐねを回す。

・主屋（養蚕住宅）向き - 南（右入り）

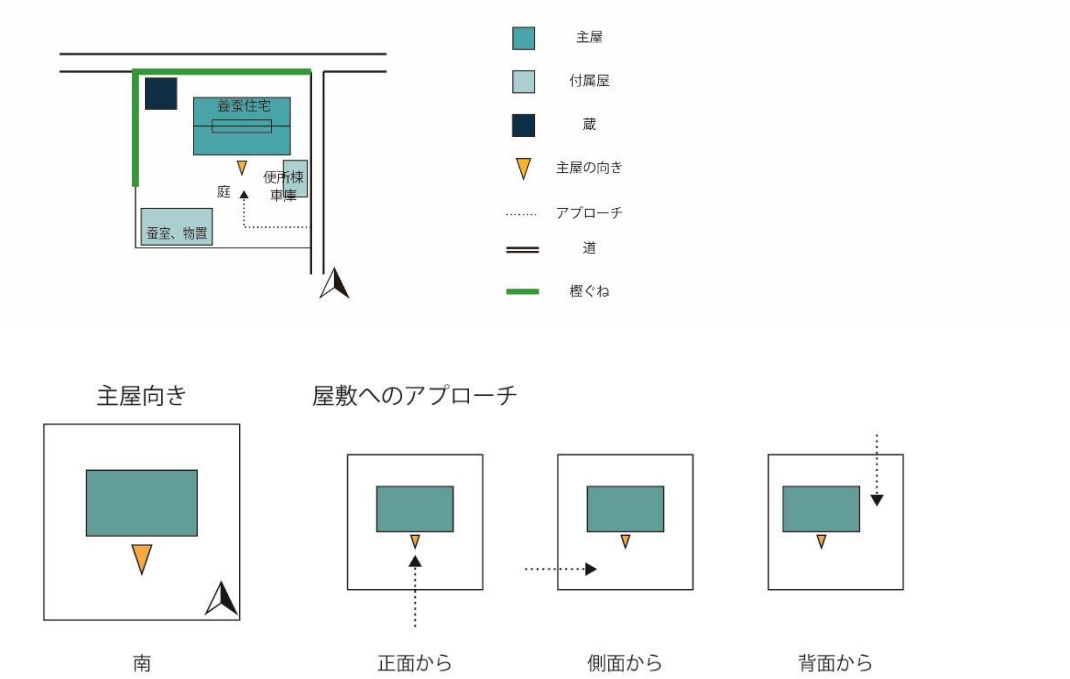


図 1-24　生業との関係にみられる屋敷構え

h. 気候と生活に関する屋敷構え

月館らによる雪と屋敷構えについての研究[14)]

屋敷構えの決定要因に方位と気候への生活の対応が関係している。

・集落形態：塊村

・街路：大きく集落内を東西方向に道が通る。

・屋敷構え：伝統的屋敷構えの型は主屋、納屋、蔵、用水路を屋敷に持ちコートハウス状をとる。雪囲いが設けられ、主屋と納屋の間には冬季に仮設のローカが設けられる。

・主屋向き - 南向き

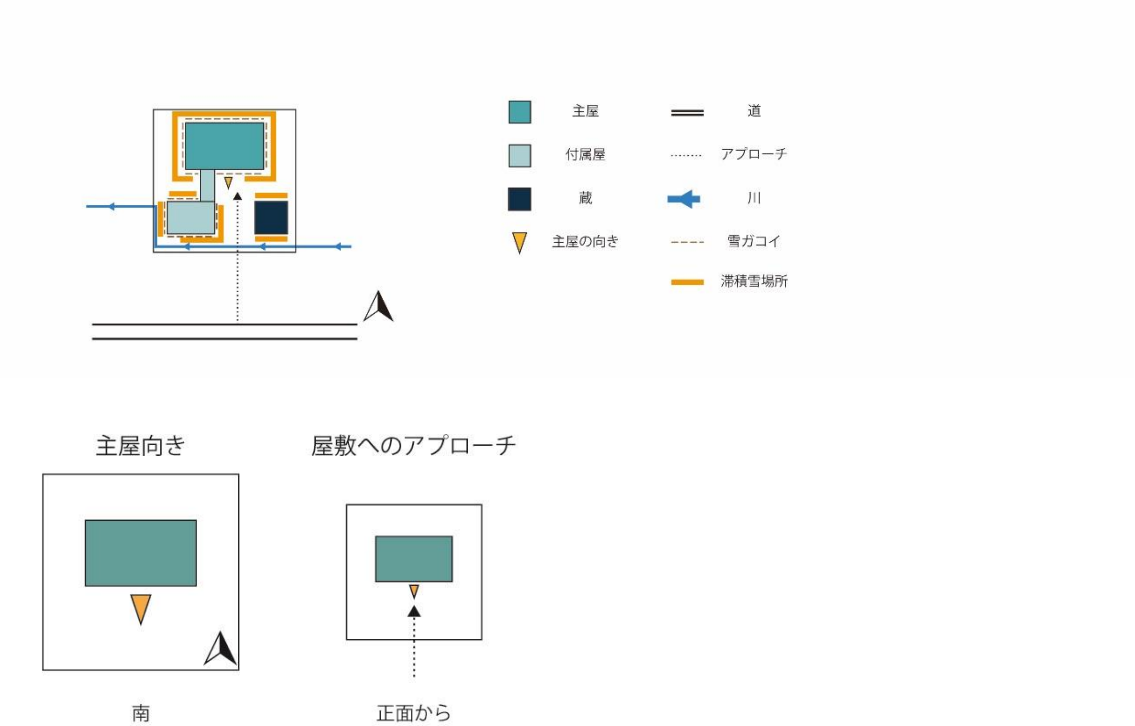


図 1-25　気候と生活に関する屋敷構え

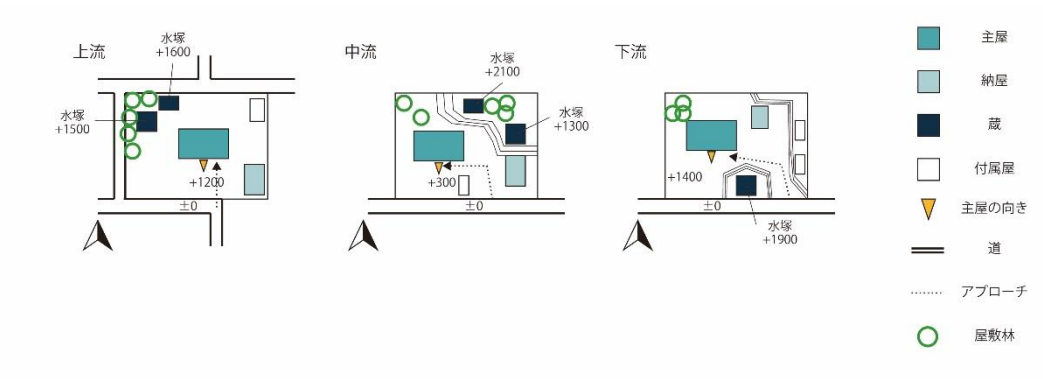
i. 河川に注目した研究にみられる屋敷構え

青木らの荒川流域における水屋・水塚を備えた屋敷に関する研究 3)

屋敷構えの決定要因に洪水に対する生活が関係している。

・屋敷構え：水屋・水塚を備えた屋敷は自然堤防上に立地し、屋敷は主屋、付属屋などの日常生活空間と水屋・水塚のある水害時の避難空間により構成される。双方の空間を機能的に位置づけ、水害に対応するためレベル差を設ける。

・主屋向き - 南向き



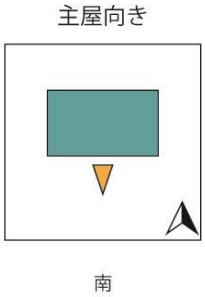


図 1-26　河川に注目した研究にみられる屋敷構え

小結

集落は村落と都市に分類できる。中でも村落は土地とのつながりが強く、主として農業、林業、漁業などの第一次産業への依存度が高い。地理的機能から分類すると農村・山村・漁村に分けられ、その土地の様子や住民の生業などからその形態や民家の構造にも差異が生まれる。村落を構成する民家の集まり方から類型すると大きく「集村」、と「散村」二つに分類できる。集村のうち、不規則な塊状を呈する村落は「塊村」と呼ばれ、街路や水路などに沿って成立した開拓村落は「列状村落」と呼ばれる。

屋敷構えとは屋敷内の家屋の配置形式を示し、一般にそこに住む人々の生業や地域的特性が反映される。屋敷構えについての文献や既往研究からみても、日本における標準型といえる屋敷構えの記述はみられなかった。屋敷構えを構成する要素には、①主屋を、②蔵、③納屋、便所、風呂、井戸、畜舎などが付属屋として建てられる。その地域の地形、生業、気候によって付属屋の種類は変わり、その配置形式も異なる。

既往の研究から、主屋を南面させることと、屋敷と街路の接道条件から屋敷構えを設定することが多くの地域に共通で見られる要因である。また、集落によっては集落内を流れる川や接する川に影響を受けているもの地形の影響や生活形式が様態に表れているものも見られる。蔵の配置については、いくつかの決定要因がみられ、屋敷内のオモテ‐ウラ、鬼門や裏鬼門といった家相が関係すると考えられる。

第 2 章

物部川流域圏中流部の集落と屋敷構え

2.1　物部川流域圏中流部の概要

物部川は高知県中部を流れる一級河川である。その流域は高知県香美市の白髪山を水源として南西へと流れ、途中中流部にて向きを南に変え、その後香長平野に出て扇状地を形成しつつ太平洋へと注ぐ。上流部には剣山国定公園、別府峡等があり豊かな自然環境が残されている。下流部に広がる香長平野は高知県最大の穀倉地帯であり、稲作のほか施設園芸も盛んである。上流部から下流部への地形変化の間に位置する中流部には河岸段丘が発達し、多くの集落が河岸段丘上に形成されている。中流部における流路は香美市杉田までは北東から南西へと流れ、杉田から流路を南へと変える。川に並行して両岸に山並みが縦走し、いくつかの支流が物部川へと注いでいる。右岸と左岸は物部川を境に南北に位置し、河岸段丘と背後の山並みが南北で位置を逆転する地形となっている。右岸に県道 218 号線、左岸に国道 195 号線が物部川と並行に走り物部川沿いの集落間を繋いでいる。かつては、左岸の山を越えた南側に塩の道と呼ばれる塩や物資を運搬する道が沿岸部の赤岡から山間部の大栃方面にかけて通っており、左岸の集落は塩の道へと繋がる道が存在していた。

中流部は古くより土地の開墾が行われており、江戸時代になると山腹に至るまで開墾が行われていた。そのため、農林業が盛んに行われており、中流部にみられる集落の多くが農村集落である。集落は河岸段丘上の開発により発達し、起伏に富んだ地形に棚田や屋敷がある集落風景を見ることができる。

集落はもともといくつかの郷に分かれており、それぞれの場所に役場が設けられていた。これらの集落は町村制施行後に合併を重ね、1900 年代半ばごろの中流部は香北町、土佐山田町の大きく 2 つに属していた。その後、2006 年に 2 つの町村と上流部に当たる物部村が合併し現在の香美市となった。かつての集落ごとのまとまりの名残は地図に残る大字・小字から確認することができる。

2.2　物部川流域圏中流部の歴史

2.2.1　中流部の開拓

中流部は古くより人々の生活が営まれてきた場所であり、旧石器時代から近世の遺跡が発見されている。それらは、美良布、韮生野、朴ノ木、吉野、永野などの河岸段丘上に分布し、ほとんどは集落に関わる遺跡であると考えられている。これら遺跡の遺構より古代から現在まで、人々は中流部に生活を営み田畑をつくってきたことがわかる。その間多くの為政者がこの地を治め開拓が進められてきたが、最も大きく開墾が押し広げられたのは藩政時代関が原の戦い以後である。戦乱の後、この地を治めていた長宗我部氏に代わり山内氏の入国など政治経済文化の各方面にわたり多くの問題があった。そこで、新たに執政を取った野中兼山は長宗我部氏の遺臣たちなどの浪人に土地と禄を与えて収めたのだが、既に開かれた土地は藩の直轄地であるか給地として与えていたため、新たに新田を開発する必要があった。そこで、国内未墾の土地を浪人に開発させ、領地としての私有を許し、卿士として武士の待遇を与え優遇したため山間僻地まで競うように開墾された。新田の開発は卿士のみではなく、武士や一般庶民も開墾を行っていた。また、山の雑木を伐り払い、焼き、種を植える切畑も行われていた。耕地の開拓と共に人々は耕作に便利な土地に住居を構えるようになり、山間にまで民家が点在するようになったのである。

2.2.2　交通

戦国時代の頃は敵の侵入を防ぐために道路は不便であり交通は発達しなかったようである。この当時の道路幅は 2 間であった。1832 年ごろには、高知赤岡方面との交通路には韮生往還である物部川南岸沿いのものが動脈という役割を果たしていた。美良布から赤岡に行くには、杉田を経由する道、山を越え神母木に抜ける道、塩の道へ合流する道のいずれかの道が利用された。豊永方面との往来には日ノ御子川沿いに通る豊永往還、猪野々から神賀を超えて豊永に通じるものがあった。また、小川から西川を通って手結に通じるものがあった。物部川や他の谷川には当時牛馬の渡れるような橋は無く、渡し舟による移動か一本橋によるものであった。これらの無い谷川は石を飛び移るか川を歩いてわたるほか無かった。そのため増水時には一本橋以外は対岸との交通はできなかった。

現在では、右岸に県道 218 号線、左岸に国道 195 号線が通り日々多くの自動車が行き来している。これらの全身として明治 32 年（1899 年）に左岸に南岸線が開通し、明治 40 年（1907 年）頃に右岸にも道路ができ始めたと記されている。渡し舟は新しく橋が架けられる毎に姿を消し、現在ではその姿を見ることはできない。

2.3　物部川流域圏中流部の集落

中流部の集落は河岸段丘上や谷、尾根の斜面地に形成されているため、階段状の地形に家屋や田畑が立地している。ほとんどが農村集落であるが、明治以後に商業町として発展した町や街道沿いに新たに形成されたところも見られる。中流部の農業は古くより米作が主であり、次いで麦が栽培される。藩政時代には国産物の増加を図るために、様々な特用作物や果樹が植えられた。この他に、養蚕や牛の飼育も行われていた。

現在では右岸は県道 218 号線、左岸は国道 195 号線が物部側沿いの集落同士をつないでいるが、明治時代の街道が細く幅が狭かった時代は水陸の両方が利用されていた。街道を利用した物産の運搬は人力または駄馬によって運ばれ、薪炭、木材などを大量に運搬するには物部川を利用した船か筏で送られていた。往来は厳しく一般の人が高知まで出て行くことは極めて稀であった。日用品は商人が担って売りに来るほか、集落の店屋で買い求められていたが、主に山田で売り買いが行われていた。猪野々から赤岡まで塩を求めていくこともあったと香北町史に記されている。商業は町村同士の合併が進むまでは五百蔵や永野、猪野々が村の商業の中心地であったが、次第にその役割は失われ美良布に集中するようになった。

2.4　物部川流域圏中流部の屋敷構え

中流部の集落は多くが農業村落であり、屋敷構えには農家の性格が反映される。中流部の屋敷構えについての記述は文献調査では確認することができなかった。一方、山田町史には藩政時代後期の台地、平野における本百姓の屋敷構えの基本型が示されている。本研究において下流部に見られる台地や平野は未調査であるため、記載の型がどれほどの割合を占めるものかは把握し切れていないが、台地と平野の環境化における屋敷構えの 1 つの型であると考えられる。身分の上中下で屋敷の規模、付属屋の種類は異なるが、主屋に対して左側に納屋を設けること、主屋と納屋の棟の向きを直行させることは共通に見られる。また、共通する特徴として屋敷北側と東側に屋囲林と呼ばれる垣を備えている。これは、山田野の段丘部と南の平野では冬の北風が強いことが要因であり、そのため多くの百姓が下等身分のものであっても北側の風除けとして杉垣を備えていた。

屋敷構えがいつ頃成立したかについての記述は香北町史、山田町史ともに記述はないが、藩政時代に百姓は質素を旨とし贅沢が禁じられていたことは共通のようである。住居は仕様や用材に制限があり、藁葺きや茅葺きの家が一般的だった。しかし、1845 年には下流部の赤岡にて瓦屋根で白壁塗りの家が多数見られたと記述されている。これは赤岡の町に限らず郷分、山分でも同じく華美の風習に染み、徐々に住居の作りにも変化が現れたようである。香北町史には 1877 年頃までの家は主屋と納屋どちらもほとんど藁葺きで、わずかに瓦葺きであったと記されている。1891 年頃から瓦を葺き始め、蔵に瓦を葺いた家は少々あったようだが、全体を瓦葺きにする家はあまりなかったようである。

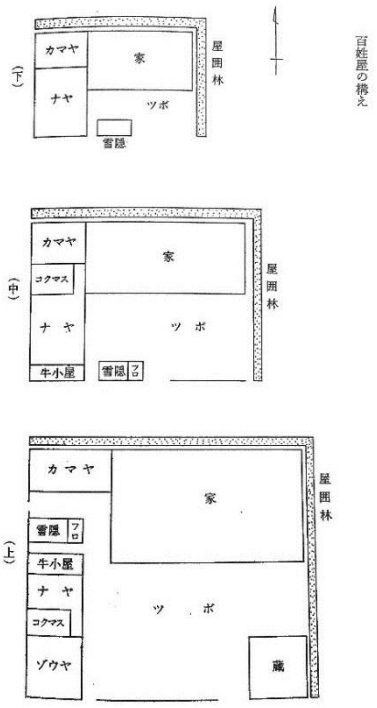


図 27　平野・台地の屋敷構え
（土佐山田町史編集委員会「土佐山田町史」土佐山田教育委員会、1979）

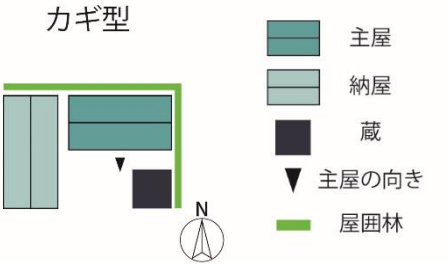


図 28　平野・台地の屋敷構えの図

小結

物部川は高知県中部を流れる一級河川である。中流部の集落は河岸段丘上の開発により発達し、起伏に富んだ地形に棚田や屋敷がある集落風景を見ることができる。

古くより人々の生活が営まれてきた場所であり、山間にまで民家が点在する。右岸左岸共に集落間を繋ぐ往還がいくつも存在し、現在では、右岸に県道 218 号線、左岸に国道 195 号線が通っている。右岸と左岸の行き来には渡し舟が使われていたが、現在は橋が架かったことにより渡し場と共に役目を終えた。

集落は河岸段丘上や谷、尾根の斜面地に形成され、階段状の地形に家屋や田畑が立地している。ほとんどが農村集落であるが、明治以後に商業町として発展した町や街道沿いに新たに形成されたところも見られる。しかし、中流部の屋敷構えについての記述は文献調査では確認することができなかった。

第 3 章

物部川流域圏中流部における集落の分析

3.1　集落の類型

集落における居住地の形態による類型

中流部の集落を八嶋が示す村落形態[16]から分類するため、明治 40 年代の地図より自動車交通発達以前の集落形態の祖形を見ると全て集村に分類できる。さらに集村をその形態により塊村と列状村落に分類すると、中流部に見られるほとんどの集落の居住地が不規則な塊状のまとまりを呈する塊村である。街路を軸に民家が建ち並ぶ列状村落は中流部にいくつか見ることができ、明治 40 年代の地図においてその形態を確認できたのは、楠目、美良布、神母木である。

表 3-1　明治 40 年代における各居住地の形態

右岸	居住地名	村落形態
猪野々	猪野々村松床	塊村
	猪野々村	塊村
清爪	清爪村	塊村
梅久保	梅久保村	塊村
大井平	大井平村	塊村
永野	永野村東	塊村
	永野村谷内西	塊村
	永野村(A)	塊村
朴ノ木	朴ノ木村	塊村
日ノ御子	日ノ御子村	塊村
有瀬	有瀬村	塊村
五百蔵	五百蔵村(A)	塊村
	五百蔵村(B)	塊村
	五百蔵村(C)	塊村
	五百蔵村市川	塊村
白川	白川村計多	塊村
	白川村白川	塊村
佐竹	佐竹村	塊村
有谷	有谷村オドリバ	塊村
	有谷村スズハラ	塊村
	有谷村ムカイ	塊村
	有谷村イチドウ	塊村
中後入	中後入村中の谷	塊村
	中後入村西の谷	塊村
本村	本村ヒガシ	塊村
	本村シンデン	塊村
佐野	佐野村仁井田	塊村
	佐野村	塊村
楠目	楠目談義所	列状村落

左岸	居住地名	村落形態
永瀬	永瀬村	塊村
蕨野	蕨野村	塊村
白石	白石村和田	塊村
	白石村下田	塊村
	白石村府内	塊村
根須	根須村	塊村
吉野	吉野村	塊村
小川	小川村	塊村
韮生野	韮生野村	塊村
美良布	美良布村(A)	列状村落
	美良布村(B)	塊村
下野尻	下野尻村	塊村
太郎丸	太郎丸村	塊村
橋川野	橋川野村	塊村
杉田	杉田村	塊村
宮ノ口	宮ノ口村(A)	塊村
	宮ノ口村(B)	塊村
神母木	神母木村	列状村落

集落における居住地の立地地形による類型

中流部では上流部から下流部へと移行するなかで地形変化が起こり、集落の居住地が立地する地形は様々である。中流部の集落における居住地をその立地地形により分類すると、起伏が少なく平坦な「平地」と傾斜地形「斜面地」の大きく 2 つに類型することができる。

平地を細分類すると、「平地」と斜面地との切り替わりに位置する「山際」に分けることができる。

「山際」は平坦な地形と傾斜ある地形の切り替わりに当り、傾斜の影響を受ける場所だと言える。

居住地において傾斜の影響を受けるのは「斜面地」と平地の「山際」である。

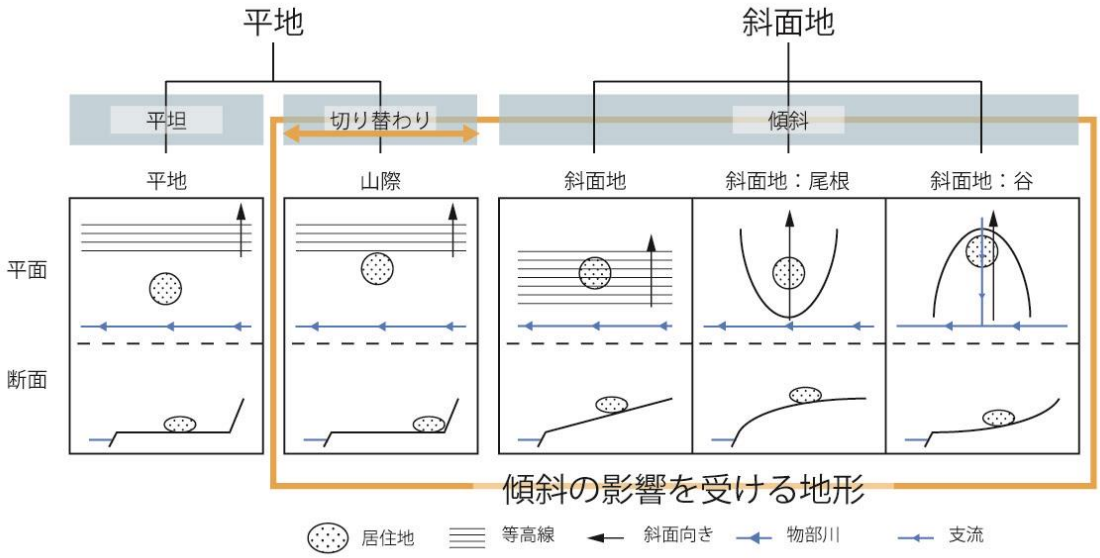


図 3-1　地形による類型

3.2　集落の居住地の分布

3.2.1　集落居住地の分布分析の方法

中流部の集落における居住地の立地地形を「平地」、「斜面地」に類型し、統計と地図から分析を行う。

3.2.2　統計に見る集落居住地

中流部にある 32 大字内の集落における居住地を大きく「平地」、「斜面地」により類型し統計として示したのが図◇となる。大字内に複数の地形が含まれる場合は混在として分類した。なお、類型の対象は現地調査により主屋、納屋、蔵を備えた屋敷構えを確認することができた居住地のまとまりとする。

類型を見ると、中流部全体では「平地」と「斜面地」の割合に大きな差は見られない。

表 3-2　中流部の居住地の立地地形の分類

右岸		
大字名	居住地名	居住地の立地類型
猪野々	猪野々村松床	斜面地
	猪野々村	斜面地
清爪	清爪村（A）	斜面地
	清爪村（B）	平地
梅久保	梅久保村	斜面地
大井平	大井平村	斜面地
永野	永野村東	平地
	永野村谷内西	平地
	永野村(A)	斜面地
朴ノ木	朴ノ木村	平地
日ノ御子	日ノ御子村	斜面地
有瀬	有瀬村	斜面地
五百蔵	五百蔵村(A)	平地
	五百蔵村(B)	平地
	五百蔵村(C)	斜面地
	五百蔵村市川	平地
白川	白川村計多	斜面地
	白川村白川	平地
佐竹	佐竹村	斜面地
有谷	有谷村オドリバ	斜面地
	有谷村スズハラ	斜面地
	有谷村ムカイ	斜面地
	有谷村イチドウ	斜面地
中後入	中後入村中ノ谷	斜面地
	中後入村西ノ谷	斜面地
本村	本村ヒガシ	混在
	本村シンデン	平地
佐野	佐野村仁井田	平地
	佐野村	平地
楠目	楠目談義所	平地

左岸		
大字名	居住地名	居住地の立地類型
永瀬	永瀬村	斜面地
蕨野	蕨野村	斜面地
白石	白石村和田	斜面地
	白石村下田	斜面地
	白石村府内	斜面地
根須	根須村	斜面地
吉野	吉野村	平地
小川	小川村	平地
韮生野	韮生野村	平地
美良布	美良布村(A)	平地
	美良布村(B)	平地
下野尻	下野尻村	平地
太郎丸	太郎丸村	平地
橋川野	橋川野村	平地
杉田	杉田村	平地
宮ノ口	宮ノ口村(A)	斜面地
	宮ノ口村(B)	平地
神母木	神母木村	平地

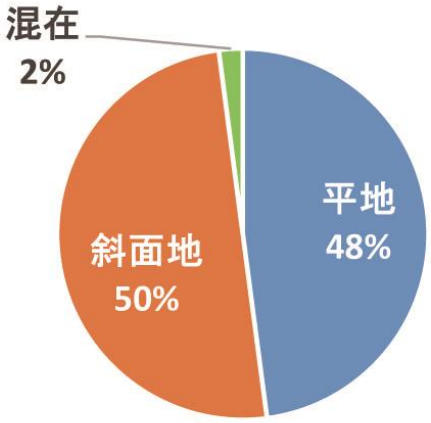


図 3-2　中流部の居住地の立地の割合

3.2.3　地図に見る集落居住地

居住地の類型を地図に示したものを図◇に示す。居住地の立地地形を分布に見ると、図◇中に記した線より上流側では斜面地が多く見られる。対して、線より下流側では右岸と左岸で様態が異なる。右岸では平地と斜面地が混在し、左岸では平地の居住地が多い傾向が見られた。

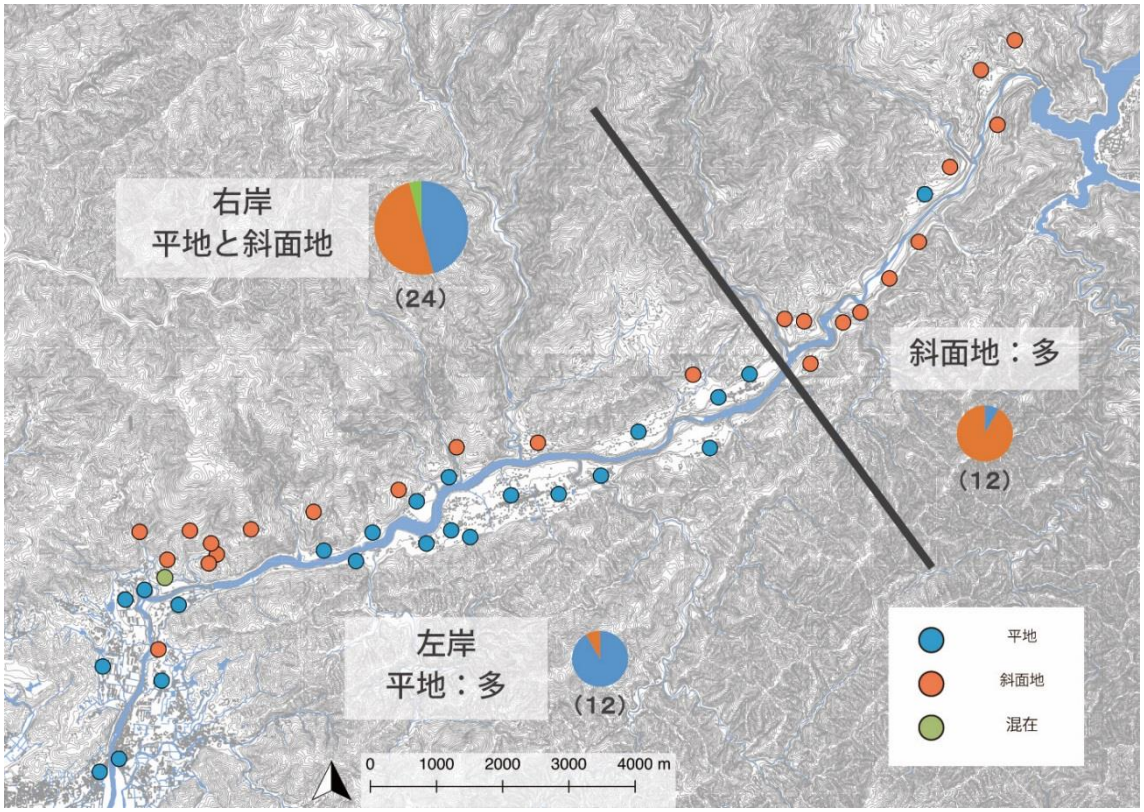


図 3-3　居住域の立地地形の分布

小結

中流部における集落をその形態、居住地の立地地形により分析した。中流部ではほとんどの居住地が塊村の形態を取っている。また、立地地形を大きく「平地」と「斜面地」に類型すると、上流に近くなると右左岸ともに斜面地が多く、下流側になると右岸と左岸で様態が異なっていた。右岸は平地と斜面地が混在し、左岸では平地の多い居住地が多い傾向が見られた。

第 4 章

物部川流域圏中流部における屋敷構えの分析

4.1　屋敷構えの分析

屋敷構えを「屋敷の立地」、「屋敷構えの正面方位」、「屋敷地形状」、「屋敷構えの配置」の５つの観点から分析を行った。

4.1.1　屋敷の立地

居住地の立地類型と同様に、確認した個々の屋敷構えにおいても「平地」と「斜面地」に立地地形を分類し類型を行った。

類型を行った結果、屋敷は平地または斜面地に立地し、中流部全体を見ると平地により多く確認された。

さらに平地を細分類して見ると、平地と山際の傾向に大きな差は見られなかった。

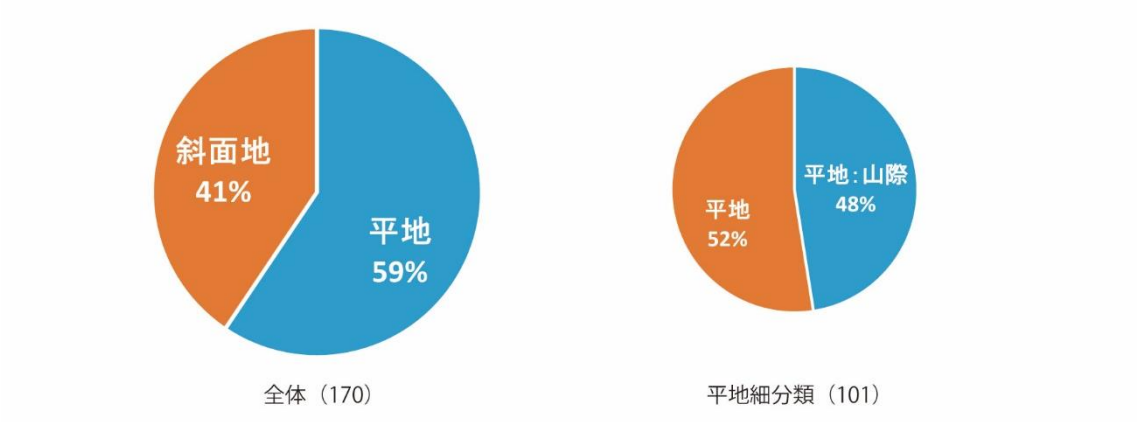


図 4-1　屋敷構えの立地地形

4.1.2　屋敷構えの正面方位

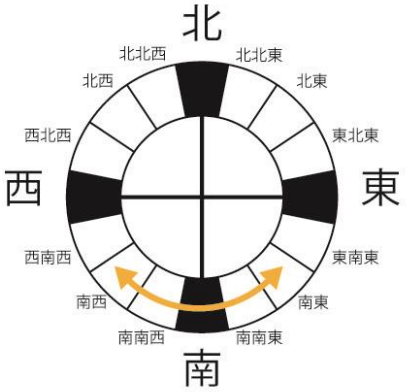
本稿では、主屋の正面を屋敷構えの正面として定義すし、中流部における主屋の正面について各屋敷構えについて統計をとった。また、統計を取るに当たり 16 方位を用いて屋敷の正面の向きの統計を行った。

両岸を見ると南南東が最も多く、僅差で南が次ぐ。南や東よりの南となる南東や南南東が多い傾向となっている。一方、北向きや純粋に東の方向を向くものは少なく、主屋の向きが南から離れた方角を向くにつれてそれぞれの個数も少なくなる。右岸と左岸でみると、大きくは南側に向くことが多いことは共通である。南の方を向かない型を見ると左岸の方が北や西側を向くものが多い傾向となっている。

表 4-1　両岸、右岸、左岸における主屋の正面方位

方位	右岸	左岸	両岸
北	0	1	1
北北東	0	0	0
北東	0	0	0
東北東	0	0	0
東	0	0	0
東南東	3	0	3
南東	11	8	19
南南東	33	19	52
南	27	21	48
南南西	18	3	21
南西	7	4	11
西南西	1	1	2
西	1	3	4
西北西	0	4	4
北西	0	2	2
北北西	0	2	2
未分類	1	0	1
合計	102	68	170

多



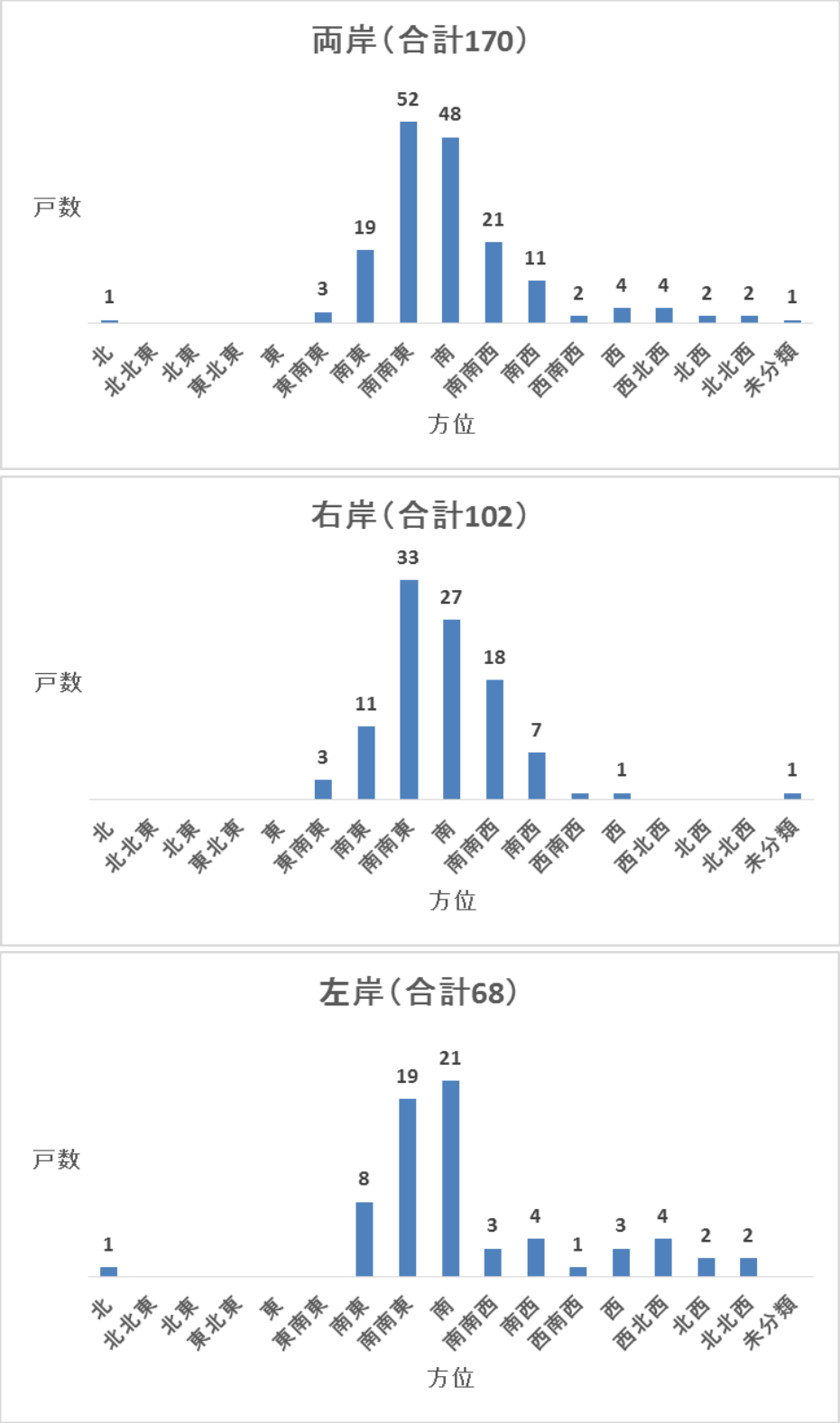


図 4-2　両岸、右岸、左岸における主屋の向きの割合

4.1.3　屋敷地形状

中流部では条里制に代表されるような明確な土地割が行われたという記述は残されていない。そのため、中流部全体を見ると屋敷地形状は各屋敷によって様々である。

そこで、主屋の正面を基準として屋敷地の広がり方から敷地形状を類型した。正面に対して屋敷地の左右が広い「よこ」、前後に広い「たて」、差が大きくない「正方形」の 3 つに分類を行った。

統計を見ると、中流部全体では屋敷形状は「よこ」の割合が大きい結果となった。

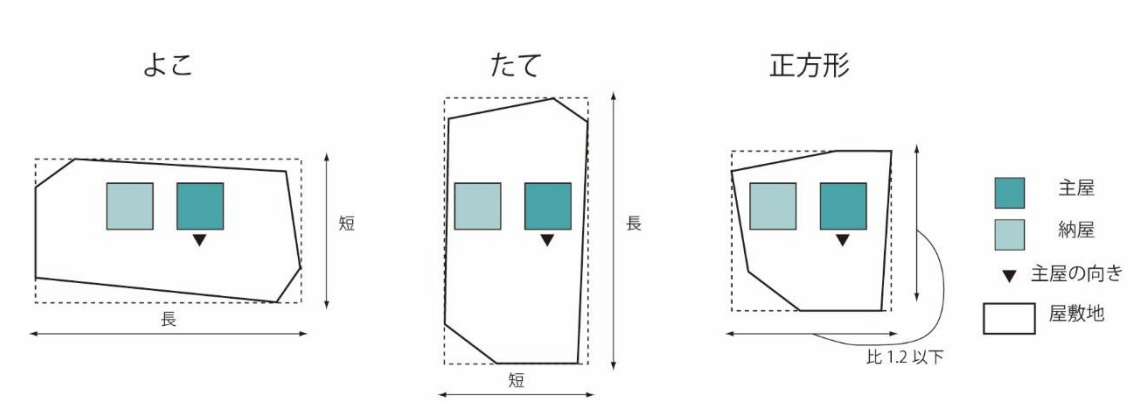


図 4-3　屋敷地形状の類型化

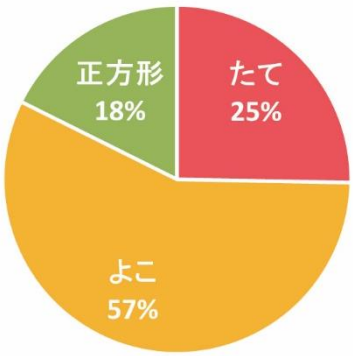


図 4-4　屋敷地形状：全体（170）

4.1.4　屋敷構えの配置

ここでは、現地調査より確認された主屋、納屋、蔵を備えた屋敷構えの構成要素から類型を行う。調査対象範囲全体において 170 の屋敷構えを確認することができた。類型の観点としては、屋敷地内における「主屋と納屋の配置型」、「主屋に対する納屋の位置」、「屋敷地における蔵の配置分類（前・中・背)」、「屋敷地における蔵の配置分類（右側・左側)」の 4 つの観点を用いることにする。

主屋、納屋の配置型による分類

中流部全体で見ると、屋敷の向く方位、敷地の形状などは様々であるが、主屋と納屋の配置の関係においていくつかの傾向がみられた。そこで、これらの傾向から主屋と納屋の配置関係をいくつかの型に分類し類型を行った。

主屋と納屋の配置関係についてそれぞれの棟の向きから分類すると中流部では「並列型」、「カギ型」、「二の字型」、「雁行型」の大きく 4 つに類型できた。屋敷内において主屋と納屋の棟が横並びとなるものを「並列型」、棟が直交するものを「カギ型」とする。また、主屋と納屋が並行に配置されるものを「二の字型」、主屋と納屋を雁行させることにより階段状にスペースを生み出すものを「雁行型」とする。ただし、配置型による分類に関して方位は関係ないものとし、主屋の正面を基準として類型を行った。

配置型のそれぞれの個数は並列型が 79、カギ型が 67、二の字型が 10、雁行型が 9 であった。並列型とカギ型を合わせると全体の 9 割近くを占めることとなり、二の字型と雁行型はそれぞれ全体の 1 割にも満たなかった。その他に主屋、納屋、蔵を備えてはいるが型としての判別が困難であるため未分類としたものは 5 つである。二の字型と雁行型、未分類としたものは中流部において特異な型である考えられる。①並列型、②カギ型、③その他（二の字型と雁行型と未分類を含む）の 3 つにまとめたとき中流部における全体の割合は図◇の通りである。

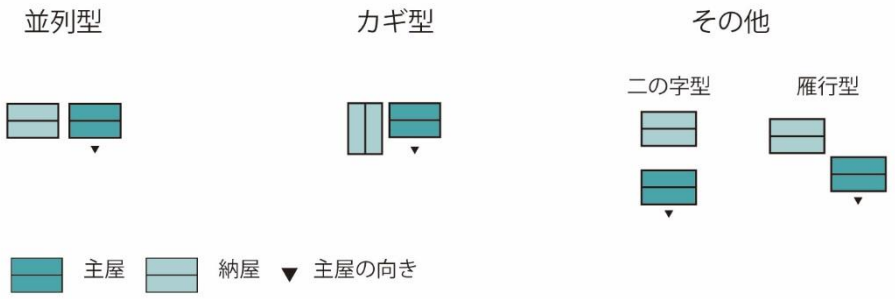


図 4-5　主屋と納屋の配置関係による分類

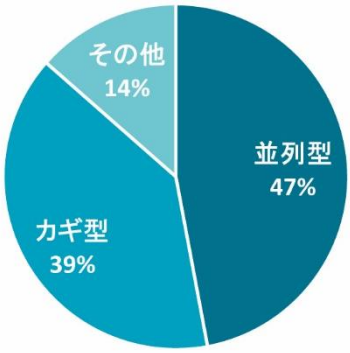


図 4-6　配置型の分類における割合

主屋に対する納屋の位置による分類

主屋に対して納屋が配置される側について、中流部では右側に置かれるものと左側に置かれるものが混在していた。そこで、主屋の正面に向き合った時、右に納屋があるものを「右納屋」、左にあるものを「左納屋」とし、このくくりに当てはまらない二の字型などを未分類として類型を行った。右納屋、左納屋のそれぞれの割合は図◇の通りである。それぞれの個数は右納屋が 61、左納屋が 97、その他が 12 である。左納屋が全体の半分以上含むことから左納屋が一般的であると考えられる。

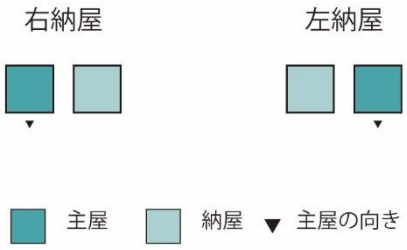


図 4-7　主屋に対する納屋の位置による分類

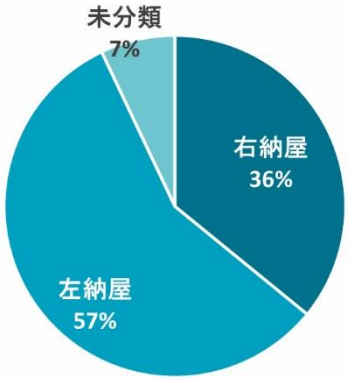


図 4-8　右納屋・左納屋の分類における割合

屋敷地における蔵の配置分類（前・中・背）

蔵の配置類型について、蔵の屋敷内の配置から「主屋と納屋の前面に配置されるもの」、「主屋と納屋と同列に配置されるもの」、「主屋と納屋の背面に配置されるもの」、このくくりに当てはまらない未分類の４つに類型した。また、類型において方位は関係ないものとし、主屋の正面を基準として類型を行った。

類型の結果、前面に置かれるものが 130、同じ並びに置かれるものが 29、背面に置かれるものが 8、未分類が 2 である。前面が全体の 7 割以上を占めることから中流部において前面に置かれるものが一般的だといえる。

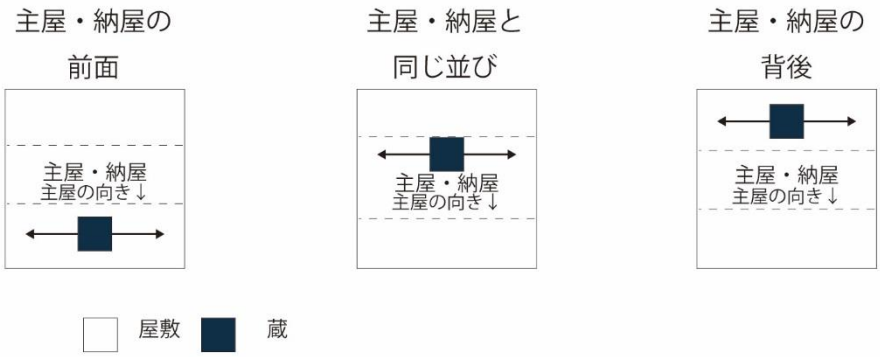


図 4-9　屋敷内における蔵の配置による分類

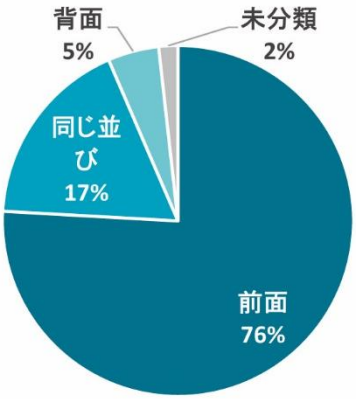


図 4-10　屋敷内の蔵の配置場所における割合

屋敷地における蔵の配置分類（右側・左側）

蔵は屋敷内の隅に配置されることが多いため、主屋の正面に対して「屋敷地右側に置かれるもの」、「屋敷左側に置かれるもの」、その他のもので類型を取った。各屋敷を分類したところ全体の 8 割が右側に置かれることがわかった。

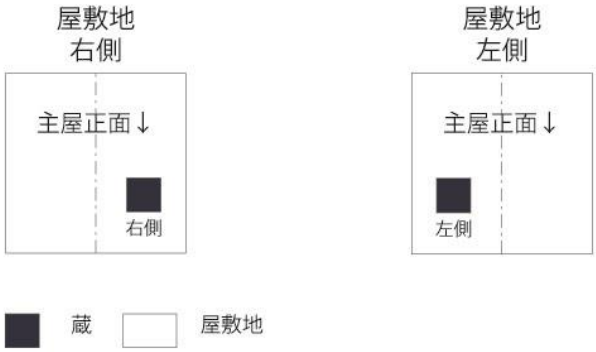


図 4-11　屋敷内における蔵の配置による分類

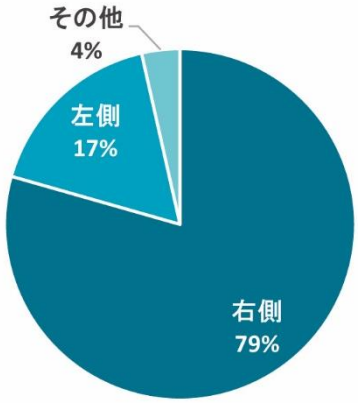


図 4-12　屋敷の右側、左側のどちらに蔵が配置されるかによる分類

さらに、蔵が屋敷内の前面に置かれるものだけで同様に類型を取ったところ、9 割が右側に置かれるということがわかった。このことより中流部では蔵は屋敷の前面右側におかれる傾向が強いといえる。

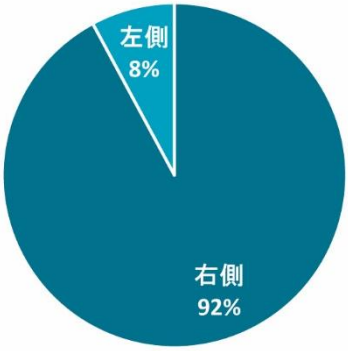


図 4-13　蔵が前面に置かれるものにおいて、
屋敷の右側、左側のどちらに蔵が配置されるかによる分類

並列型とカギ型の二つの型の合計が全体の 9 割近くを占めることから、主屋と納屋の棟の向きを考慮しないとすると中流部では主屋と納屋を横並びに配置することが一般的であるといえる。また、納屋は主屋に対して左側に置かれる左納屋の傾向が強い。屋敷に置かれる蔵は主屋と納屋に対して前面に置かれるものが 7 割以上であることに加えて、屋敷右側に置かれる傾向が強いことが明らかとなった。

このことより物部川流域圏中流部において「納屋を主屋の左に横並びに置き、蔵を敷地前面の右側に置く」ものが一般的な型といえる。

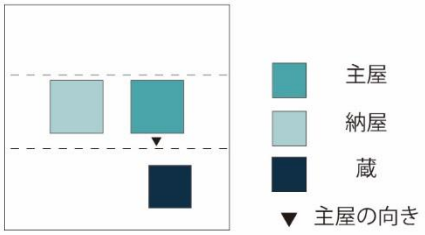


図 4-14　敷地内における主屋、納屋、蔵の配置による分類

4.1.5　屋敷構えの分析からわかる傾向

「屋敷の立地」、「屋敷構えの正面方位」、「屋敷地形状」、「屋敷構えの配置」の５つの観点から中流部における屋敷構えの分析を行った。

「屋敷の立地」の分析では、中流部全体を見ると平地と斜面地に立地している。平地は細分類すると「平地」と「山際」の立地の差に偏りは見られなかった。

「屋敷構えの正面方位」の分析では、正面を南側に向けるものが多数を占めていた。

「屋敷地形状」では「よこ」が多い。

「屋敷構えの配置」を見ると、主屋と納屋の配置は「並列型」または「カギ型」が主であり、蔵は屋敷の前面、右側に置かれる傾向が見られた。このことから、中流部では主屋と納屋を横並びにしてその前面右側に蔵を配置する型が基本型であるとわかった。

以上の分析の中で特に傾向が強く現れていたのは、「屋敷構えの正面方位」を南側に定めることである。また、主屋と納屋の配置が複数見られる中で蔵の配置は前面右側に置かれる傾向が強いことは、「屋敷構えの配置」において蔵は慣用的な決定法則に従うと考えられる。

4.2　屋敷構えと地形の分析

屋敷構えと地形の関係を「屋敷構えの正面方位と地形」、「屋敷地形状と地形」、「屋敷地形状と屋敷構えの配置」の３つの観点から分析を行った。

4.2.1　屋敷構えの正面方位と地形

屋敷構えの正面方位は南側を向くものが多数を占めていることがわかった。これらを分布に見ると、中流部全体に亘って南方向を向くものが分布している。対して、南側以外を向いているものの分布を見るとその多くは斜面地に立地し、上流側に多数見られる。

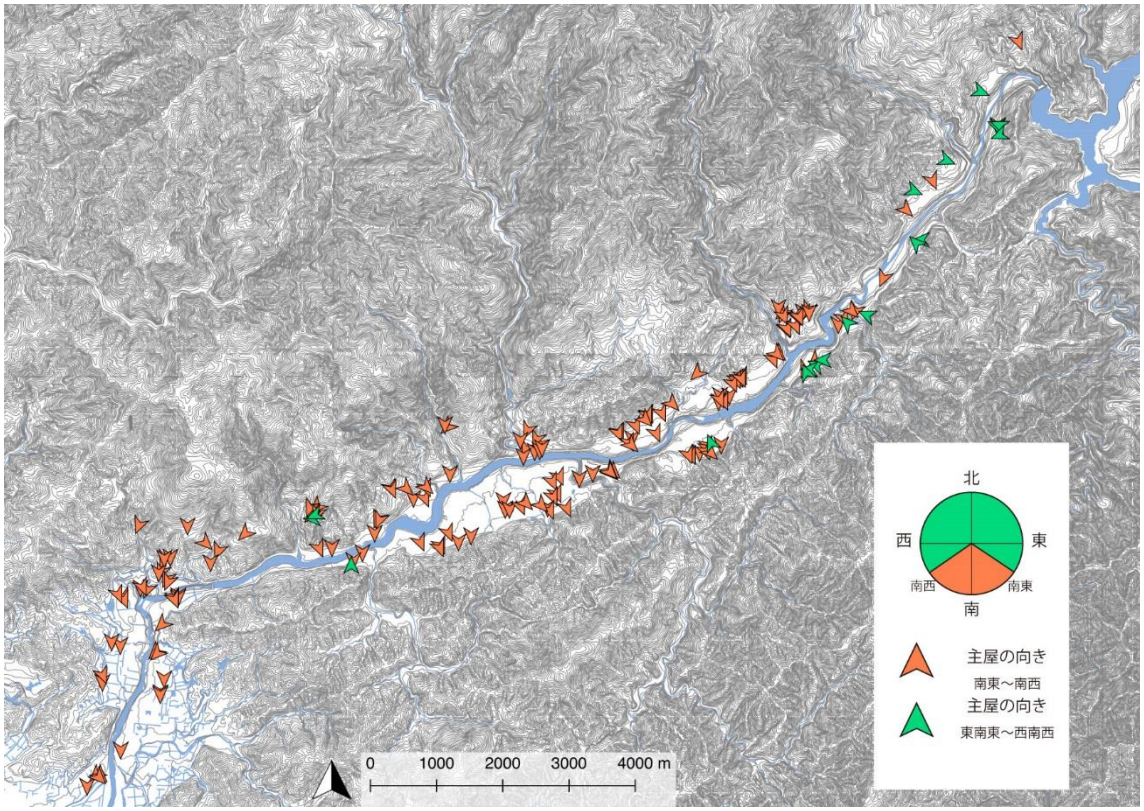


図 4-15　屋敷構えの正面方位の分布

南側を向くもの詳しく見ていくと、平地の山際や斜面地では背後の等高線と直交方向に正面が振れるものが多い。

また、中流部は物部川が大きく北東から南西に向けて流れる。そのため、山の位置は右岸が北側、左岸が南側となり、この右左岸の山の位置の違いは屋敷構えに影響を与えるものと推測した。しかし実際は、山の位置に関係なく南を向き、右左岸関係なく南志向が強いと言える。

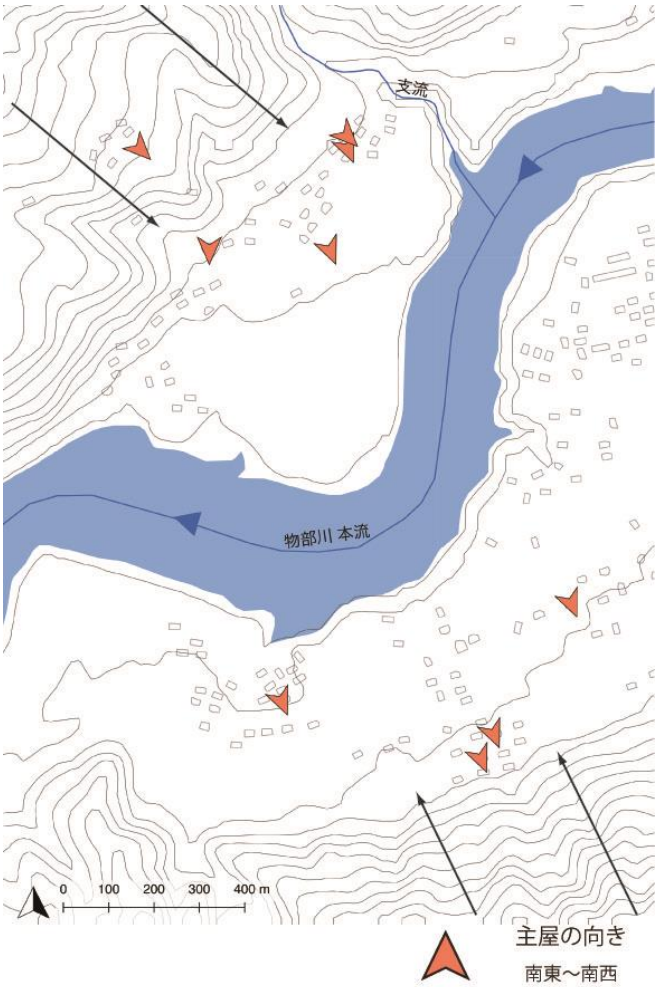


図 4-16　正面方位が南側を向くものの分布

南側以外を向くものを見ると、その多くが南からの日照確保が難しくなる傾斜の大きい斜面地に立地し、背後の等高線と直交方向に正面を向けている。

図 4-17　正面方位が南以外を向くものの分布

南側を向くものと南側を向かないもの双方の屋敷構えにおいて等高線と直交方向に正面が振れる傾向が見られた。しかし、等高線が南北となる場所にあっては、等高線と並行に正面を定めており、地形に合わせて南採光が可能な方位を正面と定めている。

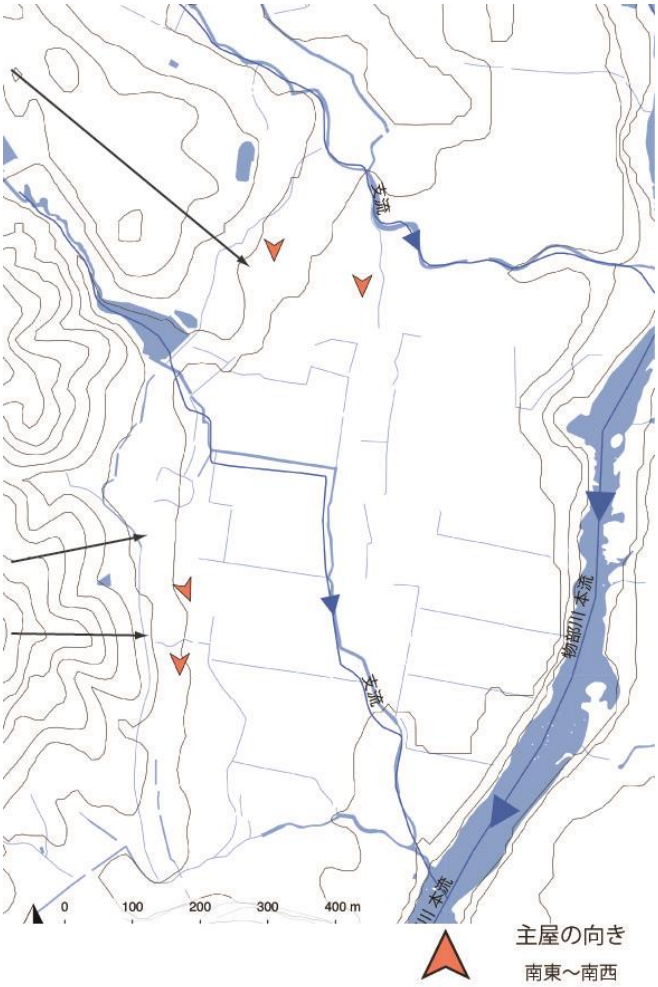


図 4-18　正面方位が南側を向くものの分布

以上より、中流部では南からの日照確保が屋敷構えの正面方位の決定に重視される中で、地形に対応した向きを正面としていると考えられる。

4.2.2　屋敷地形状と地形

屋敷地形状と地形との関係を統計に見ると、屋敷地形状の「よこ」は平地よりも斜面地において顕著に見られる。

平地の細分類では、山際では「よこ」が多く、平地では屋敷地形状の割合に大きな偏りが無い。これは、平地は地形による制約が弱く、屋敷地形状の決定に地形からの影響を受けないためだと考えられる。

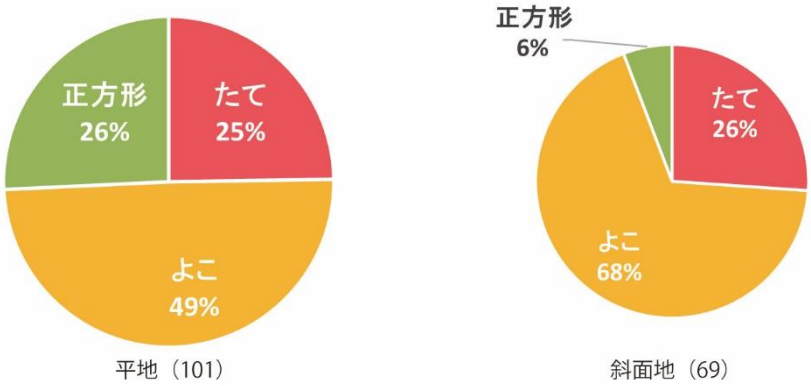


図 4-19　屋敷地形状：平地と斜面地

図 4-20　屋敷地形状：平地の細分類

地図から屋敷の立地を見ると、山際になると「よこ」が多く、等高線に合わせて屋敷地形状が定められている。平地では屋敷地形状に型よりは見られなくなっている

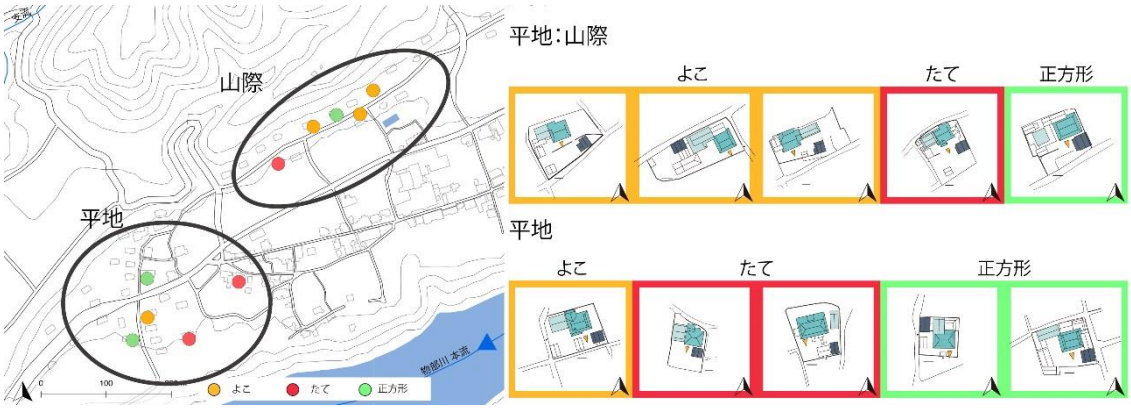


図 4-21　屋敷地形状の分布

4.2.3　屋敷地形状と地形

「よこ」では主屋と納屋の棟が一直線となり奥行きが浅く済む並列型、「たて」では主屋に対して納屋の棟を直交させ、奥行きを深く取るカギ型が多い。このことから、屋敷地形状に対し無理なく配置しやすい型が選ばれていると考えられる。「正方形」では並列とカギ型の割合に差は見られない。

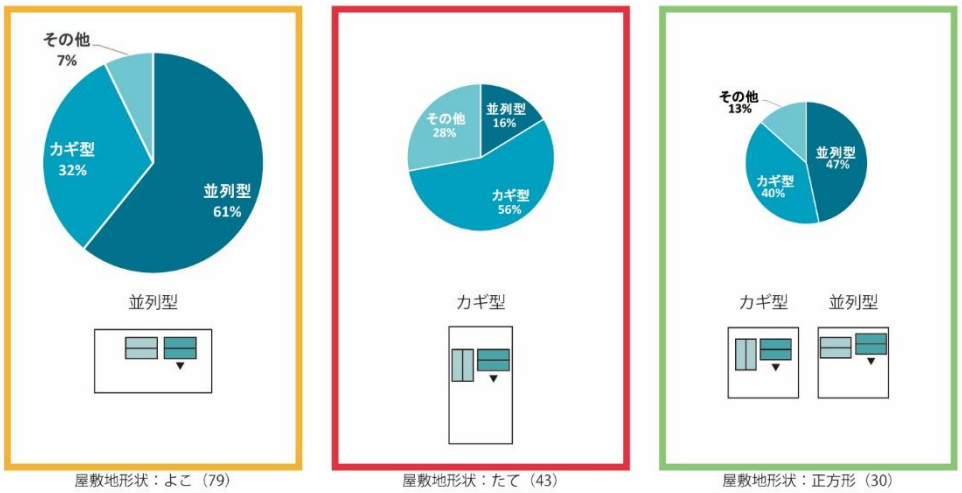


図 4-22　屋敷地形状と屋敷構えの配置との関係

4.2.4　屋敷構えと地形の分析からわかる傾向

屋敷構えと地形の関係を「屋敷構えの正面方位と地形」、「屋敷地形状と地形」、「屋敷地形状と屋敷構えの配置」の３つの観点から分析を行った。

中流部の屋敷構えは、日照のため南志向が強いことや、屋敷地形状や正面方向の振れに地形が関わるなど自然からの影響、すなわち自然要因が深く関る傾向が見られると言える。これは、屋敷地形状に対し無理のない屋敷構えの配置型が選ばれるのも、地形への応答と考えられる。

4.3　屋敷構えと人為的要因

中流部の屋敷構えにおいて、自然要因の他に人為的な計画に影響を受けたもの、すなわち人為的要因が関係していると考えられるものが見られた。これらはほとんどが個別に人為的要因を示唆するものであり、本研究でははっきりとした要因を特定することができなかった。

その一例として、平地の居住地である永野村谷内西では屋敷構え型の配置に居住地の主要道と旧往還の影響が推測された。対象の屋敷構え（図◇）は屋敷西側を居住地の主要道が接している。現在では南側に国道が通っているが、明示の地図を見ると屋敷の北側を往還が通っていたことがわかった。屋敷構えは、主屋は正面を南に向けているが、納屋は主屋に対して背後にカギ型となる配置となっている。また、蔵は屋敷の左後ろ側、納屋の隣に配置されている。

中流部における屋敷構えの基本型からの変化は、居住地主要道と往還の影響によるものだとすると次のように考えることができる（図◇）。はじめに南からの日照取得のため主屋の正面が決まる。次に、居住地主要道側へ正面性を設けるため納屋を主屋の背後に移す。このことにより、居住地主要道側から見たとき主屋と納屋は横並びとなり正面性が生まれる。次に、蔵を納屋の左側へ移すことにより、主屋と納屋が横並びで蔵が前面となり中流部の基本型と同様な配置となる。さらに、往還側からでは屋敷構えはカギ型であり蔵は右側に置かれる配置型となるのである。

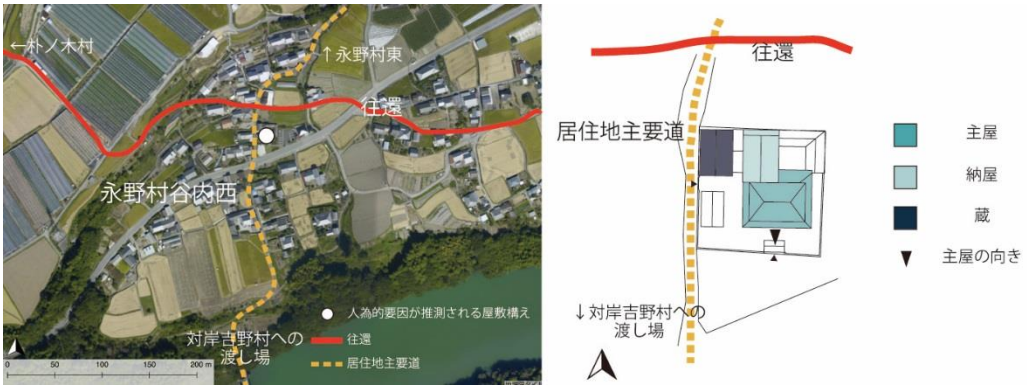


図 4-23　永野村谷内西における人為的要因が見られる屋敷構え

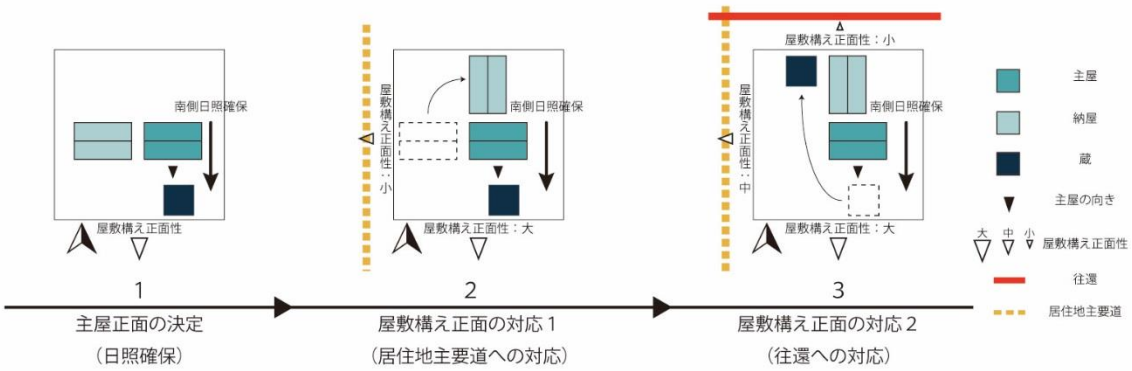


図 4-24　永野村谷内西における人為的要因が見られる屋敷構えの変化

広範囲に亘って特徴が見られ、人為的要因が関係していると考えられるものには韮生野・美良布の屋敷構えがある。韮生野・美良布では、商店や多くの民家が往還に沿って建ち並ぶ。ここで確認した屋敷構えの内、山際以外のものの配置型を見ると、往還から現在の国道 195 号線の間では「並列型」が集中し、それ以外の場所では「カギ型」が分布している。南北に並行する往還の内、南側の往還沿いでは敷地が往還に沿って横長に広いものが多く、「並列型」の集中はこれら宅地割などの人為的要因によるものではないかと考えられる。

図 4-25　韮生野・美良布の屋敷構えの配置型の分布

人為的要因を推測される屋敷構えの中で例外とも言えるのは、平地に立地する小川の集落である。小川において明治の地図に確認できた旧往還と村社との間の居住地において、山際の村社に向けた街路計画が見られた。屋敷は真南ではなく街路に沿って南を向き、規模、配置型に共通性がある。人為的計画が強く居住地全体に影響し、個別ではなく居住地全体として屋敷構えを規定したと考えられる。

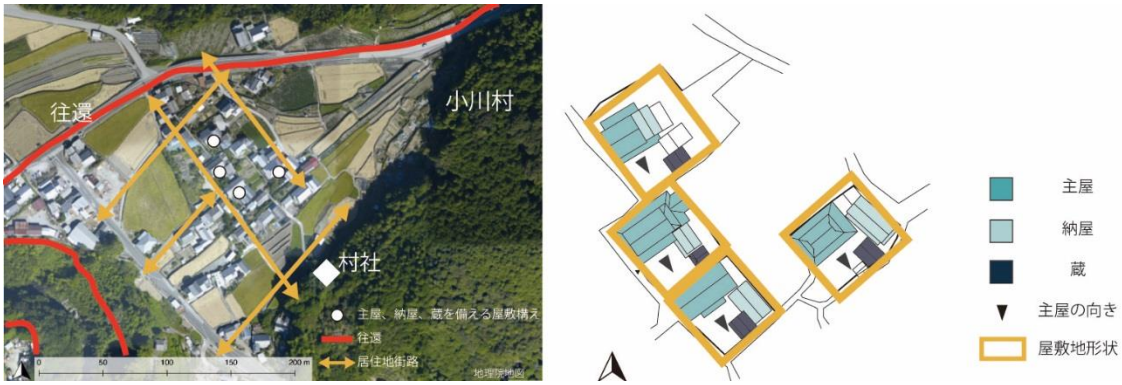


図 4-26　小川における共通に規定された屋敷構え

このような人為的要因が考えられる屋敷構えは平地に立地していることが多い。それは、平地では傾斜による地形の制約が弱くなるため、生活を定める際に人為的な計画を取り入れる余裕ができるからだと考えられる。

小結

屋敷構えの分析を「屋敷の立地」、「屋敷構えの正面方位」、「屋敷地形状」、「屋敷構えの配置」の５つの観点から行うとともに、屋敷構えと地形の関係を「屋敷構えの正面方位と地形」、「屋敷地形状と地形」、「屋敷地形状と屋敷構えの配置」の３つの観点から分析を行った。

分析の結果、中流部では「屋敷構えの正面方位」を南側に定める傾向があること、主屋と納屋は並列型かカギ型をとり、蔵の配置は前面右側となるものが中流部の基本型であることがわかった。また、日照のため南志向が強いことや、屋敷地形状や正面方向の振れに地形が関わること、屋敷地形状に対し無理のない屋敷構えの配置型が選ばれることから自然要因が深く関わっていると言える。

自然要因の他にも、街路などの人為的要因から影響を受けた屋敷構えがあることがわかった。屋敷構えの配置型における蔵の配置が慣用的な決定法則に従うことも、人為的要因であると言える。

第 5 章

物部川流域圏中流部における屋敷構えの空間特性

5.1　物部川流域圏中流部の屋敷構え

これまでの分析より、物部川流域圏中流部の屋敷構えの決定要因には、「自然要因（地形、日照）」、「人為的要因（慣用的配置法則（蔵の位置）、集落空間の計画（道など））」があると考えられる。蔵の配置について、屋敷が地形の影響を受ける中でも共通して前面右側に配置されることは、中流部全体で共通の慣用的な配置法則に則っていると考えられる。つまり、蔵の配置については人為的要因と言えるのである。

自然要因は地形の制約が強い斜面地、人為的要因は地形の制約から解放される平地において決定要因における比率を強くすると考えられるが、中流部では人為的要因をはっきりと捉えられることは極めて稀である。中流部全体では自然要因が大きく関係するが、人為的要因である蔵の配置は斜面地や平地に関わらず中流部全体で共通して見られた。

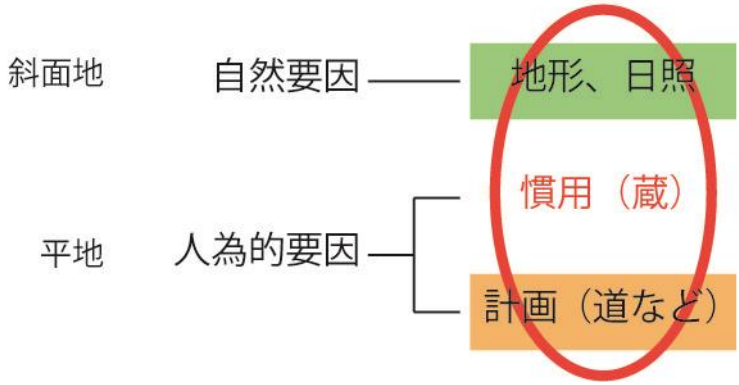


図 5-1　物部川流域圏中流部における自然要因と人為的要因

5.2　物部川流域圏中流部と他地域の屋敷構え

物部川流域圏中流部では、屋敷構えは斜面地であるほど地形の影響を受けた構えをとり、平地になるほど地形との関係が見られなくなる。物部川流域圏中流部の地形の特徴は北東から南西に流れる物部川により右岸と左岸で山の位置が異なることである。しかし、日照取得のため屋敷構えの正面方位を南に向けることは、ほとんどの屋敷において共通であった。また、蔵は屋敷の前面右側に置かれるものが多数を占めており、これは中流部で共通に慣用的に決まっていると考えられる。そのため、山の位置が異なることに対する右岸と左岸の明確な差は見られなかった。また、街路などの人為的要因の影響を明確には明らかにできなかったが、平地の屋敷構えにそれらの影響を推測できるものが見られた。

以上の分析から第 1 章の他地域の屋敷構えと比較を行う。

主屋の向きについては見ると、南に向けることは物部川流域圏中流部でも共通のことである。これは山の位置が異なる右岸左岸関わらず共通する傾向である。しかし、地形の制約が強い斜面地などは必ずしも南を向くわけではない。物部川流域圏中流部では、南の日照が重視される中で地形に対応した屋敷構えをとっている。

他地域では街路や条里制など人為的要因が屋敷構えに影響を与え、自然要因よりも優先されるものもあった。物部川流域圏中流部では、街路や土地割などの人為的要因の影響をはっきりみることができるものは極めて少なく、確認できたものは平地が多かった。他地域の屋敷構えにおいてもこれらが記されるものは平地が多い。物部川流域圏中流部では屋敷構えには日照や地形といった自然要因への対応が強く表れており、これらは斜面地や平地の山際に確認される。自然要因が人為的要因よりも強く現れているのは、地形的制約が様々な物部川流域圏の中流部ならではの特性だと考えられる。

また、他地域の屋敷構えには水路との関係や川を挟んだ屋敷構え同士の関係も見られた。物部川流域圏中流部では、上流側以外で右岸と左岸の屋敷構えが向き合うことはなく、右岸左岸に関わらず屋敷構えの正面方位は南のものが多い。河岸段丘が大きく対岸とも距離があるため、川を挟んだ屋敷構え同士の関係が生まれにくい環境であったと考えられる。水路との関係は本研究では調査できていないが、今後注目すべき点であると言える。

蔵の配置は他地域では街路や屋敷内のオモテ - ウラ、鬼門や裏鬼門などの家相によって決まると分析されている。物部川流域圏中流部では、全体を通して一つの傾向があることは特筆すべきことである。しかし、屋敷構えは立地や接道条件が様々であること、正面方位が地形によって振れつつも共通な配置法則に従うことから、法則に家相のような絶対方位は関係ないと言える。物部川流域圏中流部では蔵は、方位とは関係なく屋敷内に配置する共通法則があると考えられる。

5.3　物部川流域圏中流部における屋敷構えの空間特性

他地域との比較より、物部川流域圏中流部では南からの日照取得を重視し、地形への対応した構えをとることから自然要因が屋敷構えの決定に深く関わる。また、街路や土地割といった人為的要因の影響が他地域ほど現れていないことから、人為的要因より自然要因が優先されると言える。しかし、人為的要因と考えられる蔵の配置においては中流部全体で共通する。他地域と異なり屋敷構えにおける蔵の配置決定には絶対方位は関係なく決まると考えられる。

すなわち、物部川流域圏中流部では、南からの日照取得と地形による自然要因が人為的要因よりも優先されるのに対し、人為的要因である蔵の配置は中流部全体で共通の慣用的配置法則に従うことが物部川流域圏中流部における屋敷構えの空間特性であると言える。

終章

成果と課題

本研究では物部川流域圏中流部の屋敷構えを分析し、他地域との屋敷構えと比較から物部川流域圏中流部における屋敷構えの空間特性を明らかとした。それは、南からの日照取得と地形による自然要因が人為的要因よりも優先されるのに対し、人為的要因である蔵の配置は中流部全体で共通の慣用的配置法則に従うことである。

今後の課題として、本研究では中流部全体という視点から分析を行ったため、各集落における詳細な集落構成と屋敷構えの関係を分析する必要がある。その際、本研究では研究対象とする屋敷構えを主屋、納屋、蔵を持つものに限定したが、個々の集落にそれらを備えた屋敷構えの総数は少ないため、集落全体の家屋から分析する必要がある。

また、本研究での調査範囲は物部川流域圏における中流部としたが、上流部と下流部においても屋敷構えの研究は行われておらず、中流部と同様早急な調査が必要である。上流部と下流部の屋敷構えについて明らかにすることで、中流部の特色がより具体的に示せる可能性があると共に、物部川流域圏自体の屋敷構えの空間特性が明らかにすることができると考える。

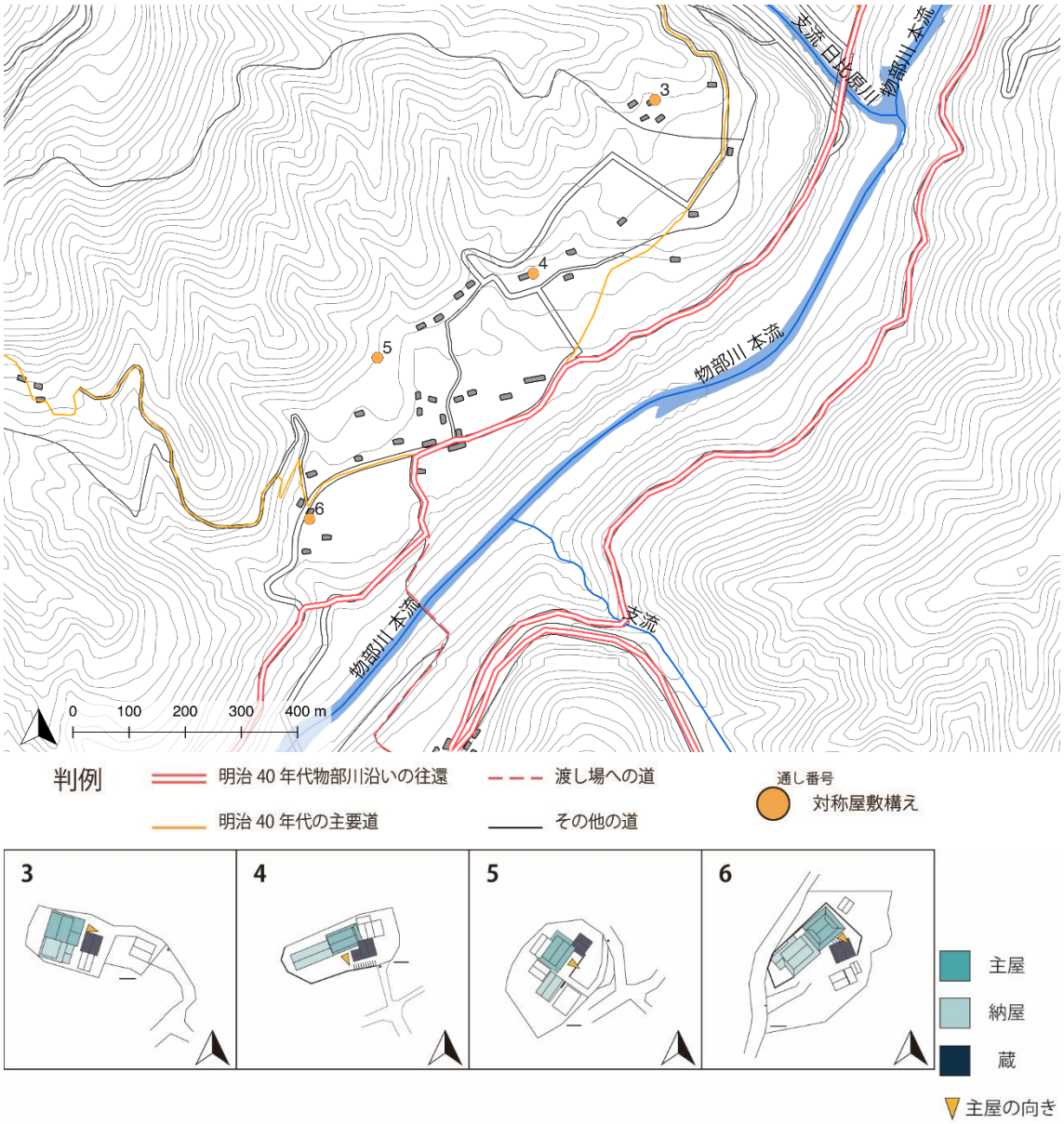
付録

1.　大字ごとの屋敷構え分布と屋敷構え屋根伏せ図

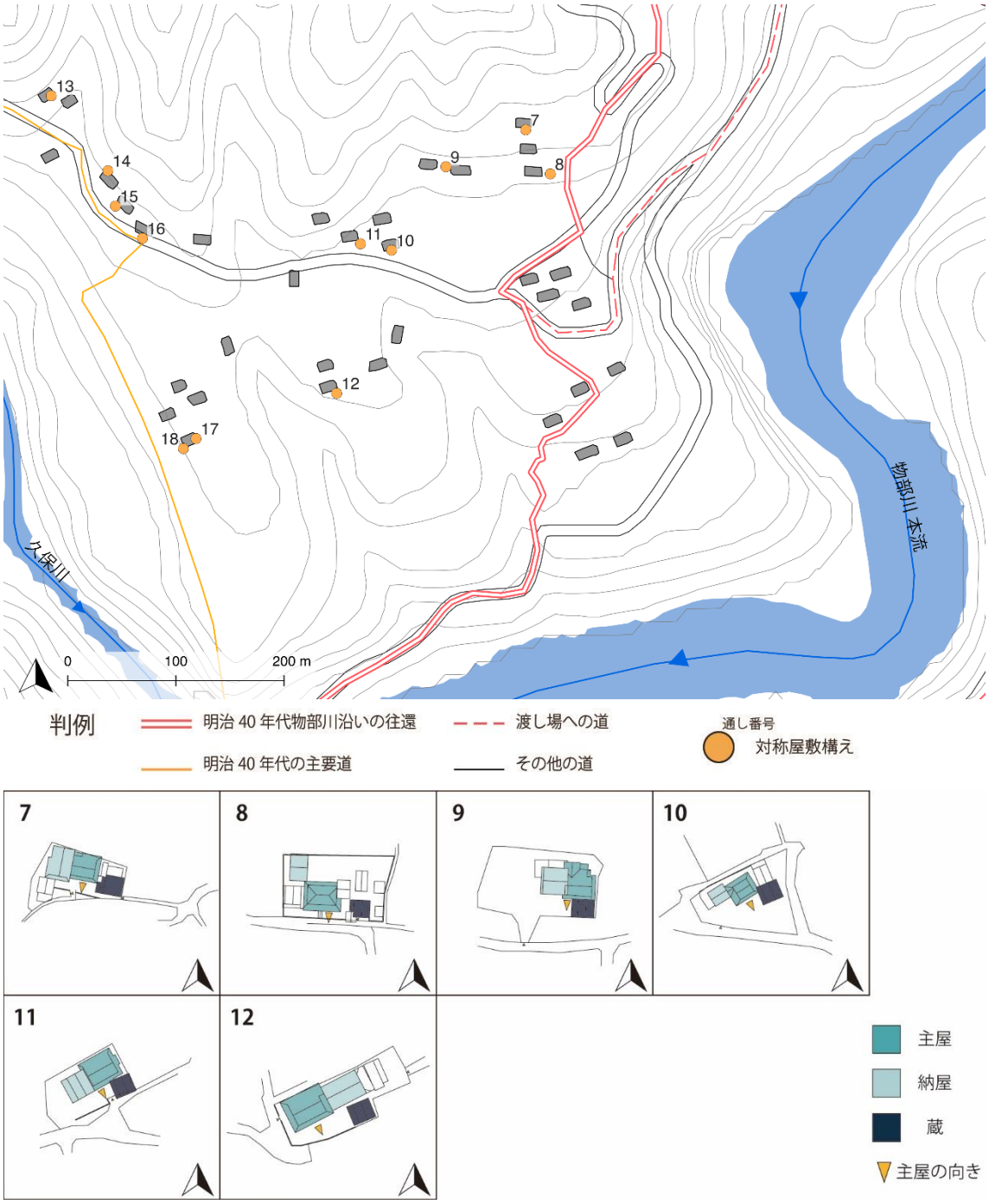
右岸

猪野々

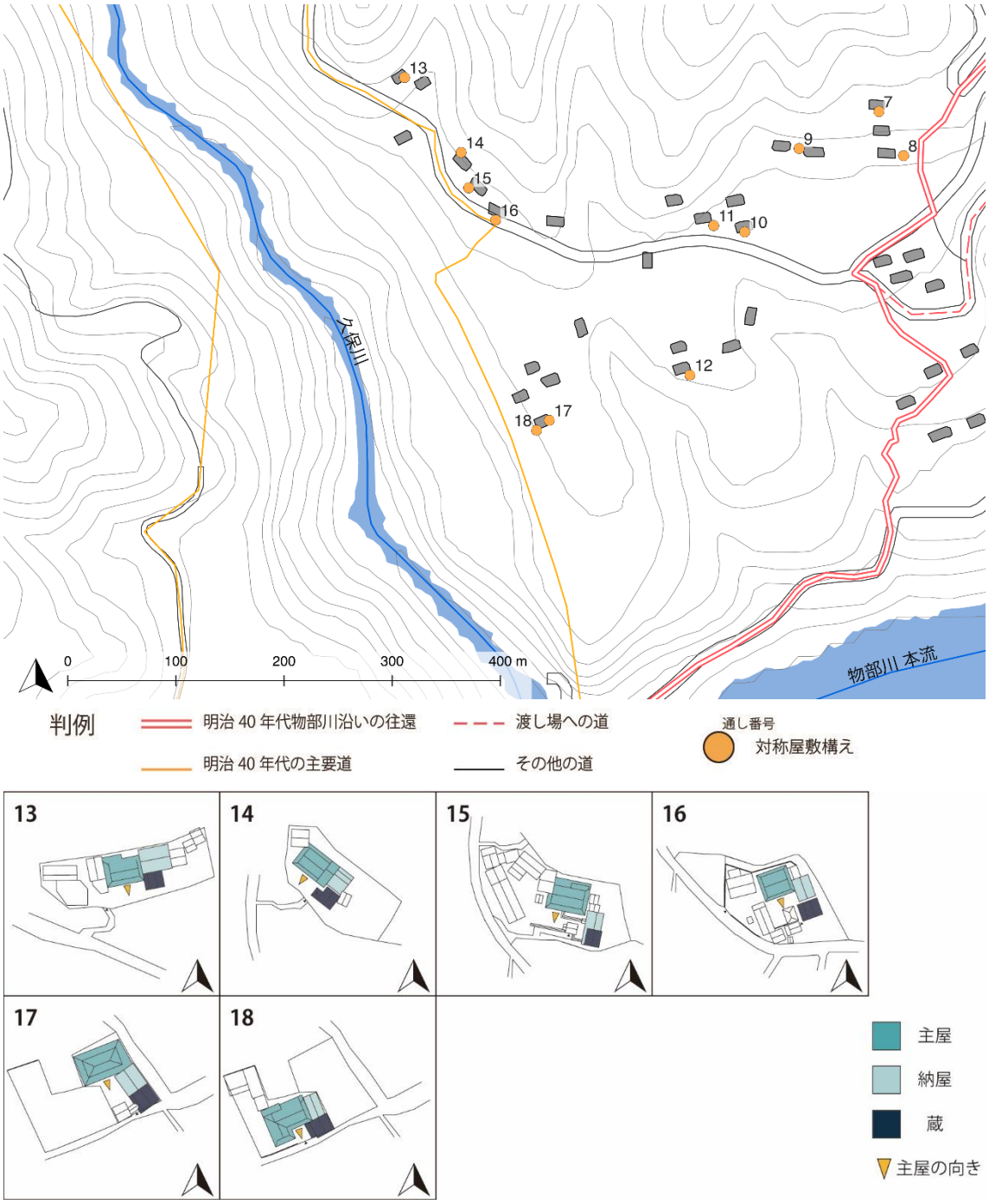
清爪


支流 日比原川
物部川 本流
物部川 本流
物部川 本流
支流
3
4
5
6
0 100 200 300 400 m
判例
明治 40 年代物部川沿いの往還
明治 40 年代の主要道
渡し場への道
その他の道
通し番号
対称屋敷構え
3
4
5
6
主屋
納屋
蔵
主屋の向き

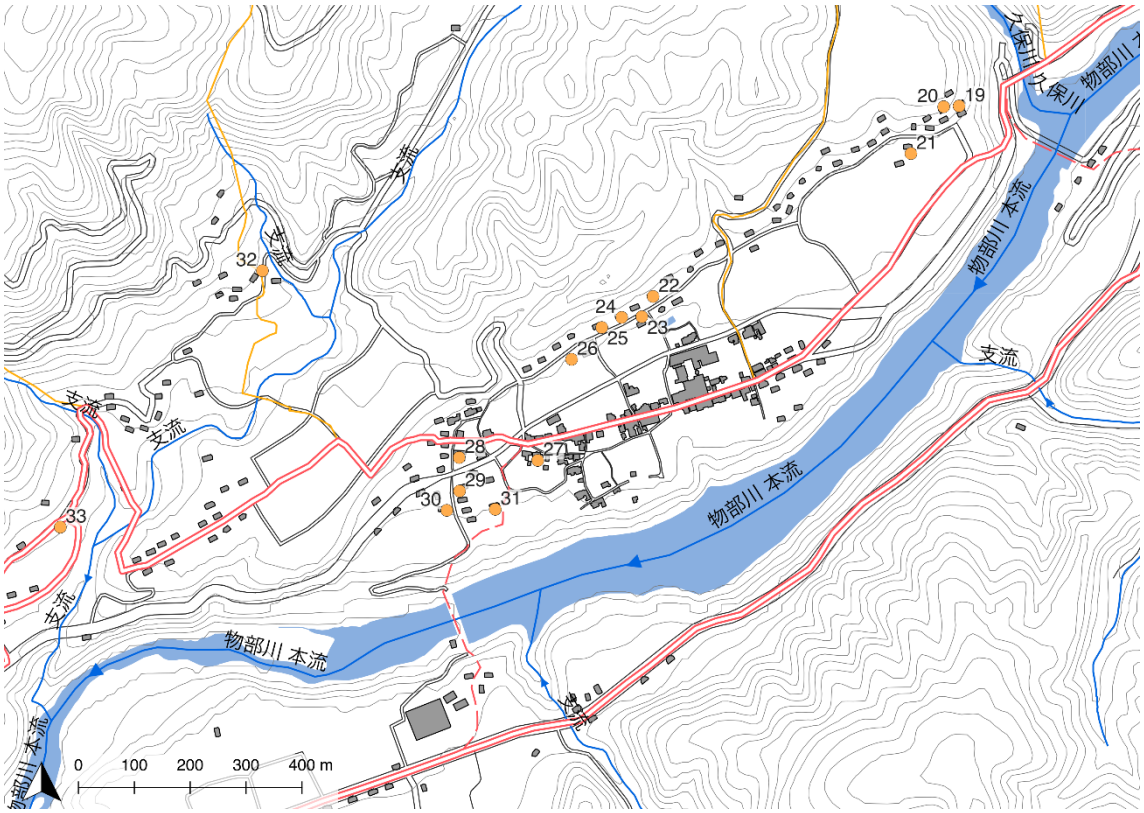
梅久保


13
14
15
16
7
9
8
11
10
12
18
17
久保川
物部川本流
0
100
200 m
判例
明治 40 年代物部川沿いの往還
明治 40 年代の主要道
渡し場への道
その他の道
通し番号
対称屋敷構え
7
8
9
10
11
12
主屋
納屋
蔵
主屋の向き

大井平


13
14
15
16
7
8
9
11
10
12
17
18
久保川
物部川 本流
0
100
200
300
400 m
判例
明治 40 年代物部川沿いの往還
明治 40 年代の主要道
渡し場への道
その他の道
通し番号
対称屋敷構え
13
14
15
16
17
18
主屋
納屋
蔵
主屋の向き

永野



判例

明治 40 年代物部川沿いの往還

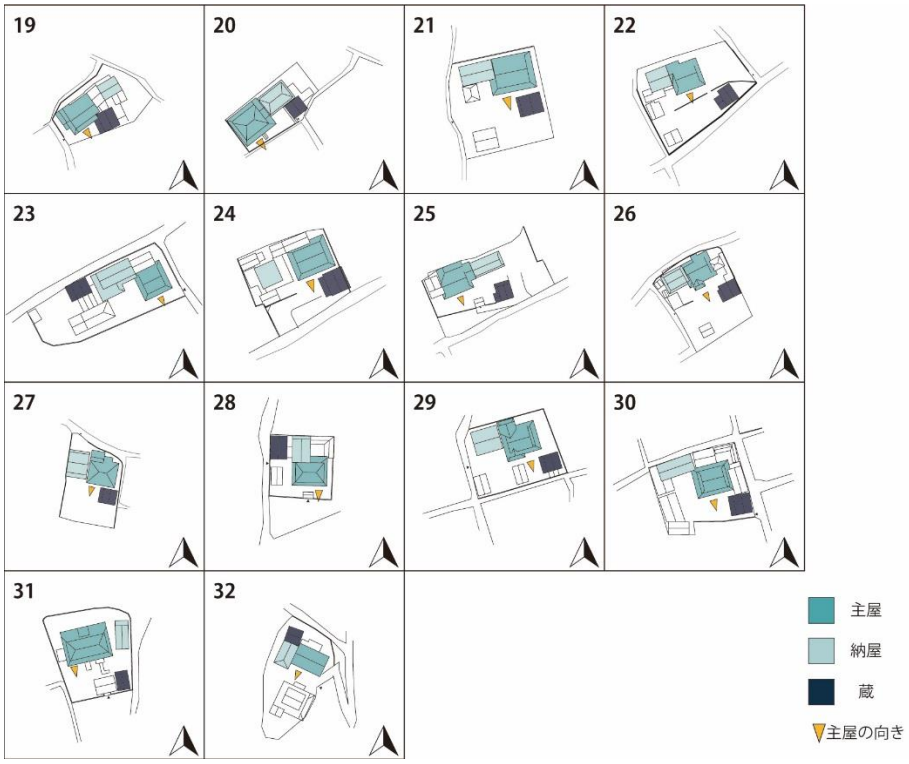
明治 40 年代の主要道

渡し場への道

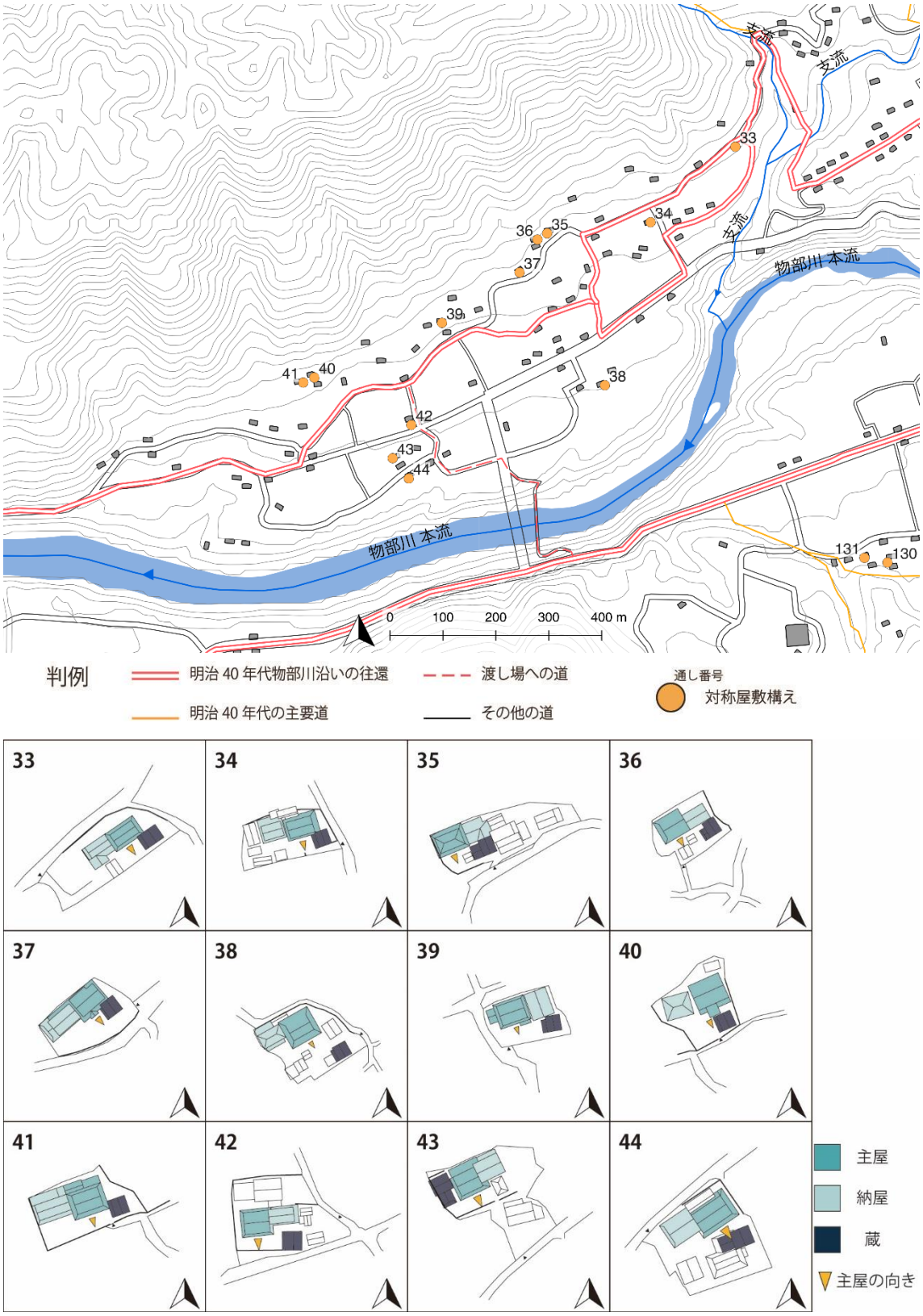
その他の道

通し番号

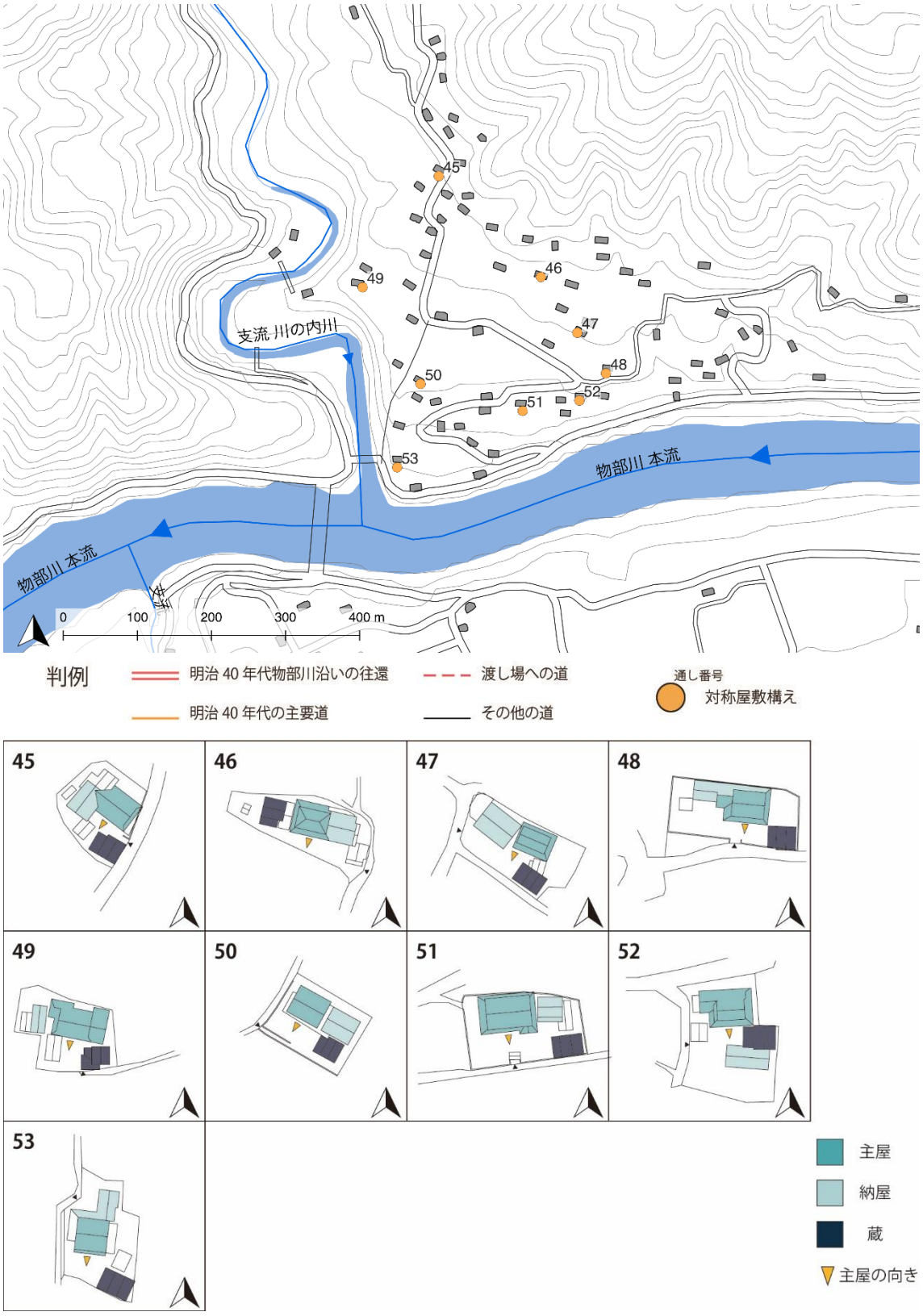
対称屋敷構え



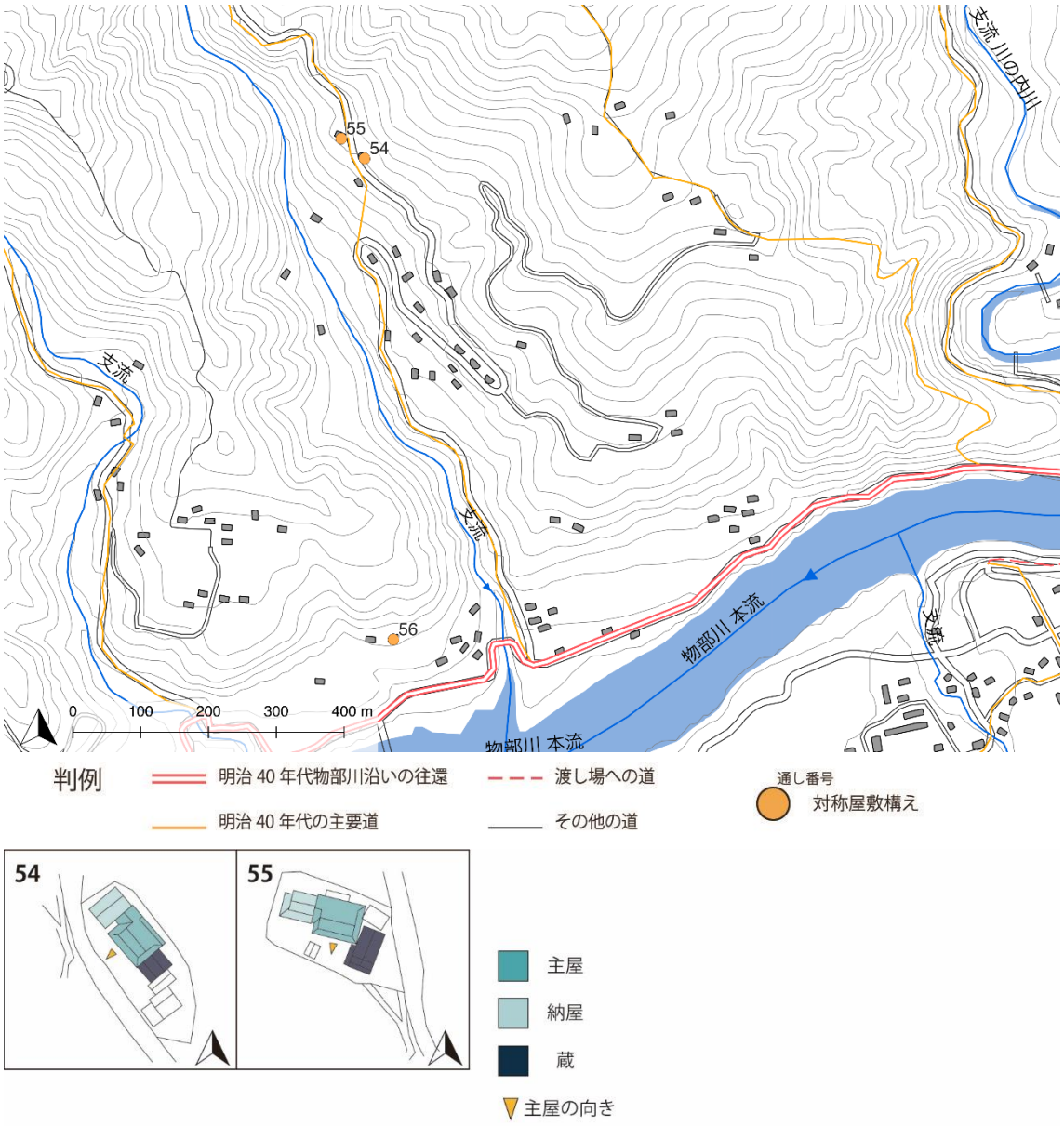
朴ノ木


支流
支流
支流
物部川 本流
物部川 本流
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
130
131
0
100
200
300
400 m
判例
明治 40 年代物部川沿いの往還
明治 40 年代の主要道
渡し場への道
その他の道
通し番号
対称屋敷構え
主屋
納屋
蔵
主屋の向き

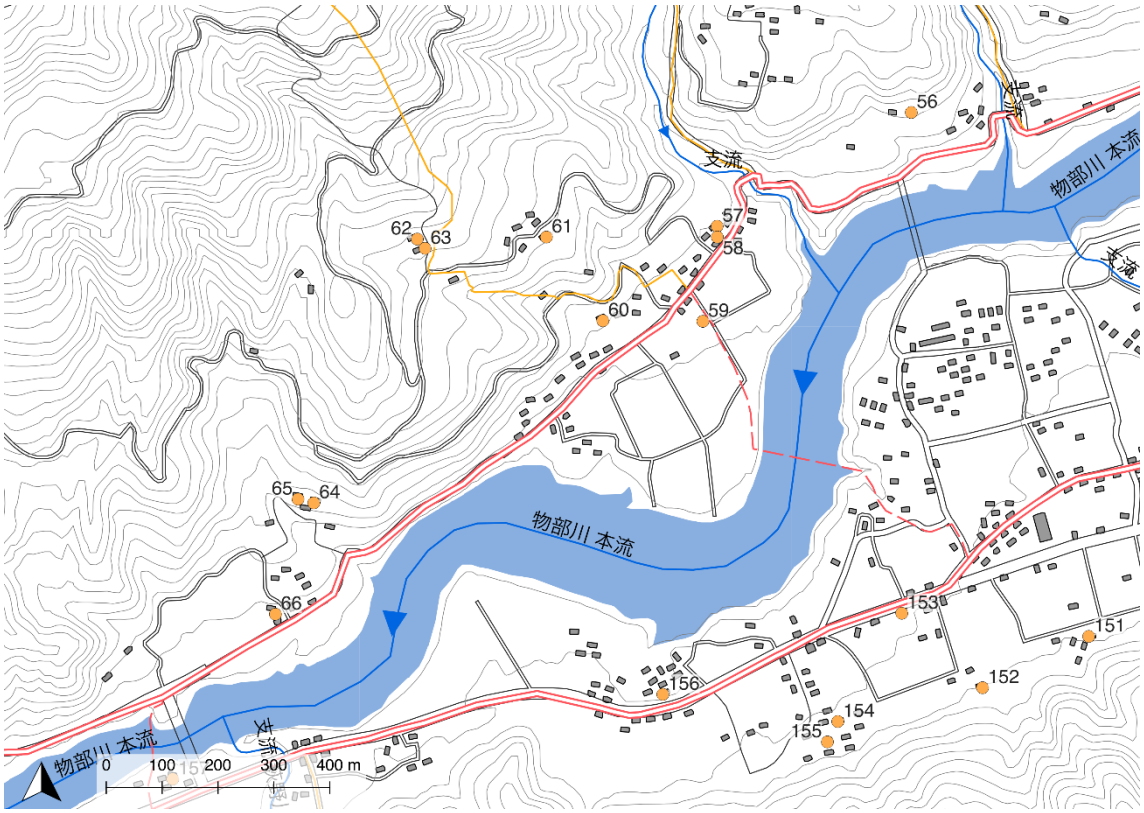
日ノ御子


45
46
47
48
49
50
51
52
53
支流 川の内川
物部川 本流
物部川 本流
0
100
200
300
400 m
判例
明治 40 年代物部川沿いの往還
明治 40 年代の主要道
渡し場への道
その他の道
通し番号
対称屋敷構え
45
46
47
48
49
50
51
52
53
主屋
納屋
蔵
主屋の向き

有瀬


支流 川の内川
55
54
支流
支流
56
物部川 本流
支流
物部川 本流
0
100
200
300
400 m
判例
明治 40 年代物部川沿いの往還
明治 40 年代の主要道
渡し場への道
その他の道
通し番号
対称屋敷構え
54
55
主屋
納屋
蔵
主屋の向き

五百蔵



判例

明治 40 年代物部川沿いの往還

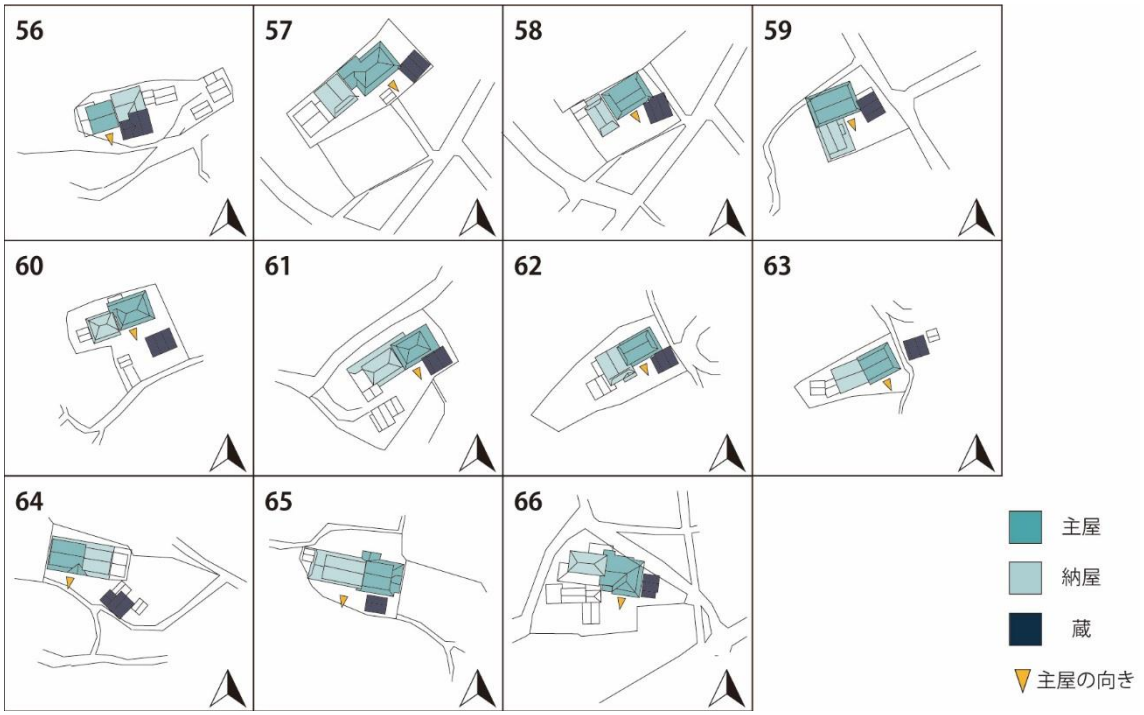
明治 40 年代の主要道

渡し場への道

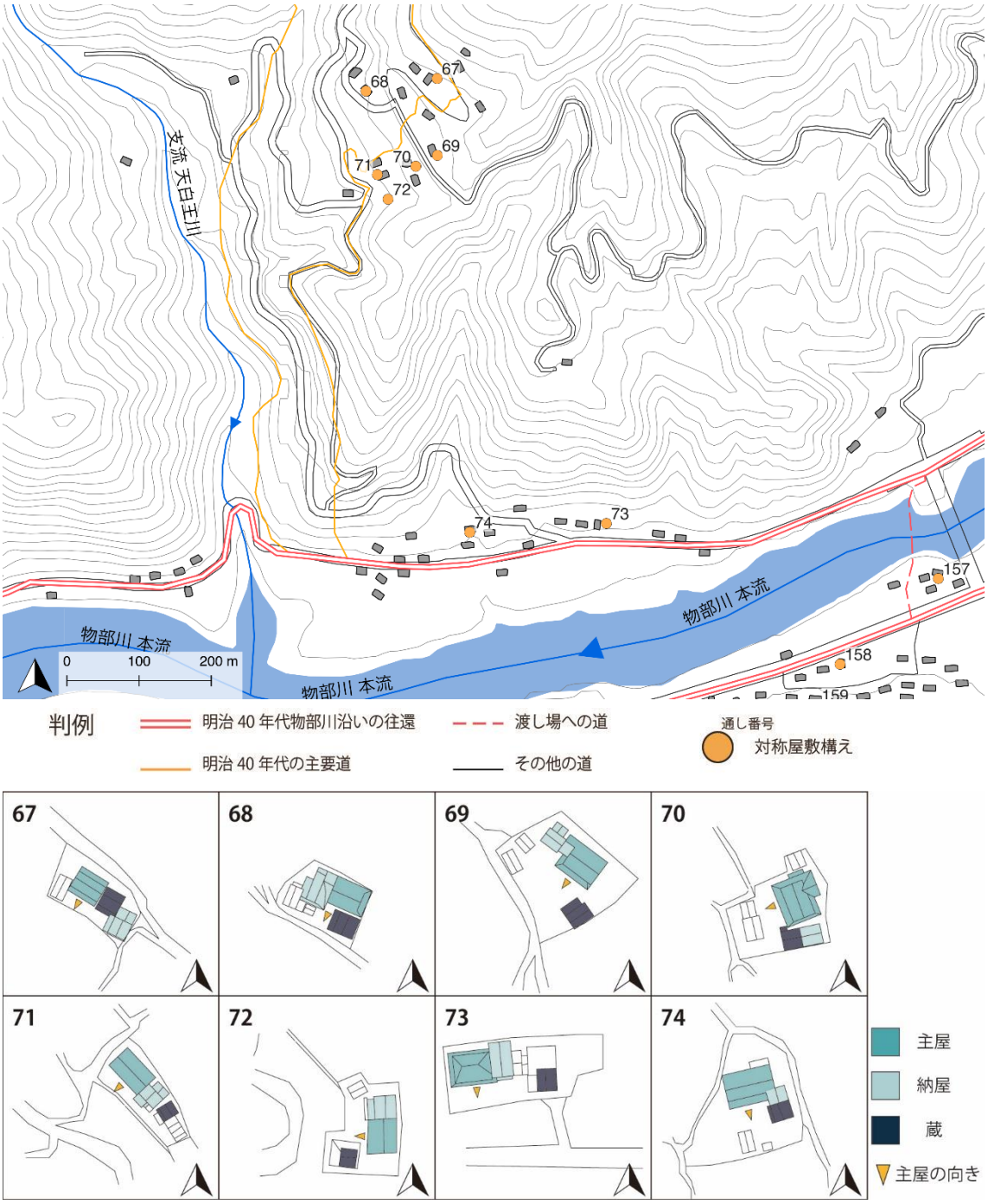
その他の道

通し番号

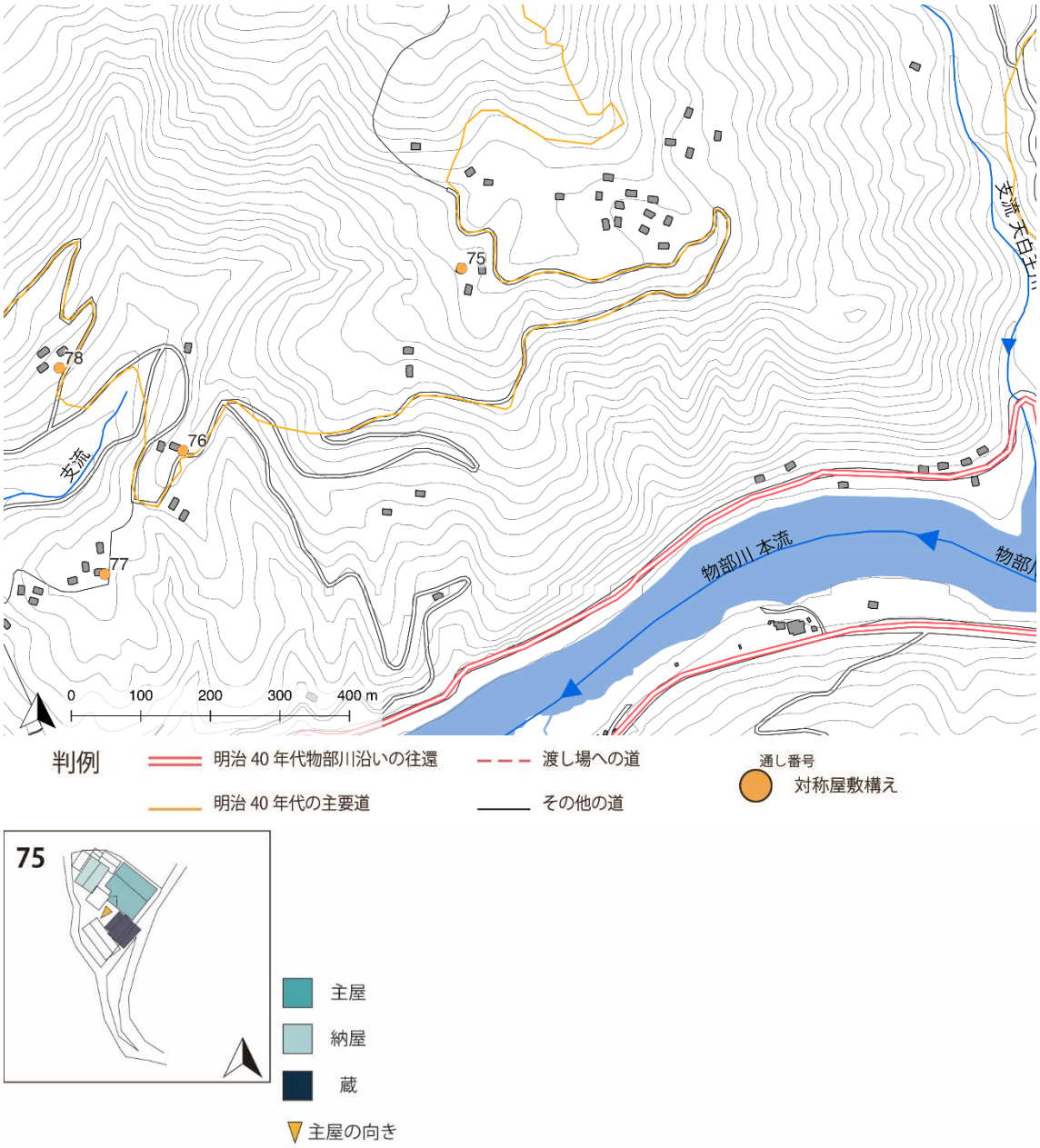
対称屋敷構え



白川

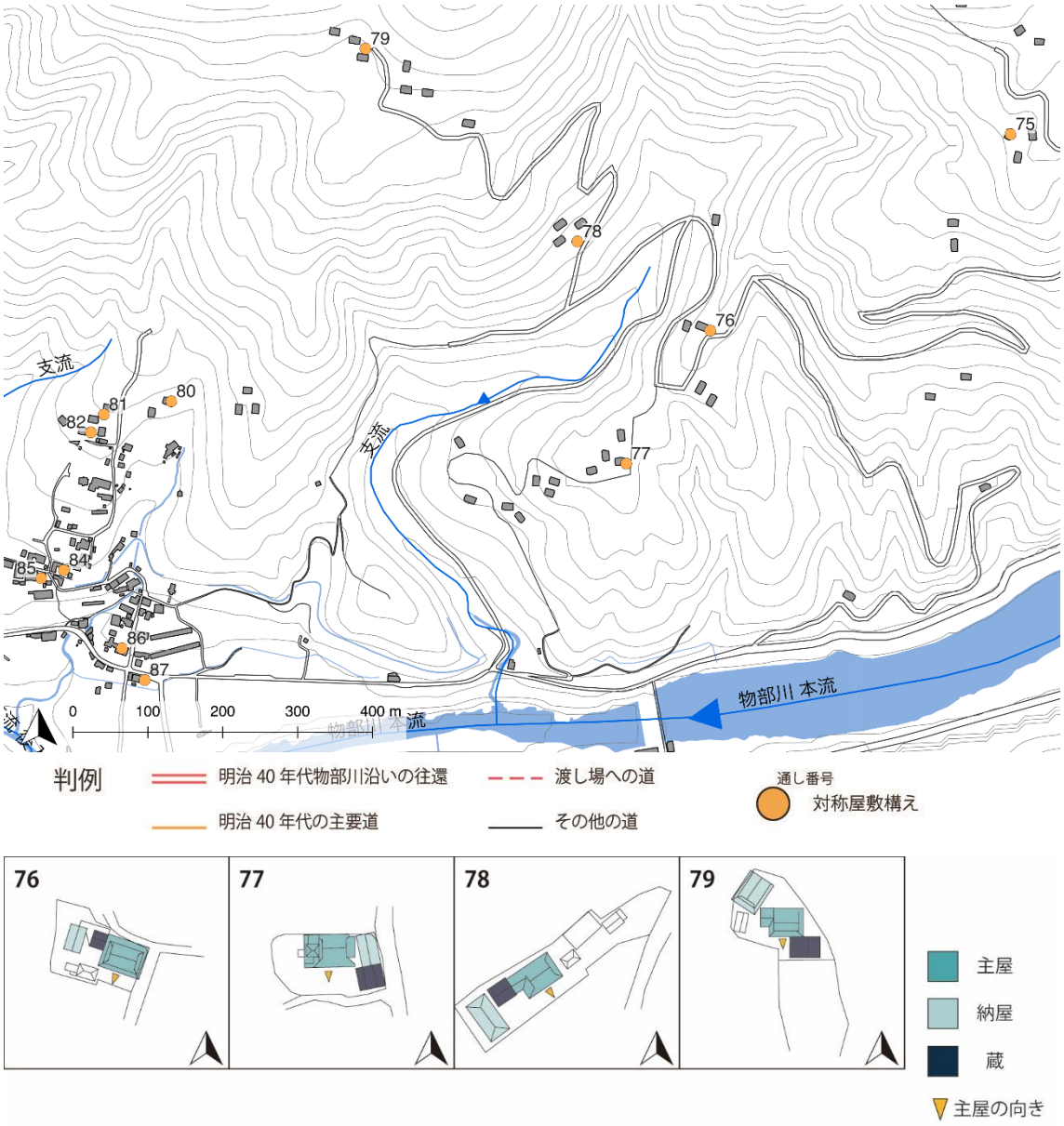

67
68
69
70
71
72
73
74
157
158
159
支流 天日王川
物部川 本流
物部川 本流
物部川 本流
0
100
200 m
判例
明治 40 年代物部川沿いの往還
明治 40 年代の主要道
渡し場への道
その他の道
通し番号
対称屋敷構え
67
68
69
70
71
72
73
74
主屋
納屋
蔵
主屋の向き

佐竹

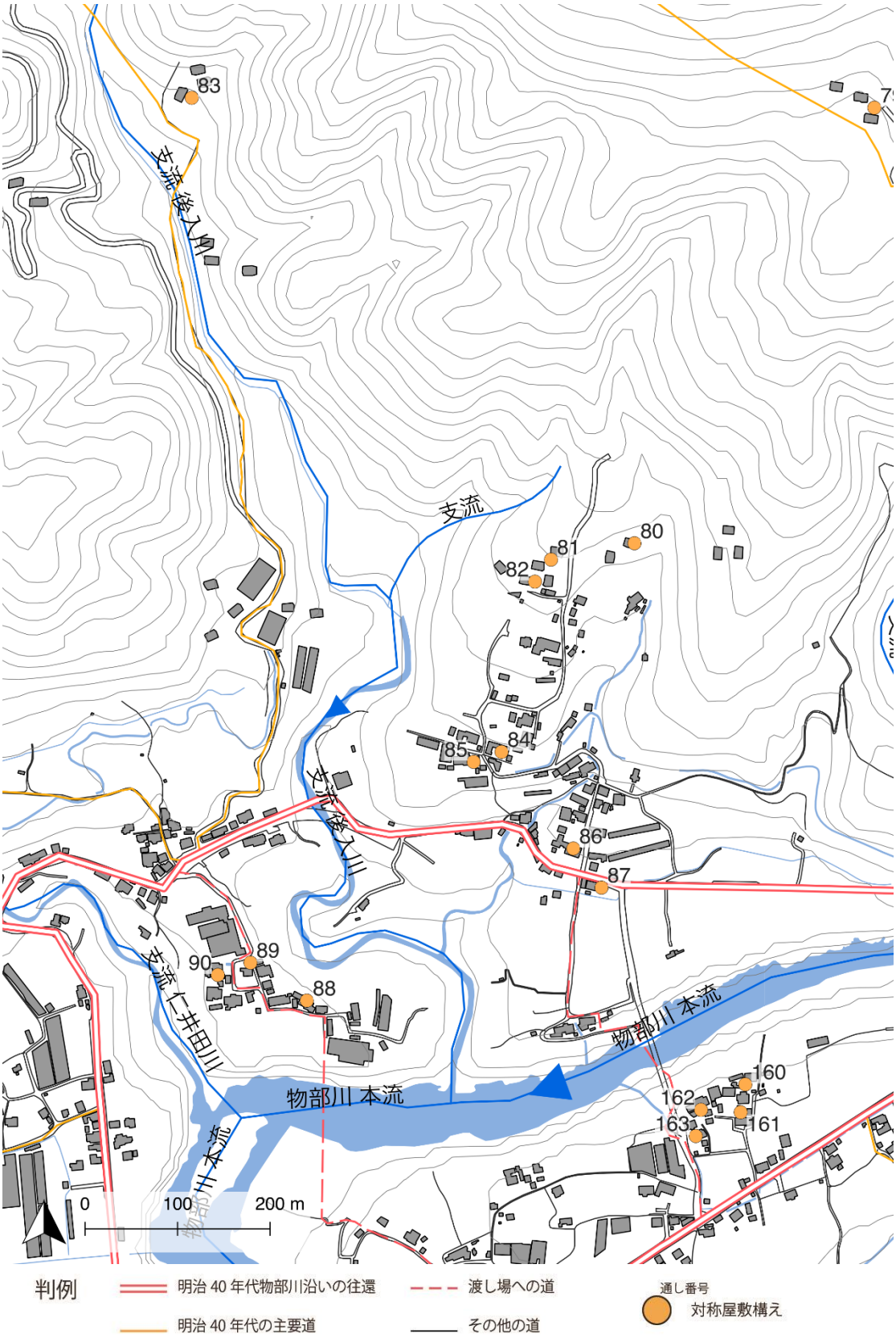

75
76
77
78
支流
物部川 本流
0
100
200
300
400 m
判例
明治 40 年代物部川沿いの往還
明治 40 年代の主要道
渡し場への道
その他の道
通し番号
対称屋敷構え

75
主屋
納屋
蔵
主屋の向き

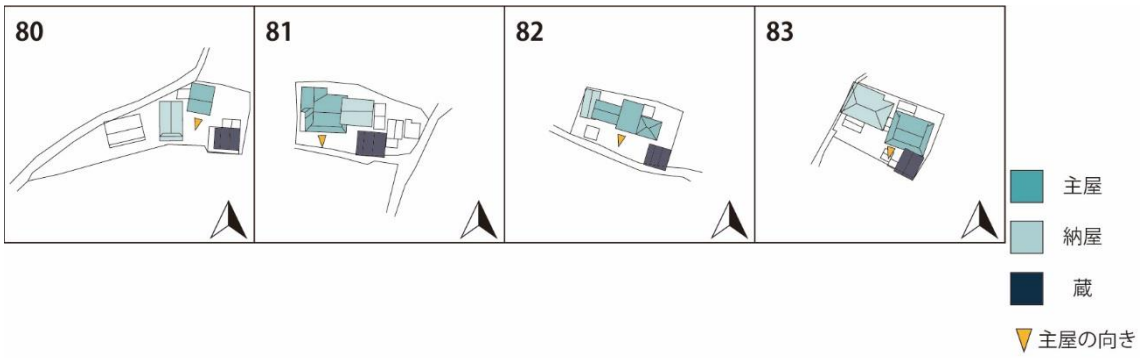
有谷


79
75
78
76
77
支流
80
81
82
支流
84
85
86
87
物部川 本流
0
100
200
300
400 m
物部川 本流
判例
明治 40 年代物部川沿いの往還
渡し場への道
明治 40 年代の主要道
その他の道
通し番号
対称屋敷構え
76
77
78
79
主屋
納屋
蔵
主屋の向き

中後入・本村

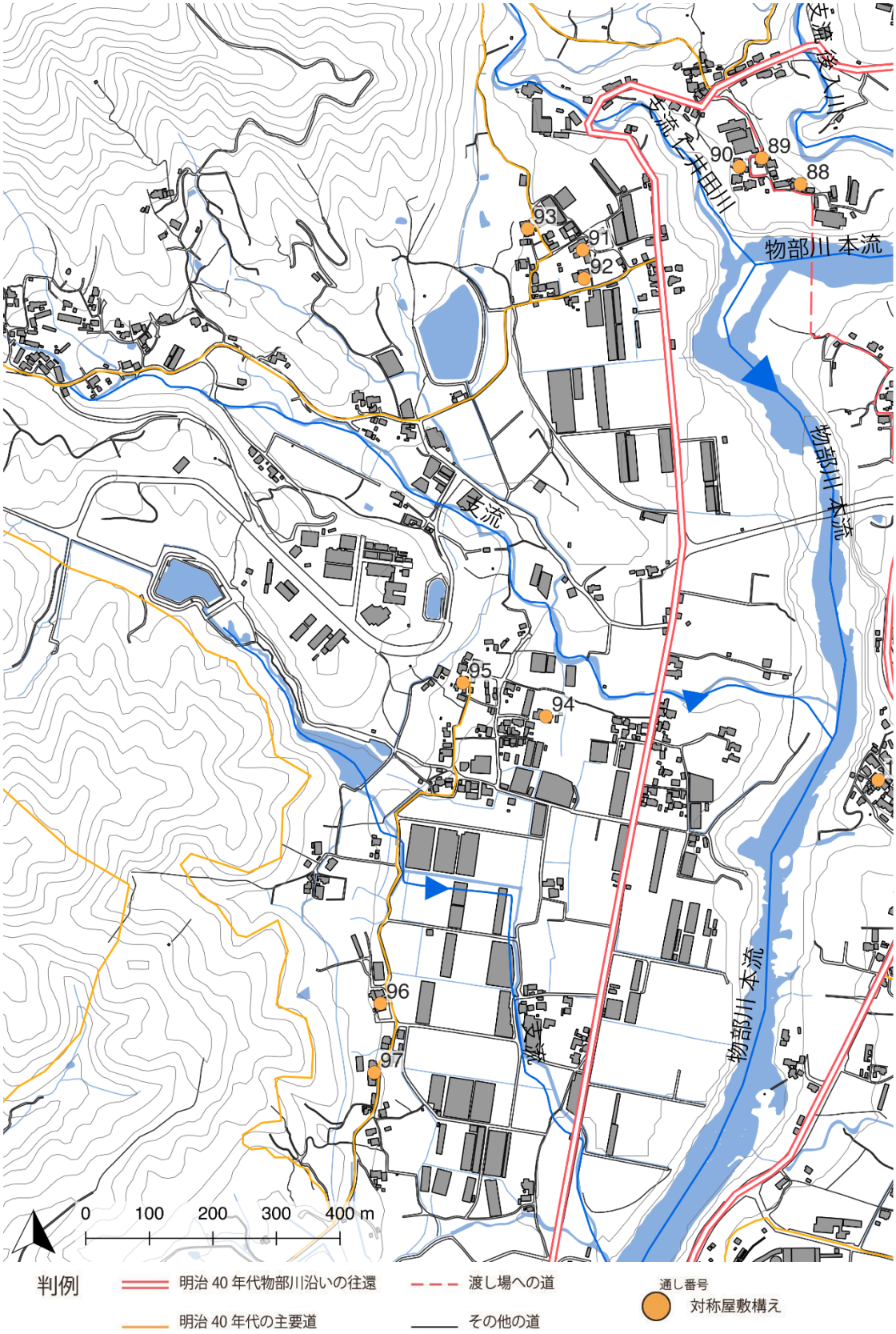

83
支流 後入川
支流
80
81
82
84
85
支流 後入川
86
87
89
90
88
支流 仁井田川
物部川 本流
物部川 本流
物部川 本流
160
162
163
161
0
100
200 m
判例
明治 40 年代物部川沿いの往還
明治 40 年代の主要道
渡し場への道
その他の道
通し番号
対称屋敷構え

中後入



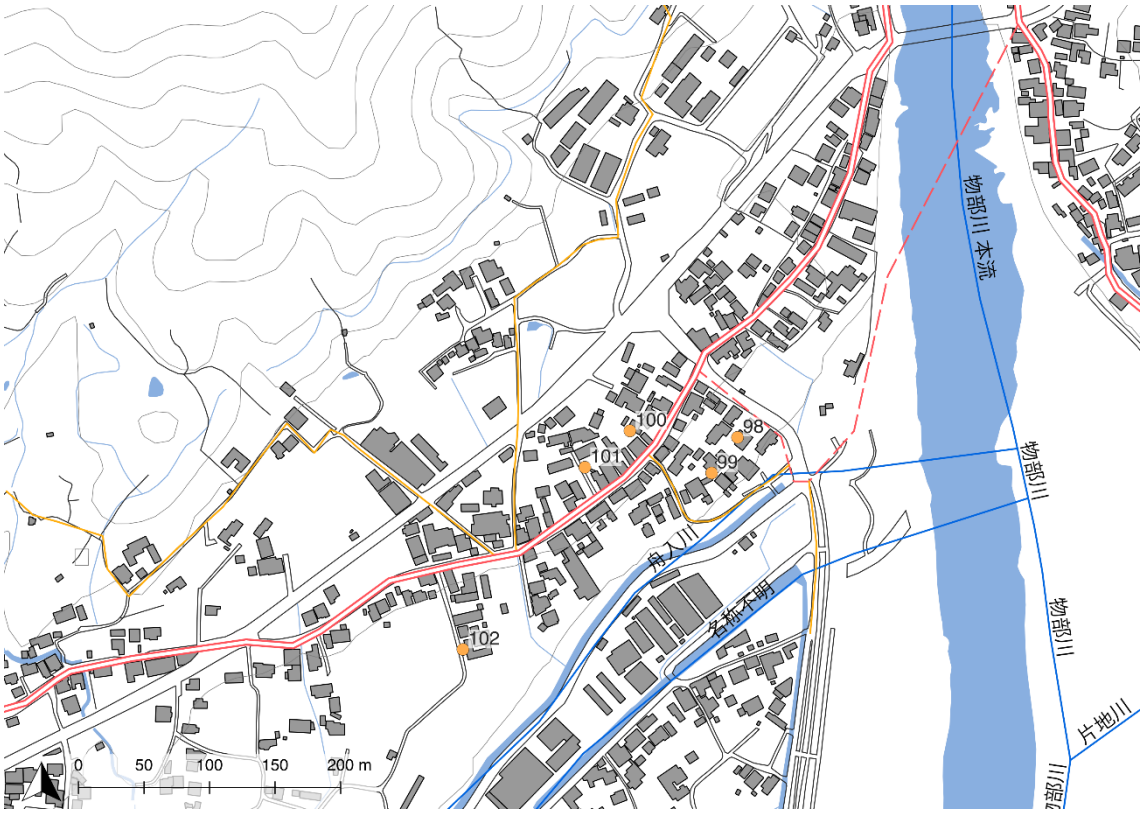
本村

佐野


物部川本流
物部川本流
物部川本流
支流
支流
支流
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
0
100
200
300
400 m
判例
明治 40 年代物部川沿いの往還
明治 40 年代の主要道
渡し場への道
その他の道
通し番号
対称屋敷構え

91
92
93
94
95
96
97
主屋
納屋
蔵
主屋の向き

楠目



判例

明治 40 年代物部川沿いの往還

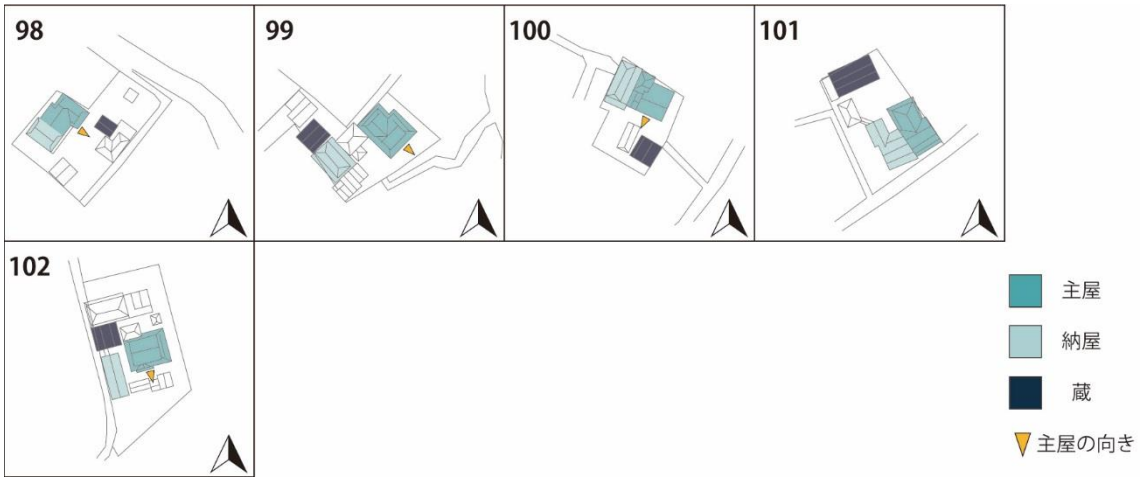
明治 40 年代の主要道

渡し場への道

その他の道

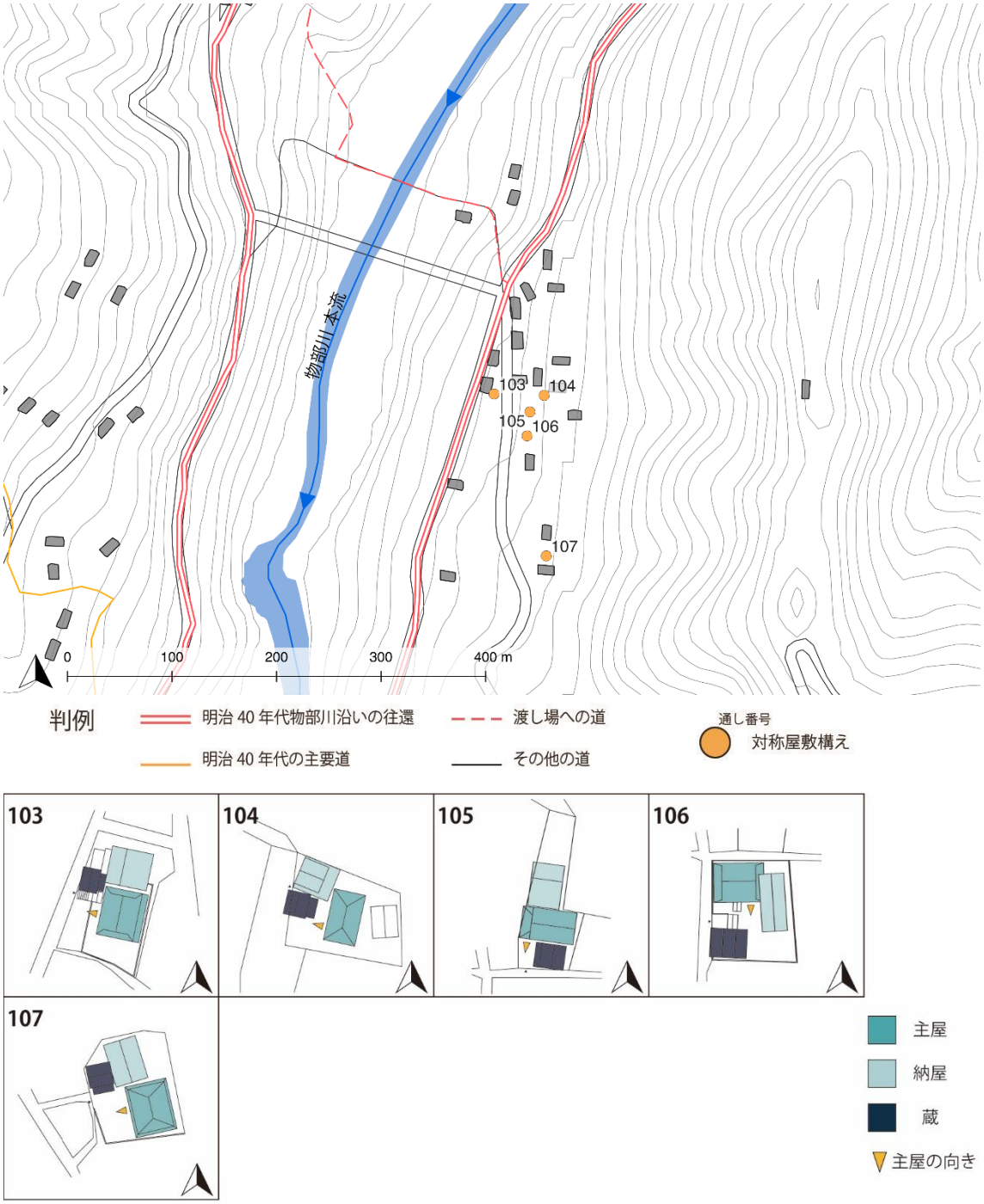
通し番号

対称屋敷構え

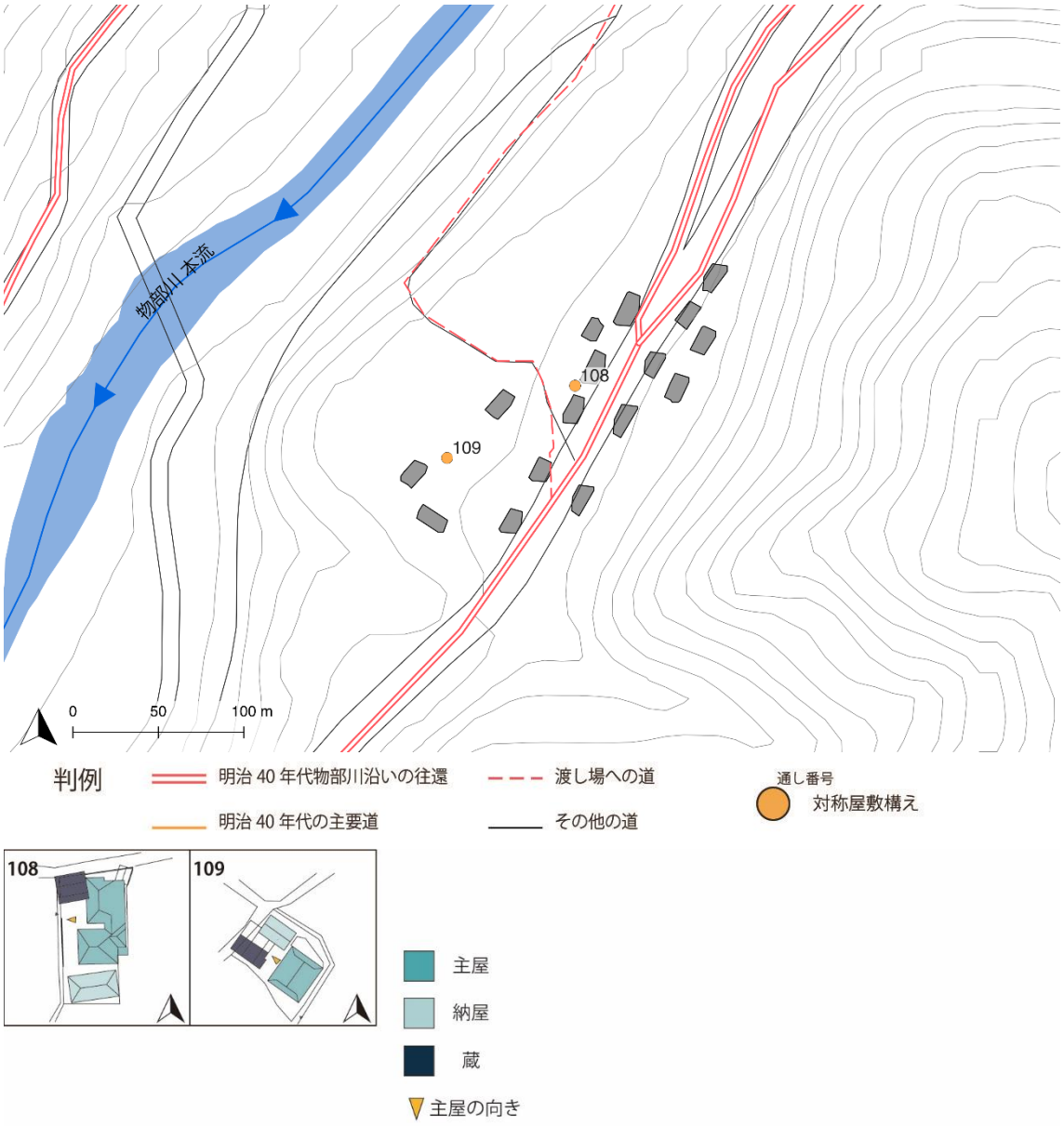


左岸

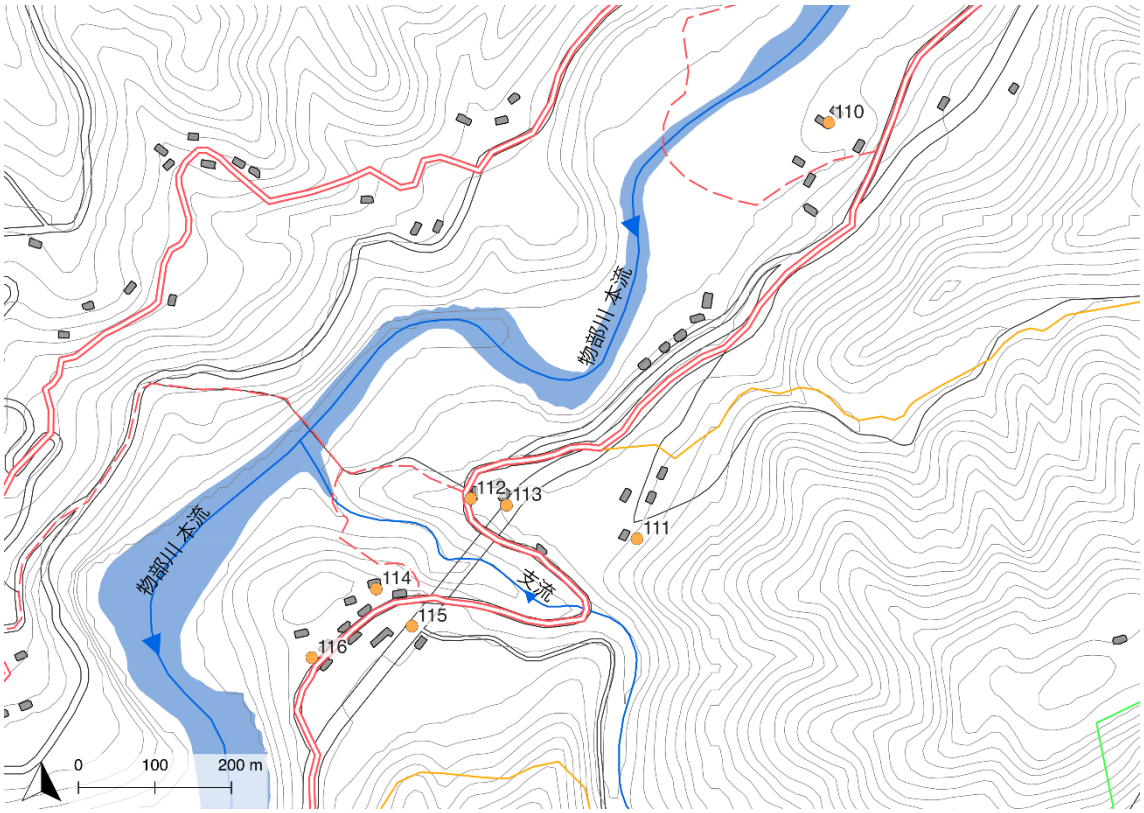
永瀬


物部川本流
103
104
105
106
107
0
100
200
300
400 m
判例
明治 40 年代物部川沿いの往還
渡し場への道
通し番号
対称屋敷構え
明治 40 年代の主要道
その他の道
103
104
105
106
107
主屋
納屋
蔵
主屋の向き

蕨野


物部川本流
108
109
0
50
100 m
判例
明治 40 年代物部川沿いの往還
渡し場への道
通し番号
対称屋敷構え
明治 40 年代の主要道
その他の道
108
109
主屋
納屋
蔵
主屋の向き

白石



判例

明治 40 年代物部川沿いの往還

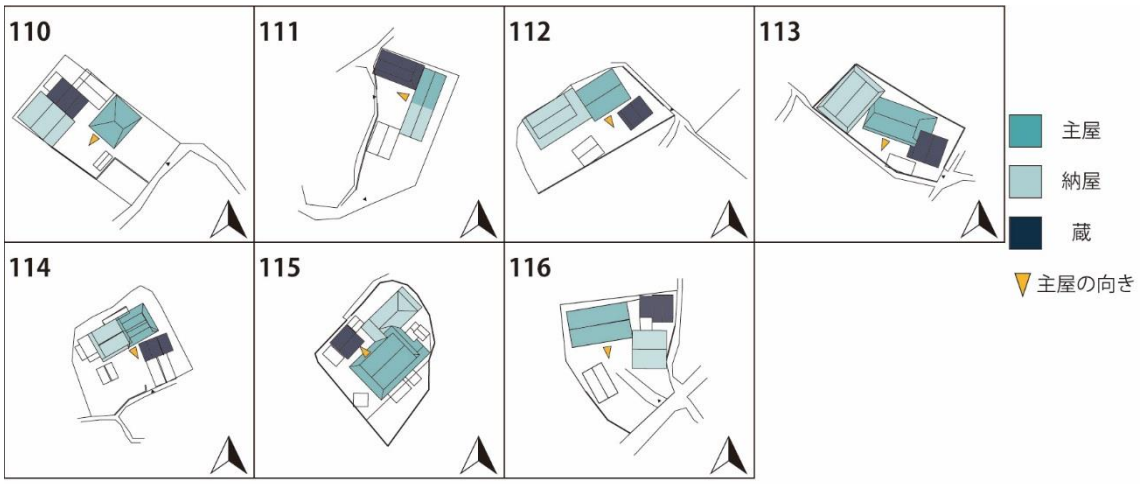
明治 40 年代の主要道

渡し場への道

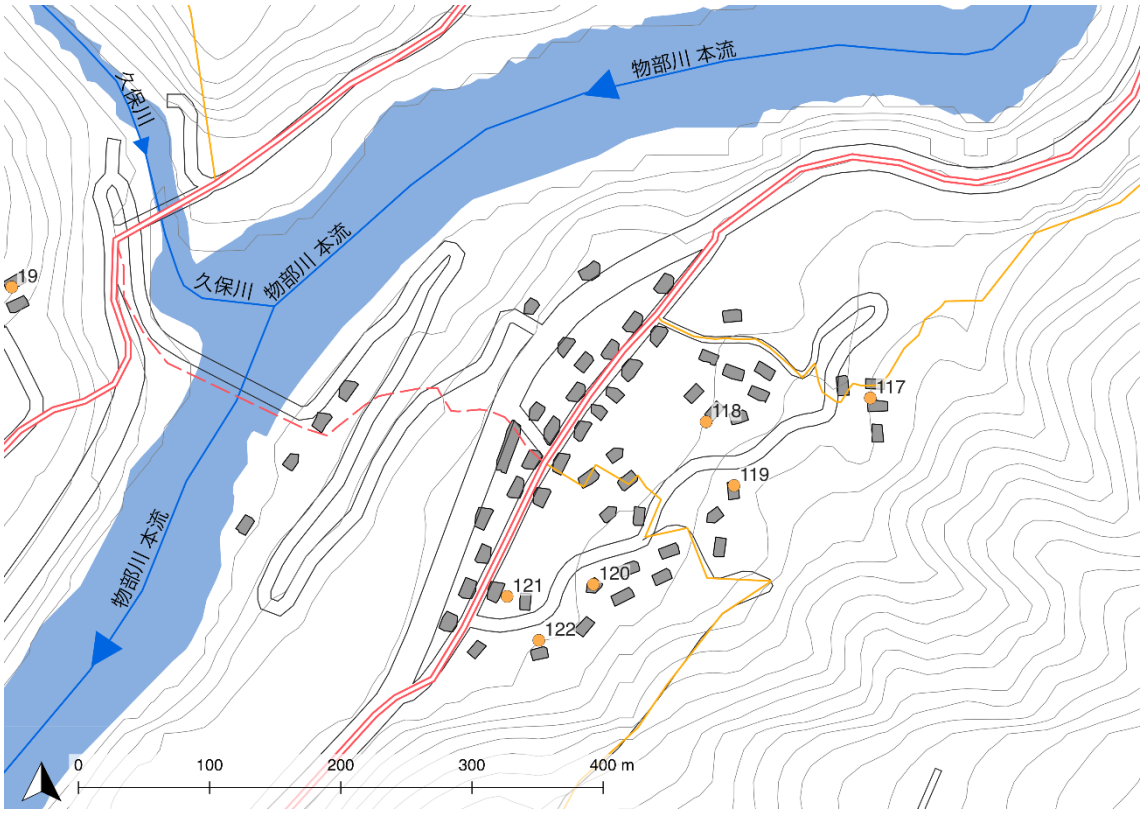
その他の道

通し番号

対称屋敷構え

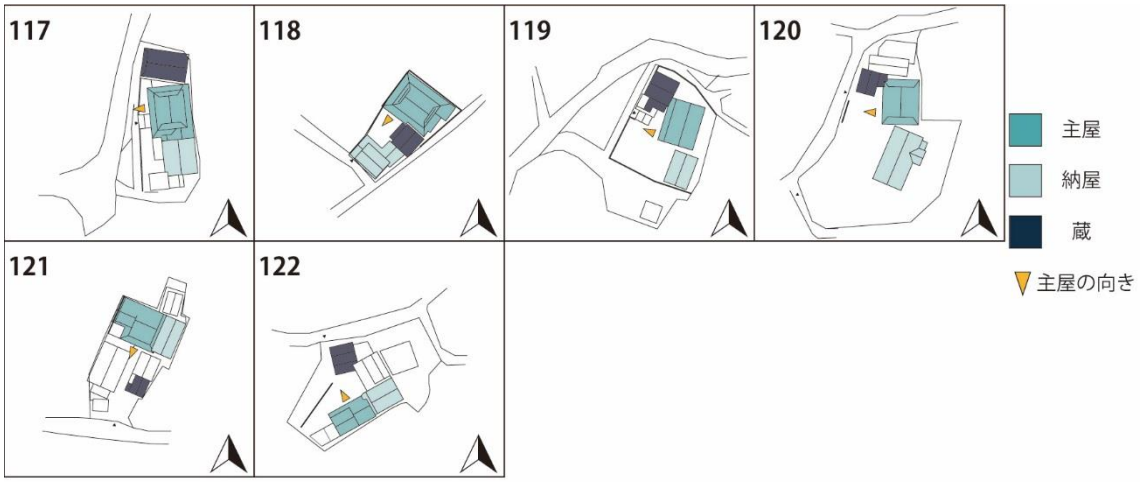


根須

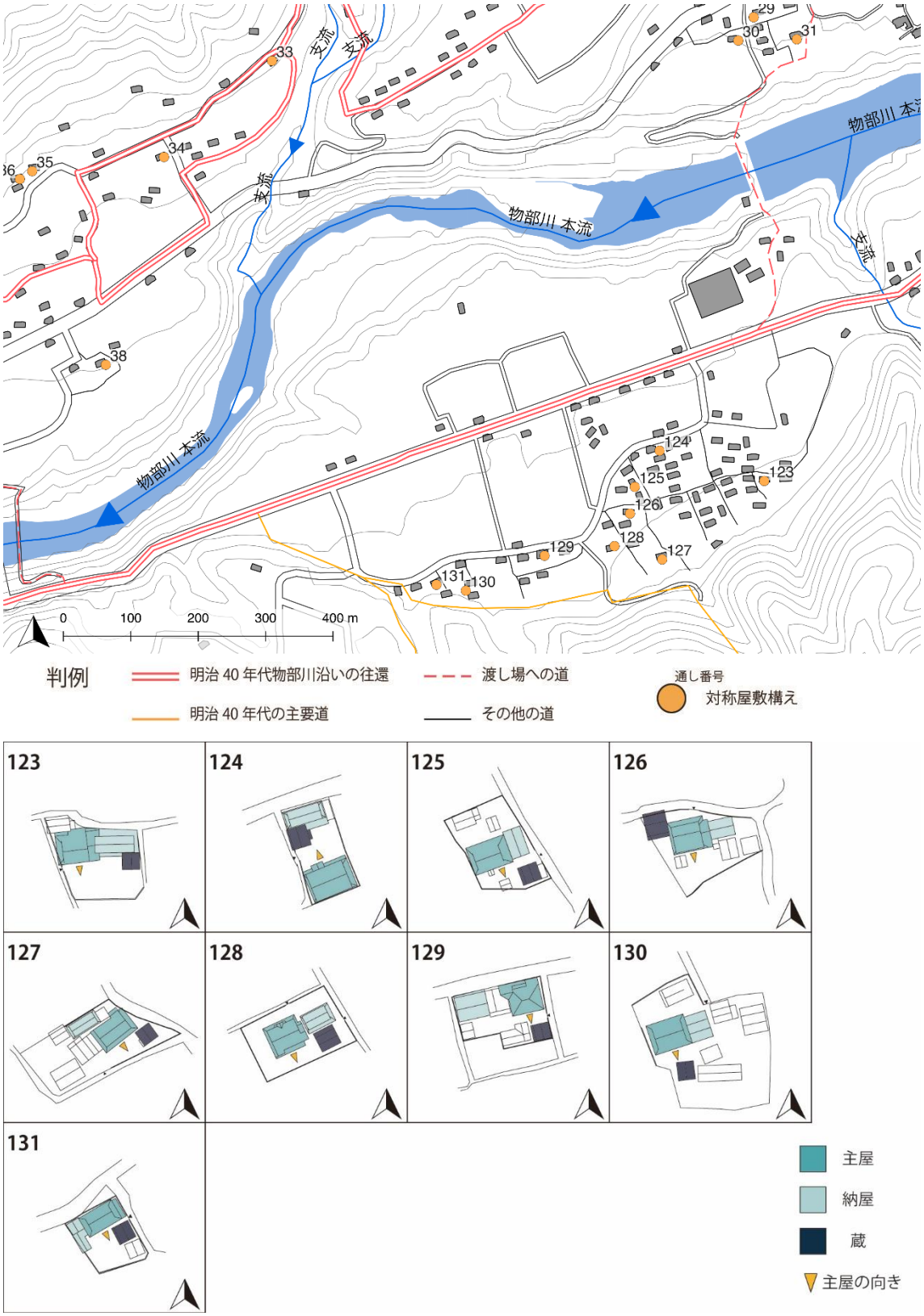


判例

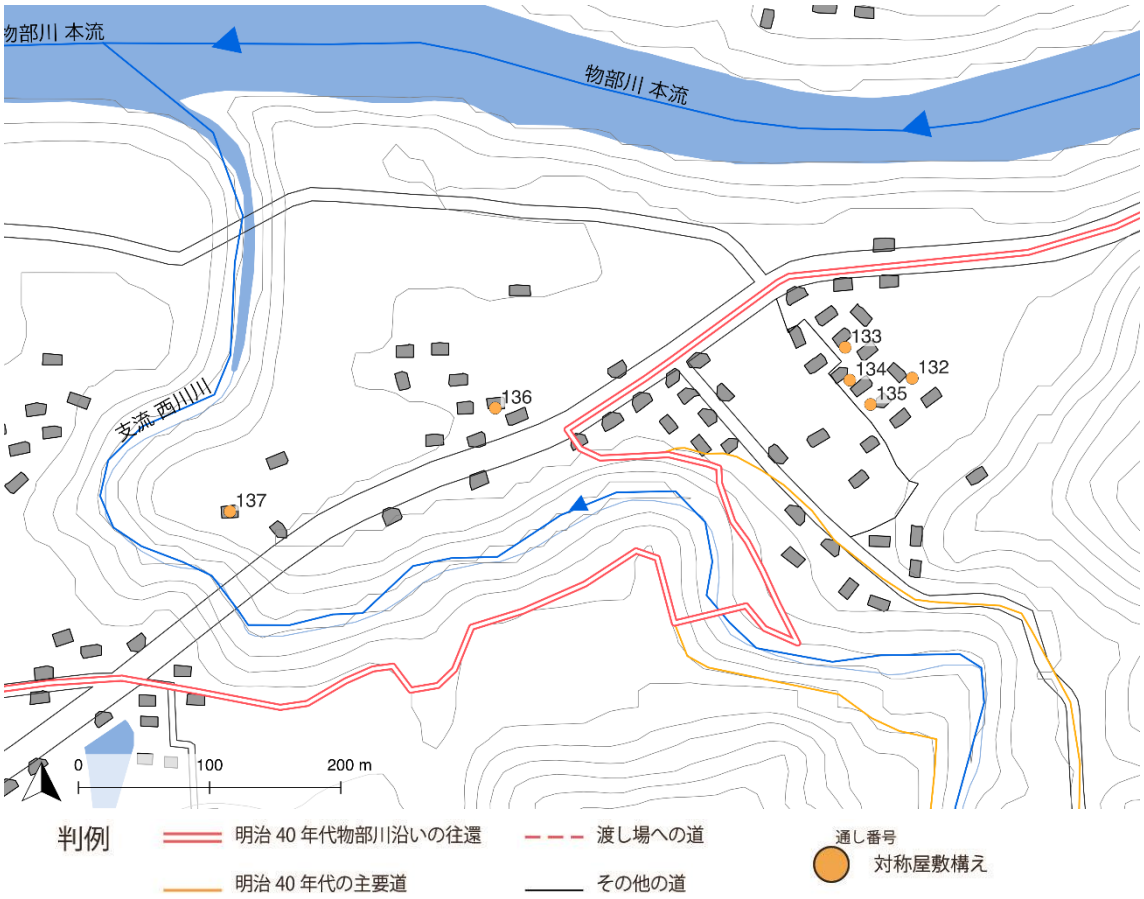
明治 40 年代物部川沿いの往還
明治 40 年代の主要道
渡し場への道
その他の道
通し番号
対称屋敷構え



吉野


物部川 本流
支流
支流
支流
支流
物部川 本流
物部川 本流
29
30
31
33
34
35
36
38
123
124
125
126
127
128
129
130
131
0
100
200
300
400 m
判例
明治 40 年代物部川沿いの往還
明治 40 年代の主要道
渡し場への道
その他の道
通し番号
対称屋敷構え
123
124
125
126
127
128
129
130
131
主屋
納屋
蔵
主屋の向き

小川

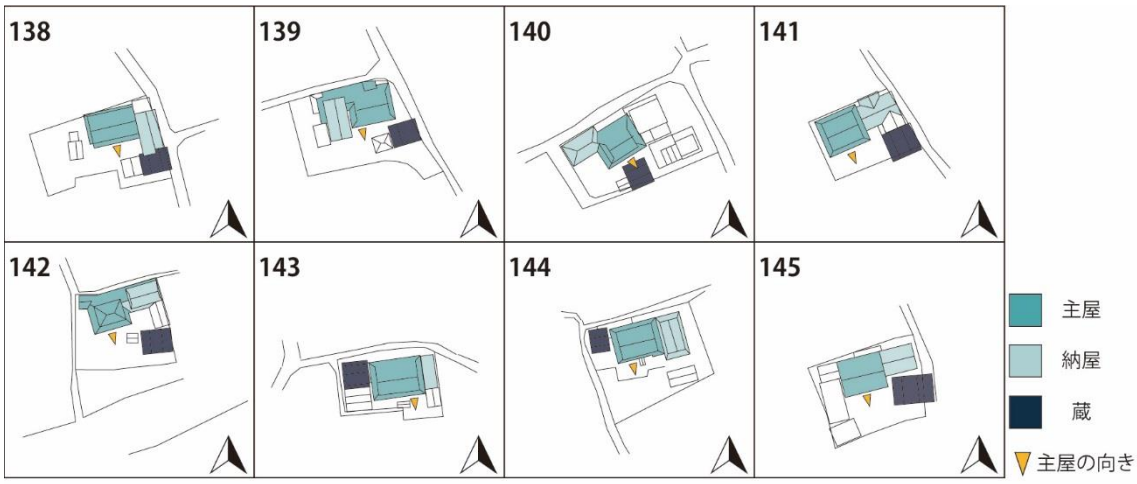

物部川 本流
物部川 本流
支流 西川川
133
134
132
135
136
137
0
100
200 m
判例
明治 40 年代物部川沿いの往還
明治 40 年代の主要道
渡し場への道
その他の道
通し番号
対称屋敷構え

132
133
134
135
136
137
主屋
納屋
蔵
主屋の向き

韮生野・美良布

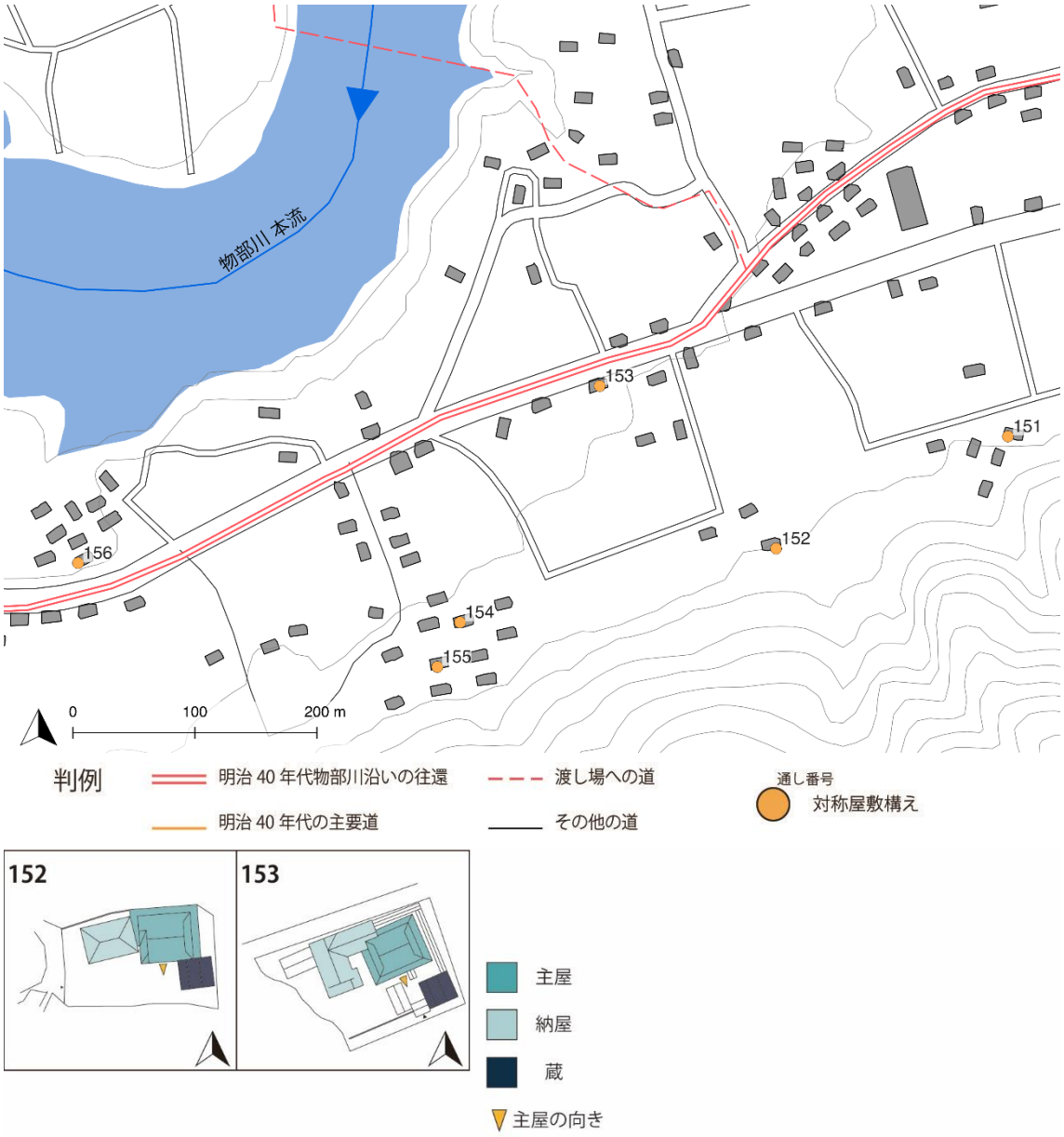
物部川 本流
物部川 本流
物部川 本流
支流 西川川
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
0
100
200
300
400 m
判例
明治 40 年代物部川沿いの往還
明治 40 年代の主要道
渡し場への道
その他の道
通し番号
対称屋敷構え

韮生野

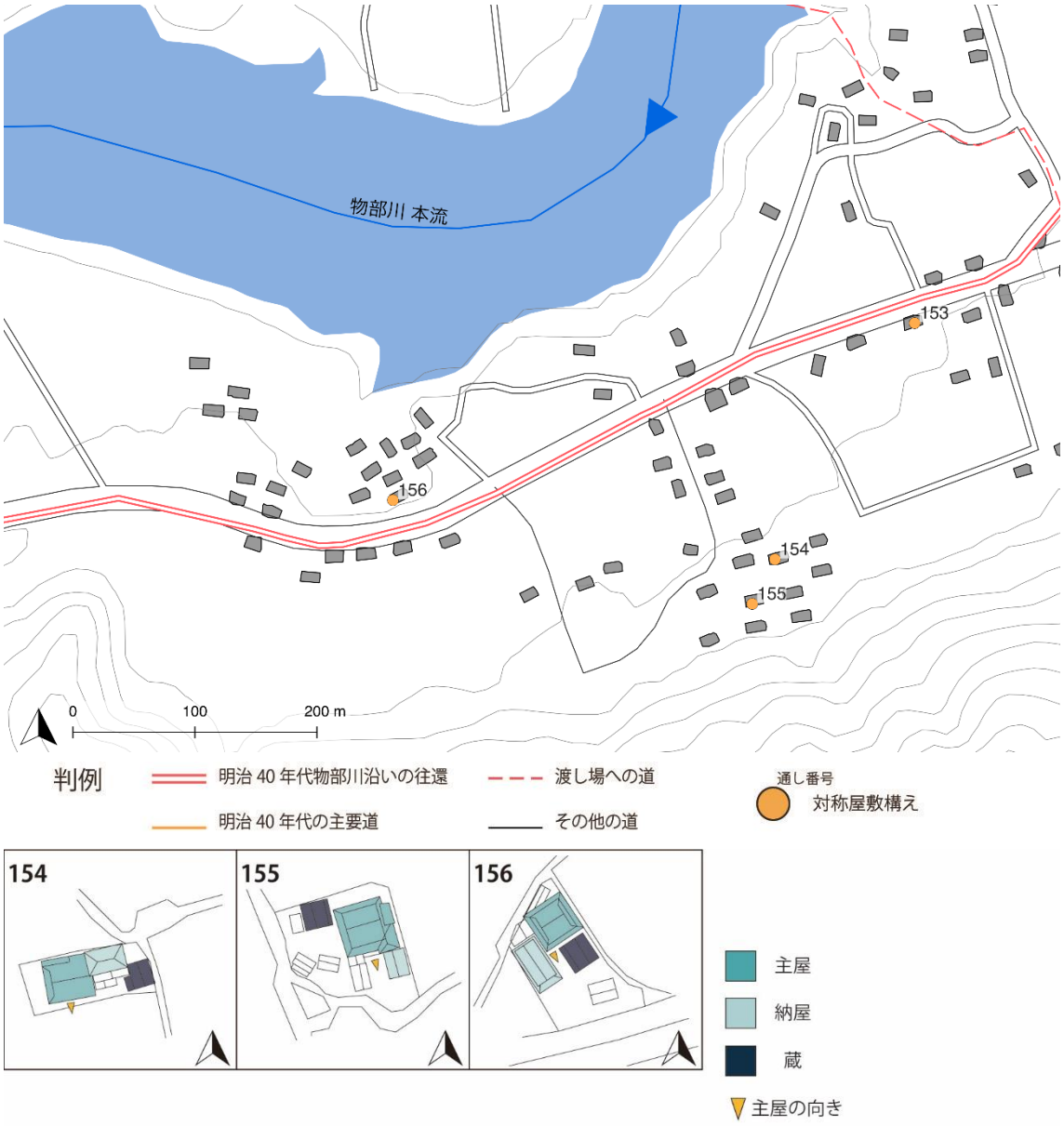

138
139
140
141
142
143
144
145
主屋
納屋
蔵
主屋の向き

美良布

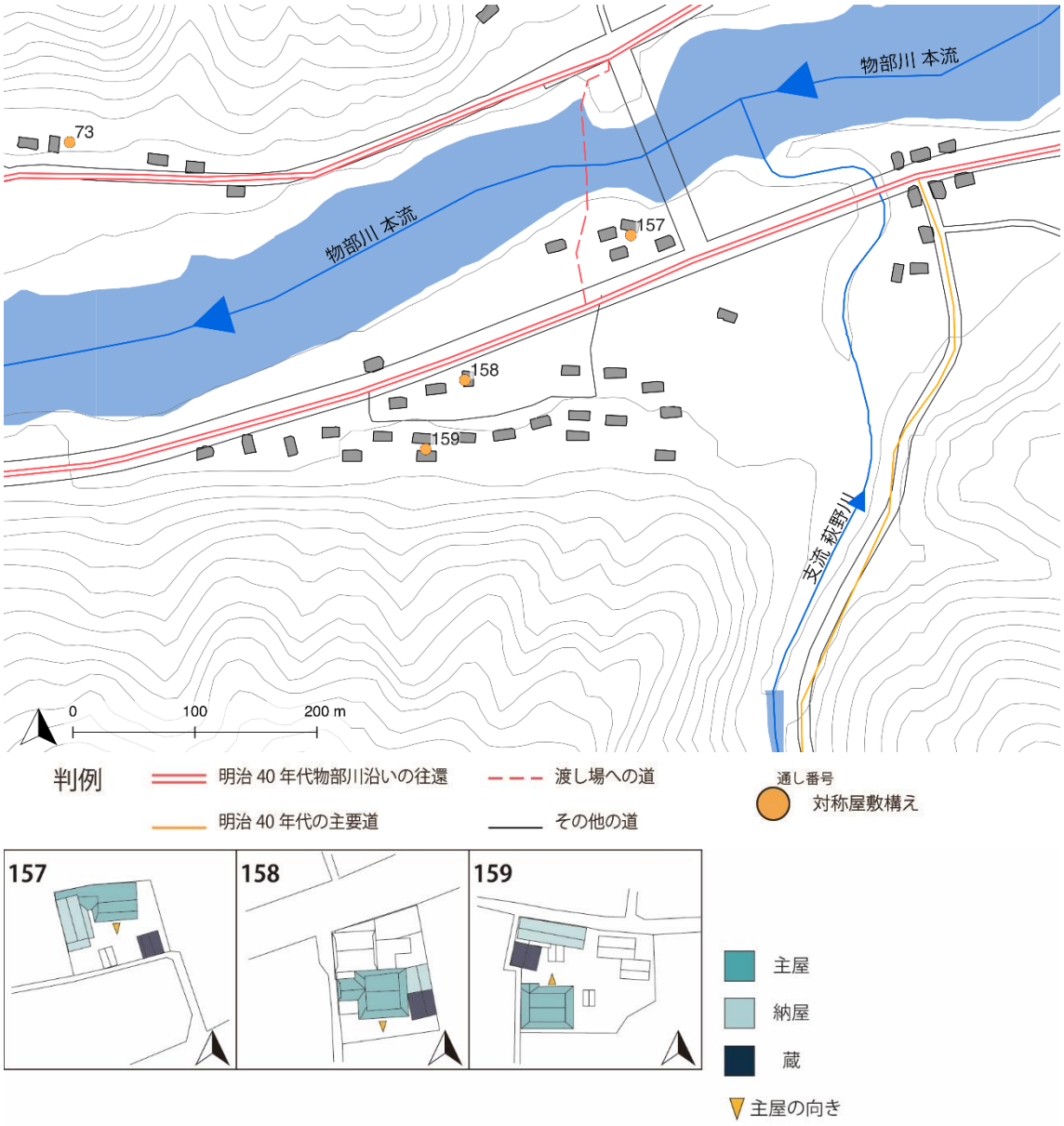
下野尻


物部川 本流
153
151
152
156
154
155
0
100
200 m
判例
明治 40 年代物部川沿いの往還
明治 40 年代の主要道
渡し場への道
その他の道
通し番号
対称屋敷構え
152
153
主屋
納屋
蔵
主屋の向き

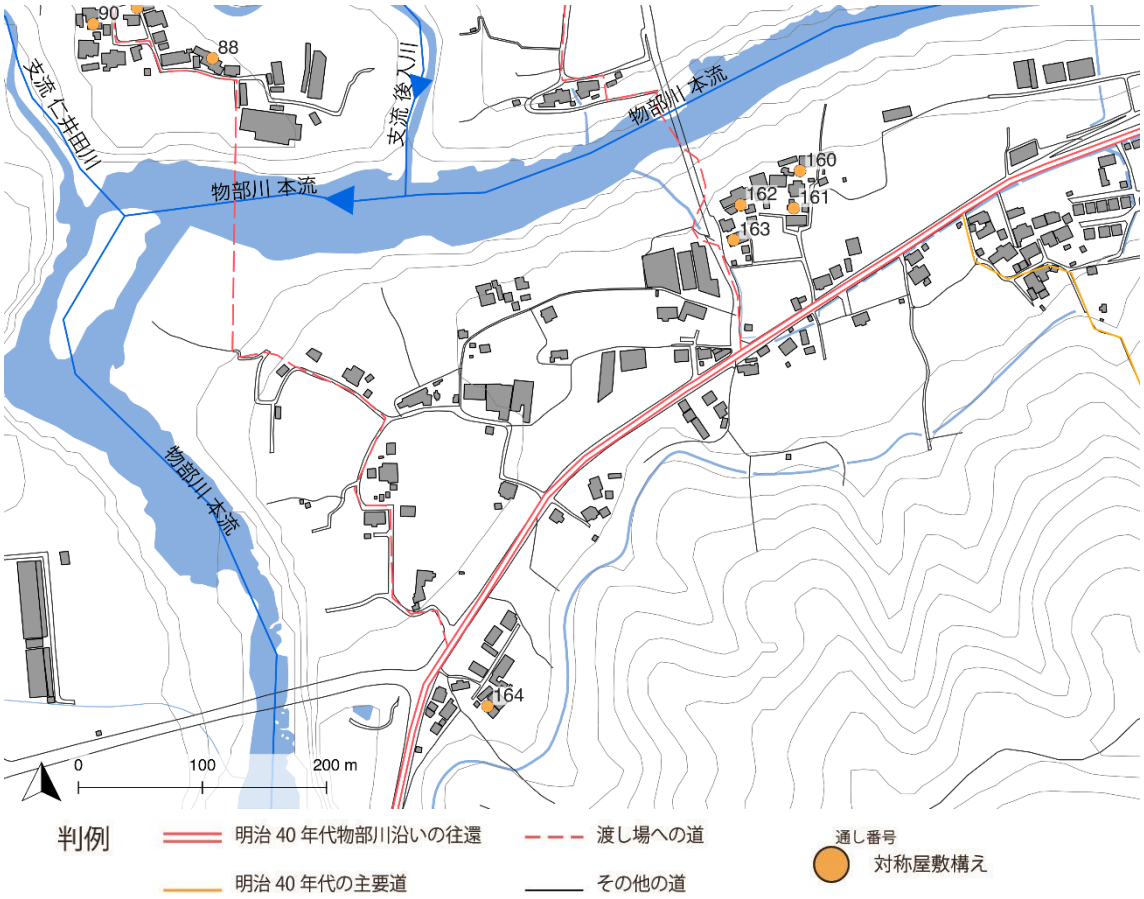
太郎丸

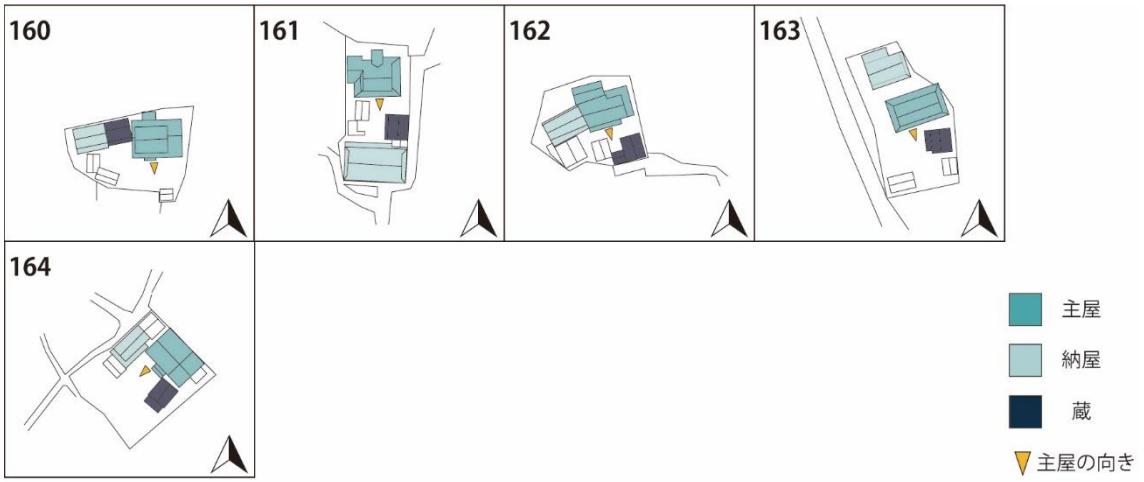

物部川 本流
153
154
155
156
0
100
200 m
判例
明治 40 年代物部川沿いの往還
明治 40 年代の主要道
渡し場への道
その他の道
通し番号
対称屋敷構え
154
155
156
主屋
納屋
蔵
主屋の向き

橋川野

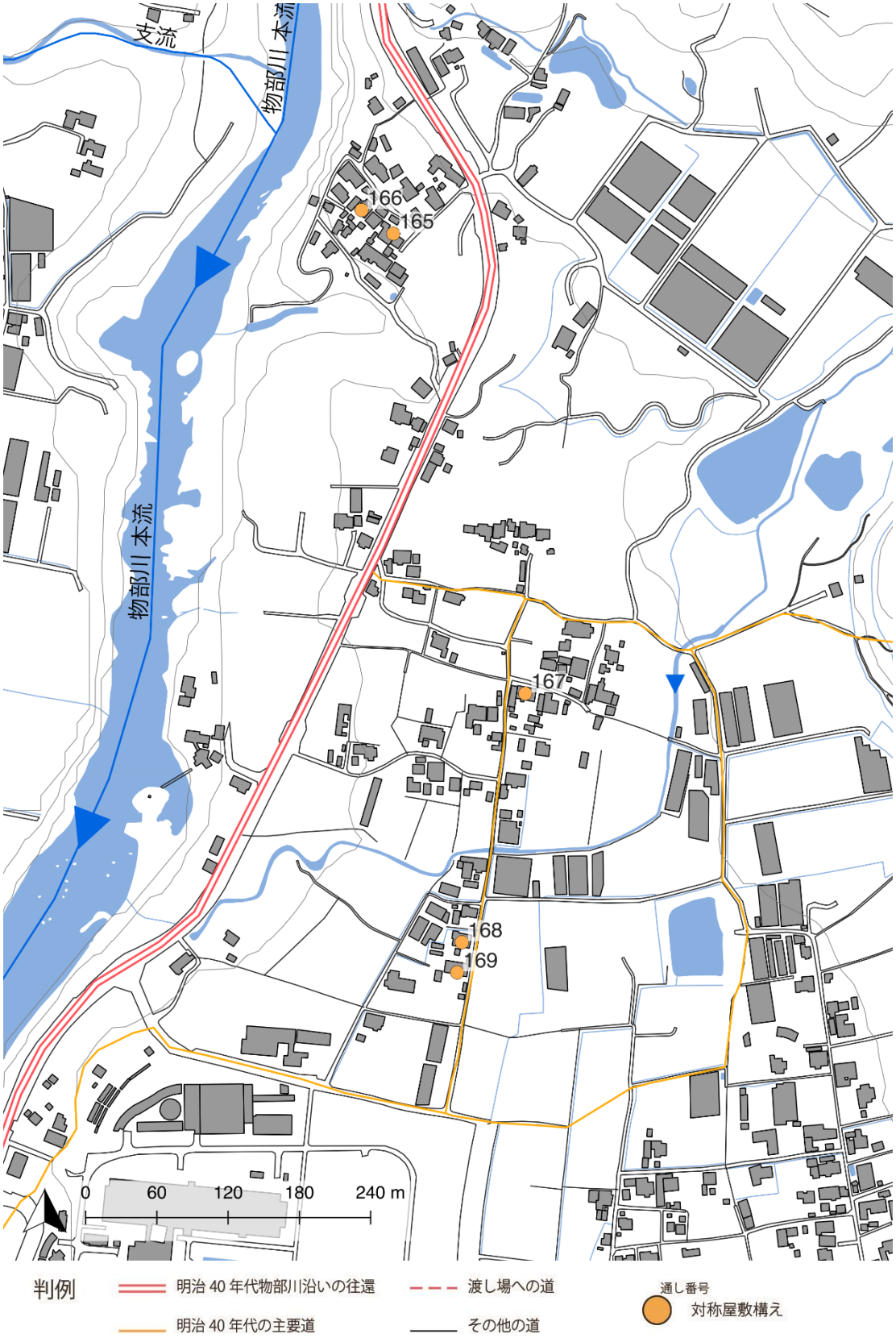

物部川 本流
物部川 本流
73
157
158
159
支流 萩野川
0
100
200 m
判例
明治 40 年代物部川沿いの往還
渡し場への道
明治 40 年代の主要道
その他の道
通し番号
対称屋敷構え
157
158
159
主屋
納屋
蔵
主屋の向き

杉田


90
88
支流 仁井田川
支流 後入川
物部川 本流
物部川 本流
物部川 本流
160
161
162
163
164
0
100
200 m
判例
明治 40 年代物部川沿いの往還
明治 40 年代の主要道
渡し場への道
その他の道
通し番号
対称屋敷構え


160
161
162
163
164
主屋
納屋
蔵
主屋の向き

宮ノ口


支流
物部川 本流
物部川 本流
166
165
167
168
169
0
60
120
180
240 m
判例
明治 40 年代物部川沿いの往還
明治 40 年代の主要道
渡し場への道
その他の道
通し番号
対称屋敷構え

165
166
167
168
169
主屋
納屋
蔵
主屋の向き

神母木

物部川 本流
170
0
40
80 m
判例
明治 40 年代物部川沿いの往還
渡し場への道
通し番号
対称屋敷構え
明治 40 年代の主要道
その他の道
170
主屋
納屋
蔵
主屋の向き

2.　屋敷構え分析表

通し番号	字	屋敷構えの立地		主屋正面方位	屋敷地形状	主屋と納屋の配置型	蔵の位置（前、中、背）	蔵の位置（右、左）	主屋に対する納屋の位置（右、左）	アプローチ
1	猪野々	斜面地		南南東	よこ	？	？	？	右	前
2	猪野々	斜面地		東南東	たて	二の字型	中	左	–	前
3	清爪	斜面地		東南東	たて	並列型	前	右	左	前
4	清爪	平地	山際	南南東	よこ	並列型	前	右	左	前
5	清爪	平地	山際	東南東	よこ	雁行型	前	右	左	前
6	清爪	平地	山際	南東	よこ	並列型	前	右	左	左
7	梅久保	尾根		南南西	よこ	カギ型	前	右	左	右
8	梅久保	尾根		南	よこ	二の字型	前	右	左	前
9	梅久保	尾根		南	よこ	並列型	前	右	左	右
10	梅久保	尾根		南南東	よこ	雁行型	前	右	左	前
11	梅久保	尾根		南南東	よこ	カギ型	前	右	左	前
12	梅久保	尾根		南南東	よこ	並列型	前	右	右	左
13	大井平	尾根		南	よこ	並列型	前	右	右	前
14	大井平	尾根		南西	よこ	並列型	前	右	右	前
15	大井平	尾根		南南西	よこ	カギ型	前	右	右	右
16	大井平	尾根		南南東	たて	カギ型	前	右	右	前
17	大井平	尾根		南南東	たて	カギ型	前	右	右	前
18	大井平	尾根		南南東	たて	カギ型	前	右	右	左
19	永野	平地	山際	南東	よこ	並列型	前	右	右	左
20	永野	平地	山際	南東	よこ	並列型	前	右	右	右
21	永野	平地	山際	南南東	正方形	並列型	前	右	左	左
22	永野	平地	山際	南南東	よこ	並列型	前	右	左	右
23	永野	平地	山際	南南東	よこ	雁行型	中	左	左	右
24	永野	平地	山際	南南東	正方形	並列型	前	右	左	前
25	永野	平地	山際	南南東	よこ	並列型	前	右	右	前
26	永野	平地	山際	南南東	たて	並列型	前	右	左	左
27	永野	平地		南	たて	並列型	前	右	左	右
28	永野	平地		南	正方形	カギ型	中	左	左	前
29	永野	平地		南南東	よこ	並列型	前	右	左	右
30	永野	平地		南	正方形	雁行型	前	右	左	前
31	永野	平地		南南東	たて	カギ型	前	右	右	左
32	永野	斜面地		南西	たて	カギ型	背	左	左	右
33	朴ノ木	平地	山際	南東	よこ	並列型	前	右	左	左
34	朴ノ木	平地	山際	南南東	よこ	並列型	前	右	左	右
35	朴ノ木	平地	山際	南南東	よこ	並列型	前	右	右	前
36	朴ノ木	平地	山際	南南東	正方形	並列型	前	右	右	前
37	朴ノ木	平地	山際	南東	よこ	並列型	前	右	左	右
38	朴ノ木	平地		南南東	正方形	並列型	前	右	左	右
39	朴ノ木	平地	山際	南南東	よこ	カギ型	前	右	右	前
40	朴ノ木	平地	山際	南南東	正方形	並列型	前	右	左	前
41	朴ノ木	平地	山際	南南東	よこ	並列型	前	右	左	前
42	朴ノ木	平地		南	よこ	並列型	前	右	右	右
43	朴ノ木	平地		南南東	よこ	並列型	中	左	右	前
44	朴ノ木	平地		南東	正方形	並列型	前	右	左	背面or左
45	日ノ御子	斜面地		南南西	正方形	カギ型	前	右	左	右
46	日ノ御子	斜面地		南南西	よこ	並列型	中	左	右	右
47	日ノ御子	斜面地		南南西	よこ	並列型	前	右	左	左
48	日ノ御子	斜面地		南	よこ	並列型	前	右	左	前
49	日ノ御子	斜面地		南	よこ	カギ型	前	右	左	右
50	日ノ御子	斜面地		南南西	よこ	並列型	前	右	右	左
51	日ノ御子	斜面地		南	よこ	並列型	前	右	右	前
52	日ノ御子	斜面地		南	たて	二の字型	中	右	–	左
53	日ノ御子	斜面地		南	たて	？	前	右	–	背面
54	有瀬	斜面地		南西	よこ	カギ型	中	右	左	右
55	有瀬	斜面地		南	よこ	並列型	前	右	左	前
56	五百蔵	平地	山際	南	よこ	並列型	前	右	右	前
57	五百蔵	平地	山際	南東	よこ	カギ型	前	右	左	前
58	五百蔵	平地	山際	南南西	よこ	カギ型	前	右	左	前
59	五百蔵	平地		南南東	正方形	カギ型	中	右	左	前
60	五百蔵	平地	山際	南	たて	並列型	前	右	左	右

通し番号	大字	屋敷構えの立地		主屋正面方位	屋敷地形状	主屋と納屋の配置型	蔵の位置（前、中、背）	蔵の位置（右、左）	主屋に対する納屋の位置（右、左）	アプローチ
61	五百蔵	斜面地		南東	よこ	並列型	前	右	左	前
62	五百蔵	斜面地		南南東	よこ	カギ型	前	右	左	右
63	五百蔵	斜面地		南南東	よこ	並列型	中	右	左	背面
64	五百蔵	平地	山際	南南西	よこ	並列型	前	右	右	前
65	五百蔵	平地	山際	南南西	正方形	並列型	前	右	左	右
66	五百蔵	平地	山際	南	よこ	並列型	中	右	左	右
67	白川	斜面地		南西	よこ	カギ型	中	？	右	右
68	白川	斜面地		南南西	よこ	カギ型	前	右	左	前
69	白川	斜面地		南南西	よこ	並列型	前	右	右	左
70	白川	斜面地		西南西	たて	カギ型	前	右	右	前
71	白川	斜面地		南西	よこ	並列型	中	右	左	前
72	白川	斜面地		西	よこ	並列型	前	右	左	左
73	白川	平地	山際	南	よこ	カギ型	前	右	右	右
74	白川	平地	山際	南南東	たて	カギ型	前	右	右	前
75	佐竹	尾根		南西	正方形	カギ型	前	右	左	右
76	有谷	尾根		南南西	よこ	カギ型	中	？	左	前
77	有谷	尾根		南	よこ	カギ型	前	右	右	前
78	有谷	谷		南東	よこ	カギ型	中	？	左	右
79	有谷	斜面地		南	たて	雁行型	前	右	左	前
80	中後入	尾根		南	よこ	カギ型	前	右	左	左
81	中後入	尾根		南	よこ	並列型	前	右	右	前
82	中後入	尾根		南南西	よこ	カギ型	前	右	左	前
83	中後入	斜面地		南南西	よこ	並列型	前	右	左	前
84	本村	尾根		南南西	よこ	カギ型	前	右	左	左
85	本村	尾根		南	よこ	並列型	前	右	左	右
86	本村	平地	山際	南南西	正方形	カギ型	背	左	左	前
87	本村	平地	山際	南南西	よこ	雁行型	中	左	左	背面
88	本村	平地		南南西	よこ	並列型	前	右	左	前
89	本村	平地		南南東	正方形	？	？	？	？	左
90	本村	平地		南	たて	カギ型	前	右	左	前
91	佐野	平地		南南東	よこ	並列型	中	右	左	前
92	佐野	平地		南南東	正方形	カギ型	前	右	左	前
93	佐野	平地	山際	南南東	正方形	二の字型	中	右	－	右
94	佐野	平地		南	よこ	並列型	前	右	左	左
95	佐野	平地	山際	南	たて	カギ型	背	右	左	右
96	佐野	平地	山際	南南東	正方形	カギ型	前	右	左	右
97	佐野	平地	山際	南	たて	カギ型	中	右	左	右
98	楠目	平地		南東	よこ	カギ型	前	右	左	前
99	楠目	平地		南東	よこ	カギ型	背	左	左	前
100	楠目	平地		南西	よこ	カギ型	前	右	左	右
101	楠目	平地		？	たて	？	？	右		左
102	楠目	平地		南	たて	カギ型	背	左	左	前
103	永瀬	斜面地		西北西	よこ	並列型	前	左	左	前
104	永瀬	斜面地		西北西	たて	カギ型	前	左	左	前
105	永瀬	斜面地		南	たて	二の字型	前	右	－	前
106	永瀬	斜面地		南	たて	カギ型	前	左	右	左
107	永瀬	斜面地		西南西	よこ	並列型	前	左	左	前
108	蕨野	斜面地		西	よこ	カギ型	前	左	右	前
109	蕨野	斜面地		北西	たて	カギ型	前	右	左	背面
110	白石	斜面地		南南西	よこ	カギ型	中	左	左	右
111	白石	斜面地		西北西	よこ	並列型	前	左	右	左
112	白石	斜面地		南南西	よこ	カギ型	前	右	左	右
113	白石	斜面地		南東	よこ	並列型	前	右	左	右
114	白石	斜面地		南南東	正方形	並列型	前	右	左	前
115	白石	斜面地		北西	正方形	雁行型	前	右	左	前
116	根須	斜面地		南	たて	雁行型	中	右	右	前
117	根須	斜面地		西	よこ	並列型	中	左	右	前
118	根須	斜面地		南西	たて	二の字型	中	右	－	前
119	根須	斜面地		西北西	よこ	並列型	前	左	右	前
120	根須	斜面地		西	よこ	並列型	前	左	右	前

通し番号	大字	屋敷構えの立地		主屋正面方位	屋敷地形状	主屋と納屋の配置型	蔵の位置（前、中、背）	蔵の位置（右、左）	主屋に対する納屋の位置（右、左）	アプローチ
121	根須	斜面地		南南西	たて	カギ型	前	左	右	前
122	根須	斜面地		北北西	よこ	並列型	前	右	左	前
123	吉野	平地	山際	南	正方形	並列型	前	右	右	左
124	吉野	平地	山際	北北西	たて	二の字型	中	右	−	左
125	吉野	平地	山際	南南東	たて	カギ型	前	右	右	右
126	吉野	平地	山際	南南東	よこ	並列型	背	左	右	背面or右
127	吉野	平地	山際	南東	よこ	雁行型	前	右	左	前
128	吉野	平地	山際	南南東	よこ	並列型	前	右	右	背面or右
129	吉野	平地	山際	南	正方形	並列型	前	右	左	右
130	吉野	平地	山際	南南東	たて	並列型	前	左	右	背面
131	吉野	平地	山際	南南東	たて	カギ型	前	右	左	右
132	小川	平地		南東	よこ	カギ型	前	右	右	前
133	小川	平地		南東	正方形	カギ型	前	右	右	前
134	小川	平地		南東	たて	カギ型	前	右	右	左
135	小川	平地		南東	正方形	カギ型	前	右	右	左
136	小川	平地		南	正方形	並列型	前	右	右	右
137	小川	平地		南	よこ	カギ型	背	左	右	前
138	韮生野	平地		南南東	よこ	カギ型	前	右	右	右
139	韮生野	平地		南南東	よこ	カギ型	前	右	左	右
140	韮生野	平地		南南東	よこ	並列型	前	右	左	前
141	韮生野	平地		南南東	正方形	並列型	前	右	右	右
142	韮生野	平地	山際	南南東	よこ	並列型	前	右	右	前
143	韮生野	平地		南東	よこ	並列型	前	右	右	前
144	韮生野	平地	山際	南	よこ	カギ型	中	左	右	左
145	韮生野	平地	山際	南南東	よこ	カギ型	中	左	右	右
146	美良布	平地		南東	よこ	並列型	中	左	左	前
147	美良布	平地		南南東	正方形	並列型	前	右	右	前
148	美良布	平地		南	正方形	カギ型	背	？	右	背面
149	美良布	平地		南	たて	並列型	前	右	左	右
150	美良布	平地		南	たて	並列型	前	右	左	左
151	美良布	平地	山際	南	よこ	並列型	前	右	右	左
152	下野尻	平地	山際	南	よこ	並列型	前	右	左	左
153	下野尻	平地	山際	南南東	よこ	カギ型	前	右	左	前
154	太郎丸	平地	山際	南南東	よこ	並列型	前	右	右	右
155	太郎丸	平地		南南東	正方形	カギ型	背	左	右	左
156	太郎丸	平地		南南東	たて	カギ型	中	右	左	右
157	橋川野	平地		南	正方形	カギ型	前	右	左	前
158	橋川野	平地	山際	南	たて	カギ型	前	右	右	右
159	橋川野	平地	山際	北	たて	二の字型	中	左	左	右
160	杉田	平地		南	よこ	並列型	中	？	左	前
161	杉田	平地		南	たて	二の字型	前	右	−	右
162	杉田	平地		南南東	正方形	並列型	中	右	左	前
163	杉田	平地		南南東	たて	二の字型	中	右	−	前
164	杉田	平地		南西	たて	カギ型	前	右	左	左
165	宮ノ口	斜面地		南西	よこ	並列型	前	右	右	右
166	宮ノ口	斜面地		南西	たて	カギ型	前	右	左	左
167	宮ノ口	平地		南	たて	カギ型	前	右	左	前
168	宮ノ口	平地		南	たて	？	前	右		前
169	宮ノ口	平地		南	たて	カギ型	前	右	左	右
170	神母木	平地		南	よこ	並列型	前	右	左	前

主要参考文献一覧

１）中野茂夫、藤川昌樹、安藤邦廣、後藤治、堀江亨、黒板貴裕：つくば市の集落空間と屋敷地の構成-大村・金田村・洞下村を事例に-、日本建築学会計画論文集第 578 号,p139−145、 2004.4
２）山本直彦、平尾和洋、宮内杏里：歴史的風土特別保存地区における民家の屋敷構えに関する研究-明日香村の奥山・飛鳥・河原・野口・岡・島庄の六大字を事例として-、日本建築学会計画系論文集、大 81 巻、第 721 号、p675-685、2016.3
３）青木秀史、畔柳昭雄：荒川流域における水屋・水塚を備えた屋敷の立地状況とその空間変容に関する研究、日本建築学会計画論文集第 80 巻第 710 号 p851−861、 2015.4
４）香北町教育委員会：香北町誌、香北町教育委員会、1968
５）黒野弘靖、菊池成朋：村落と屋敷の対応関係から見た散村の構成原理-砺波散居村における居住特性の分析その２-、日本建築学会計画系論文集、第 507 号、p151-155、1998.5
６）黒野弘靖、菊池成朋、田村友寛、鈴木成文：屋敷構えと集落空間構成の関係-仙台市藤田新田の調査報告　その４、日本建築学会大会学術講演梗概集（九州）、1989.10
７）菊池成朋、黒野弘靖、鈴木成文：集落空間の領域構成の特徴-仙台市藤田新田の調査　その１、日本建築学会大会学術講演梗概集（北海道）、1986.8、
８）宮崎美夏、坪井千尋、小嶋雅代、増井正哉、米田麻衣子、上野邦一：徳島県祖谷地方の山間集落における景観保存に関する研究-その２　屋敷地と建物の外観の形状の現状と変遷、日本建築学会近畿支部研究報告集、2002
９）別所匠、大森洋子：阿蘇カルデラ内に立地する農村集落の屋敷地の空間構成に関する研究、日本建築学会九州支部研究報告第 53 号、2014.3
10）横田麻琴、黒野弘靖：中山間地の地形的特徴と生活からみた〈逆谷〉集落の空間構成、日本建築学会北陸支部研究報告集第 49 号、2006.7
11）河村晋吾、松森一行、内田文雄：離島農村集落の住空間構成　集落の生活空間構成に関する研究　その２、日本建築学会大会学術講演梗概集（東海）、2003.9
12）清水綾子、大場修：旧東海道沿いの街道集落における家屋配置と平面構成　甲賀市旧市場村を事例として、平成 22 年度日本建築学会近畿支部研究発表会、2010
13）石田寿信：総社町山王集落における集落形成と屋敷構成の特徴について－養蚕住宅及び集落の形成・変化・継承に関する研究 - その１-、日本建築学会関東支部研究報告集、p569-572、 2009
14）月舘敏栄、佐々木嘉彦、渡辺正朋、梅津光男、戸部栄一：雪と屋敷構え-積雪地における生活的・空間的対応に関する研究(その８)、日本建築学会東北支部研究報告集、p157-160、1984
15）土佐山田町史編集委員会：土佐山田町史、土佐山田教育委員会、1979
16）矢島仁吉：集落地理学、古今書院、p122-123、1956
17）建築大辞典第２版、彰国社、p1664、1993
18）日本民俗建築学会編：図説　民俗建築大辞典、柏書房、2001
19）坂本正夫：土佐の川舟民俗誌、和田書房、1994

20）国土交通省四国整備局　高知河川国道事務所 Copyright(C)2007 All Rights Reserved.
http://www.skr.mlit.go.jp/kochi/work/monobeseibikeikaku/home/01gaiyou.html:2018.12 取得
21）日本学術会議、土木工学・建築学委員会、国土と環境分科会：報告　自然共生型流域圏の構築を基軸とした国土形成に向けて－都市・地域環境の再生－、2008.7
22）国土交通省関東地方整備局　荒川上流寡占事務所　大囲堤・水塚
http://www.ktr.mlit.go.jp/arajo/arajo00562.html　2018.1 取得
23）本田友常：蘭島を中心とする有田川中流域に残存する民家の特性、蘭島及び三田・清水の農村計画保存系計画書１部保存調査第５章景観の構造とその特性第５節
http://www.town.aridagawa.lg.jp/aragijimakeikan/updata/0_contents.pdf：2018.5 取得
24）佐々木真美、木方十根、小山雄資：麓集落の立地と地域開発に関する統計的解析－流域圏からみた麓集落の立地構成と景観特性に関する研究－、2017.3
25）川上貢、永井規男、日向進、谷直樹、町田玲子、福田敏朗、中村伸夫、中川等：天若の集落形態と構成-桂川中流域天若の民家に関する総体的研究-建築学会近畿支部研究報告集 9012、1889
26）横尾俊介、加藤丈士、畔柳昭雄：信濃川流域の集落における屋敷の空間的特性について-河川伝統技術に基づく集落の空間的変容に関する研究　その１-、日本建築学会大会学術講演梗概集（近畿）、2005.9
27）加藤丈士、横尾俊介、畔柳昭雄：信濃川流域の集落における屋敷の空間的特性について-河川伝統技術に基づく集落の空間的変容に関する研究　その２-、日本建築学会大会学術講演梗概集（近畿）、2005.9
28）青木秀史、畔柳昭雄：荒川流域における水屋・水塚を備えた屋敷の立地状況とその空間変容に関する研究、日本建築学会計画論文集第 80 巻第 710 号 p851−861、 2015.4

謝辞

本稿をまとめるにあたり、ご指導いただいた渡辺准教授、田島准教授、西内講師に心より感謝申し上げます。

渡辺准教授に与えていただいた物部川流域圏中流部の屋敷構えというテーマは、現地調査や文献から多くの屋敷構えに触れることができ、研究など多くの問題に行き詰っていた私にとって建築のおもしろさを再認識させ、奮起させてくれるものでありました。多くの問題を抱えていた私に最後まで助言を与え導いてくれたこと、本当にありがとうございました。

田島准教授には、分析における具体的な手法や示し方をご教授いただきました。それら効果的な分析方法によって本研究の結果を導き出すことができました。

西内講師には、Ｍ１の社会システム工学特論の里道班関係でいただいたご意見とご指導は本研究を進めるにあたり重要であったと感じています。

研究室で過ごした 3 年弱の期間は先輩方、同輩達、後輩達からのアドバイスや協力に支えられたものでありました。研究を最後まで続けることができたのも研究室メンバーのおかげであると感じています。

最後に、6 年間の大学生活を理解し、支援し続けてくれた両親に心より御礼申し上げます。